

# 関山

かんざん

第21号

寺報 中尊寺

目次

|                       |                               |        |     |
|-----------------------|-------------------------------|--------|-----|
| 寺報 グラビア               |                               |        |     |
| 鑽仰                    | 貫首                            | 山田 俊和  | 8   |
| 「平泉世界遺産の日」シンポジウム      |                               |        |     |
| 〔基調講演〕                |                               |        |     |
| 「風景が心を耕す」             | —岩手文化へ 高まる共感—                 | 原 剛    | 11  |
| 〔パネルディスカッション〕         |                               |        |     |
| 「平泉—文化としての環境」         | パネリスト 原 剛・藤沢摩彌子<br>大平 聡・藤里 明久 |        | 27  |
| コーディネーター              | 佐々木邦世                         |        | 45  |
| 人・社会とつながる             | 高橋美千子                         |        | 45  |
| 第五十四回 平泉芭蕉祭全国俳句大会     |                               |        |     |
| 記念講演                  |                               |        |     |
| 「みちのくの芭蕉」             | —「おくのほそ道」を中心に—                | 宮坂 静生  | 51  |
| 今年 よみがえる「信の風光」        | 佐々木邦世                         |        | 70  |
| 天台宗僧侶の卵たち             | 桑谷 祐顕                         |        | 74  |
| 平泉のまちづくり              | 尾崎 信                          |        | 88  |
| 〔グラビア解説〕              |                               |        |     |
| 還蔵 紺紙金銀字交書一切経         | 菅野 澄円                         |        | 95  |
| 北米の一隅に灯った天台の法灯—その二十年— | 開真・ポール・ネエモン                   |        | 97  |
| 何も持っていない手             | 北嶺 澄照                         |        | 104 |
| 「心齋」                  |                               | 小野寺伸吾  | 108 |
| 〈予告〉                  |                               |        |     |
| 「平泉」世界文化遺産登録          |                               |        |     |
| 五周年記念行事について           |                               | 中尊寺総務部 | 110 |
| あら？ 中尊寺の千手観音様が        | どんぐりメンバーより                    |        | 112 |
| 座禅止観のおすすめ             |                               | 清水 秀法  | 113 |
| 風信／語録                 |                               |        | 116 |
| 関山植物誌〈7〉              |                               | 佐々木典子  | 117 |
| 〔福聚教会・中尊寺支部便り〕        |                               |        |     |
| この一年を振り返って            |                               | 佐々木浩子  | 118 |
| 新刊紹介                  |                               |        | 120 |
| 関山句囊・歌籠               |                               |        | 122 |
| 御神事能番組                |                               |        | 132 |
| 陸奥教区宗務所報              |                               |        | 133 |
| 執務日誌抄                 |                               |        | 136 |
| 御奉納者御芳名               |                               |        | 147 |
| 浄財御奉納者御芳名             |                               |        | 147 |
| 不動尊篤信御奉納者御芳名          |                               |        | 148 |

今時觀世音菩薩慈悲舉主復說秘密如意  
 心輪陀羅尼但有所須皆志向未有二種一  
 者世間財二者出世間財世間財者金銀珠寶  
 世財者福德智慧具二莊嚴身心悅順眾人愛  
 敬  
 敬勝救一切眾生苦慈心增長能與智者樂  
 資生利益能加勢力惟此陀羅尼難得不得  
 向餘人說若欲得此如意輪陀羅尼持家勝  
 驗者至心一切誓一切業障與不淨業悉誦  
 持一無過各所誦課克復應觀世音菩薩  
 名及如意輪陀羅尼并稱彼人名字或得思  
 念若王王子妃后公主婆羅門刹帝利舍首陀  
 后男后女童男童女種種外道但欲親觀者  
 應稱彼名每至五更使得課免若求取勝驗  
 者或親觀國王於七日中每至五更誦一千  
 八遍即得相見若欲見妃后應誦九百遍若  
 欲見王子誦八百遍若欲見宮人誦七百遍  
 若欲見公主誦六百遍若欲親觀蓮華門頌  
 五百遍若欲觀刹利誦四百遍毗舍誦三  
 百遍比丘比丘尼一百遍優婆塞優婆塞九  
 十遍童男童女六十遍此名親近擇法能觀  
 辨一切善財物奴馬一切樂具有所愛樂者  
 或在遠夢意所求之如風疾至凡欲為事但  
 得課免其業即成若欲見觀世音菩薩誦一  
 千八遍即見真身一切圓滿若欲見金剛觀

還蔵された金銀字經  
 (平成27年8月7日、記事95ページ)



弁慶とともに登る中尊寺月見坂  
車いす体験会

月見坂の美しい景観を、車いす利用者の方にも安全に楽しく登っていただくという企画。ここでいう「弁慶」とは介助するスタッフのこと。(9月26～27日)

(主催：平泉ユニバーサル観光推進会議)



国連防災会議エクスカーション一行来山  
経蔵では、ドレンチャーを起動してのデ  
モンストレーションが行われた。(3月19日)



小友地藏尊東屋落成

陸前高田市の小友地藏尊に東屋が建てられた。貫首ほか3名が現地を訪れ、東日本大震災物故者追悼並びに東屋落成法要が行われた。(11月11日)

玉川学園奉納演奏 (8月21日記事45ページ)



オーケストラ部

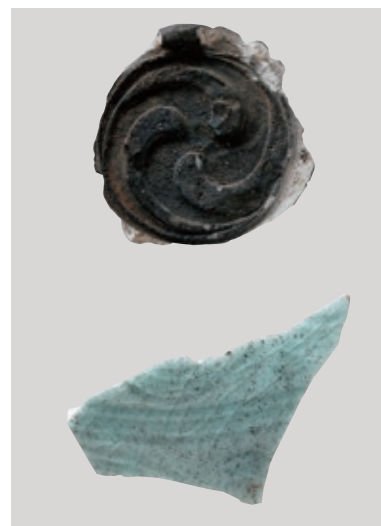


ハンドベル部



「平泉世界遺産の日」平和祈願法要

木ノ下寂俊天台宗務総長、達増拓也岩手県知事、青木幸保平泉町長等多数が参加。東日本大震災で亡くなられた方々の冥福と被災地の早期復興、世界平和を祈った。(6月27日)



中尊寺大池跡発掘調査

12世紀の貴重な遺物が出土した。三つ巴文軒丸瓦 (左上)、青白磁<sup>めいびん</sup>梅瓶 (左下)。青白磁梅瓶は青白磁の瓶子のこと。特別に高価なものであり、平泉でも出土例は少ない。



広告



平安美術工芸の粋を尽くした光堂であったが元祿二年、芭蕉が訪れたときには、すでに「七宝散りうせて、金の柱も朽ち」という状態であった。昭和の大修理で、人間国宝の松田権六先生・大場松魚先生に、金沢の伝統漆芸の技量をもって、取り組んでいただいた。

いま、国宝建造物第一号の金色堂は世界遺産「平泉」の基点、眼目として浄土の風景を、世界に語りかけています。

# 漆聖——金沢の伝統漆芸家によって蘇った 東北・平泉 中尊寺「金色堂」

■松田権六先生 略歴

石川県金沢市生まれ。7歳で金沢の漆業を始める。1949年(昭和24年)東京美術学校教授に就任。1950年(昭和25年)で教職を離れ、1954年(昭和29年)日本美術院員となる。1955年(昭和30年)には人間国宝に認定される。

■大場松魚先生 略歴

大場宗孝に学んだ後、昭和18年上京。松田権六の内弟子、伊勢神宮式部卿御神文「御説経御太刀舞」(昭和27年及び27年)、中華金色堂の保存修理(昭和30年)に従事したことがきっかけとなり、本格的な平泉の技法に取組む。1985年(昭和37年)4月20日に人間国宝に認定される。

■伝統漆工芸「平文(ひらもん)」技法

金や銀の粉を糊に溶かし、漆の表面に貼り付けて、その上に漆を塗り重ねる部分が見えなまで磨き出す。漆のまを削りながら艶感を出す方法。平文技法を金堂及び財代のように作品制作のうえで本格的に生かした作家は大場松魚先生が初めて、先生の子に13平文技法が継がれたといわれています。



平泉・中尊寺

天台宗東北大本山。十一世紀、奥州藤原氏が初代清原公が鎮座した。平泉の繁栄を象徴する。中尊寺は、平泉の繁栄を象徴する。中尊寺は、平泉の繁栄を象徴する。中尊寺は、平泉の繁栄を象徴する。



《国宝》金色堂

天治元年(1124)の建立。昭和37年(1962)から六ヶ年、国の補助を受けて金色堂の解体大修理が行われました。二本尊は阿彌陀如来、堂全体を金堂で覆い、扉金色の彫刻浄土を現世に表しています。内陣は醍醐天皇、高倉などの漆工芸や精緻な彫金で荘厳され、平泉仏教美術の最高峰を成しています。醍醐の内陣は奥州藤原氏時代の彫造体が認められています。中尊寺は、金色堂始め三千金堂の国宝・重要文化財を伝える平泉仏教美術の宝庫で、ユネスコの世界文化遺産に登録されています。



【F5】平成28年「平泉」世界文化遺産登録5周年

秘佛「一字金輪佛頂尊」御開帳

●会期 平成28年 6月29日(水・平泉の日)～11月6日(日)  
●会場 瀧西城址仏堂  
●拝観料 大人……500円 小・中高生……200円  
【金色堂との共通拝観料】 大人……1,200円 高校生……600円 中学生……400円 小学生……300円  
●拝観時間 午前8時30分～午後5時 (11/6からは午後4時30分まで)

金沢の先人たちが修復した中尊寺「金色堂」を訪ねて東北・平泉の旅はいかがですか？

中尊寺の案内  
●乗車(平日利用)  
●東北新幹線(大宮～平泉)利用  
●乗車(平日) 大宮～平泉(約1時間15分)  
●乗車(平日) 平泉～大宮(約1時間15分)

金沢 大宮 一ノ関  
所要時間 約3時間40分(概算)

北陸新幹線「かがやき」 東北新幹線「はつかり」

世界遺産 天台宗東北大本山 関山 中尊寺

お問い合わせ  
中尊寺事務局 岩手県西磐井郡平泉町衣田202  
TEL.0191-46-2211 中尊寺 検索

全国紙に全面広告を掲出(6月7日)

北陸新幹線の開通にあたって、読売新聞北陸版・首都圏版に全面広告を掲出した。

秋の藤原まつり 能「猩々」(11月3日)



三陸郷土芸能奉演(10月10日～12日)



しらほまとらまい 白浜虎舞(釜石市)



すこう たうえおど 菅生田植踊り(大船渡市)



つがるいし 津軽石さんさ踊り(宮古市)



つきさわよろいねんぶつげんばい 槻澤 鎧念仏剣舞(陸前高田市)



おおaura 大浦さんさ踊り(山田町)



地元園児による「謡」(11月3日) 町内二葉きらり園の園児48名、元気よく。





平和合作画制作



御神事能地謡方勤仕50年感謝状贈呈  
山田順作・高橋幸一の両氏に貫首から  
感謝状が贈られた。(5月5日)



花まつり子供大会 (4月18日)



御神事能

山内子弟北嶺航君、菅原光哉君が今年も舞台を勤めた。(5月4日～5日)



中尊寺奉納コンサート

オオフジツボと法霊神楽(八戸市)の  
コラボレーション。(8月16日)



竹下巨復興大臣来山 (9月22日)



東日本大震災被災地復興祈念法要

天台宗天聲会の方々がお来山され、合曼供が奉修された。(11月5日)



平和の鐘

平泉ユネスコ協会文化財愛護少年団の子どもたち。



世界寺子屋運動

ユネスコでは「識字教育」を中心とした教育支援や地域活性化支援を行っている。この日の募金活動もその一環。

いつまでもいつも八月十五日

綾部 仁喜

# 鑽 仰

中尊寺貫首 山田俊和

天台宗祖師先德鑽仰大法会が、平成二十四年から十年間にわたって厳修されています。鑽仰とは、学徳を慕って学ぶことです。

平成二十五年は、中尊寺開山慈覚大師円仁一一五〇年御遠忌でした。円仁は、延暦十三年（七九四）に栃木県都賀郡に誕生し、比叡山にて伝教大師最澄の弟子となり、仏道修行に励み、如法写経を始めました。承和五年（八三八）から十年間入唐求法され、世界三大旅行記の一つ、『入唐求法巡礼行記』を残されています。帰国後、比叡山に常行堂を創り常行三昧を修し、浄土教の基となるお念仏を伝えられました。嘉祥三年（八五〇）に東北地方を巡錫され、中尊寺、毛越寺を開山されました。

中尊寺は、慈覚大師により開山された、天下泰平祈願の道場であり、全ての人々が平等に利益を受けることのできる霊地です。

さて、平成二十八年六月十日は、恵心僧都一〇〇〇年御遠忌。

平成二十八年八月十八日は、宗祖伝教大師御生誕一二五〇年の祝い。

平成二十九年十一月三日は、相応和尚一〇〇〇年御遠忌。

平成三十三年六月四日は、宗祖伝教大師一二〇〇年大遠忌。  
と、大法会が次々に厳修されます。

伝教大師最澄さまは、神護景雲元年（七六七）八月十八日にご生誕され、弘仁十三年（八二二）六月四日に、五十六才をもってご入滅されたと、『叡山大師伝』は伝えております。最澄さまは、大津市坂本の生源寺でご生誕され、父親は三津首百枝、母親は藤原藤子と申されました。十二才にて近江の大国師行表の弟子となり、二十才で東大寺戒壇院で具足戒を受け、正式の僧侶として仏道を歩まれました。

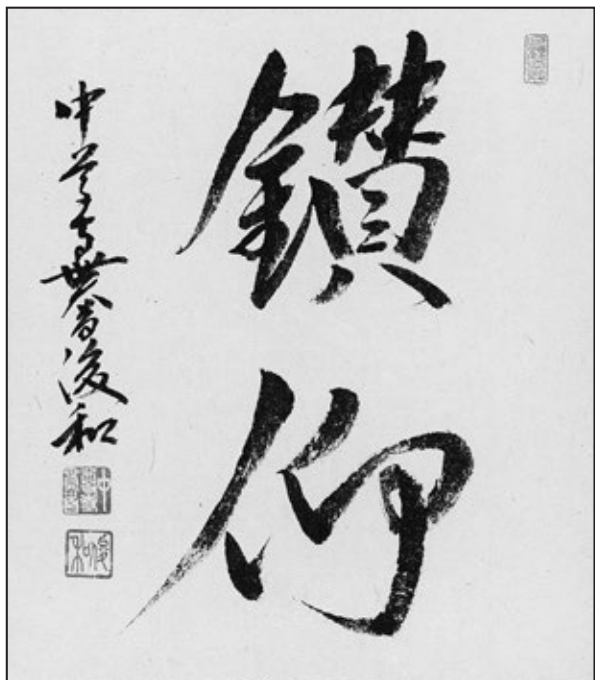
伝教大師さまは、円、密、禪、戒の四宗を融合し、大乘戒壇の建立に心血をそそぎ、日本天台宗を開宗いたしました。

恵心僧都源信さまは、天慶五年（九四二）に大和国にご生誕され、寛仁元年（一〇一七）六月十日にご入滅されました。四十四才の時、念仏往生と実践方法を示した『往生要集』をあらわし、念仏結社二十五三昧会を結成、六道講式を修されています。

建立大師相応さまは、天長八年（八三一）に近江国にご生誕され、延喜十八年（九一八）十一月三日にご入滅されました。法華経常不軽菩薩の、ただ礼拝のみを行わず、の教えにより回峯行を起し、不動明王を感得されました。ちなみに、伝教、慈覚の大師号は、相応和尚さまの奏請によるものです。

私達は祖師先徳の教えを修学し、日々の生活に生かしたいものです。この大法会厳修をとおして、混迷する世界に光明がそがれることを念願いたしております。

平成二十八年は、東日本大震災から五年、中尊寺世界文化遺産登録五周年の年です。その重みをしつかりと受けとめ、今後の一層の発展を期したいと思います。



「平泉世界遺産の日」シンポジウム 基調講演

## 「風景が心を耕す」

— 岩手文化へ 高まる共感 —

講師 原 剛 先生

「平泉—文化としての環境、世界遺産の日のシンポジウム」にお招きいただきましてありがとうございます。東北新幹線に乗りこちらに参ります



と、郡山を過ぎて間もなく車窓に安達太良山が見えてまいります。安達太良の山の頂に本当の空を見つけた高村光太郎とその妻「智恵子抄」の世界が、そして、大崎耕土のあたり車窓いっぱいには小林一茶の句「けいこ笛田はことごとく青みけり」の世界が広がってきます。その風景の先には、大きな熊に倒された熊捕り名人「淵沢小十郎」を悼む熊たちの棲む「なめとこ山の熊」の風景、北上山地が展開してきます。

宮澤賢治の童話「なめとこ山の熊」の一節を紹介します。

熊捕り名人・淵沢小十郎は、その月輪熊をめぐってズドンとやるたびにこう言うのだった。

「熊、おれはてめえを憎くて殺したのですね。だ。おれも商売なら、おめえも射たなきやならねえ。(中略) てめえも熊に生れたが因果なら、おれもこんな商売が因果だ。やい。この次には熊なんぞに生れんなよ」

冬のある日、小十郎は大きな熊と対決、一撃を頭にくらいます。意識が遠のいていく小十郎は遠



くでこういう言葉を聞きました。

「おお小十郎、おまえを殺すつもりはなかった。」

それから三日目の晩。凍てつき山頂に伏せた小十郎を囲んで、黒いものがたくさん環になつて集まつて、じつと雪にひれ伏したまま動かなかつた。

なめとこ山の熊たちは、老いた母と貧しい一家を養うために熊を撃ちはしますけれど、決して熊を憎んでなく……。雪か、花か、母熊と子熊が早春の谷間を隔てて会話をするんですね。子熊が、あれは花だと言つと、母親はいやあれは雪だ。まだ花の季節じゃないつてなことを母と子が対話をする。それをつけて来た小十郎が撃とうとするんですが、小十郎はその母子熊の対話を聞いて胸が痛んだ。そして後退ります。この小十郎は猟師です。赤黒い顔で、体もごりごりして、胸は小さな白ぐらゐある頑丈な、豪気な小十郎ではありませんが、その心の目、心眼は熊の体から後光、つまり仏や菩薩の体から発するという光輝です。熊の

体の背後から後光が射すのを見ることができた。そういう人物だった。

光太郎や賢治の心情を私が思いやる時、車窓に映える自然景観は、光太郎や賢治の心を読みこんでみる主観交じりの「私の風景」に変わります。自然の光景が私の風景に変わります。そして、「私の風景」はかけがえのないその人の心の抛り所、精神形成の空間になり得るのです。

雨が降つて、平泉の水田が潤されて、そこに稲が実り、日本の国土の基本が作られていく。山の斜面に棚田を築き、あるいは水路を築いて、我々は暮らしてきたわけであります。「風土」というのは自然の地形と気候に先人が働きかけて作り出してきたものであります。中尊寺とその周辺に人と自然のどういう歴史があったのかということを知らなければ、単なる景観にすぎません。しかし、この中尊寺とその周辺の風景に、たとえば賢治と小十郎のような物語を重ねることによって、この自然の空間は私だけが認識できる、「私の風景」

になる。そこで我々は少年少女時代を過ごす。そうすると、それがその人の心の原点になるんですね。風景とは精神形成の空間です。「なめとこ山の熊」をあえて冒頭にお話した理由です。

「なめとこ山の熊」は、童話集「風の又三郎―他十八篇」を編纂した岩波文庫本に収められています。実に、一九五一年に初版を出してから現在九十版です。「なめとこ山の熊」のストーリーに共感して、どれほど多くの日本人が自然と人間の営みに深く思いを致すことができたかということが分かります。それはまさに日本の文化でありまして、その文化の原点が、明らかにこの北上山地にあるということ日本人は共有しているのです。

東日本大震災の年二〇一一年十二月十二日、「朝日新聞」朝刊の俳句の欄に、金子兜太先生が首席に選んだ句が載っています。熊に詫ぶ―熊に謝るのですね。「熊に詫ぶ禿頭五尺十八貫」。禿頭は禿げ頭のことですね。禿頭五尺十八貫。禿げ頭の男で背が五尺で体重が十八貫の老人です。「熊に詫

ぶ 禿頭五尺 十八貫」。これは、言うまでもなく淵沢小十郎のことを、朝日新聞の読者が詠んだのです。で、金子兜太先生はこの句について、前書きが欲しい、と。それによって作者の体を投げ出して、詫びようとする心根がさらに伝わるだろう。句作者は自然や野生の動物たちと交感することができ、あるいは土地の神々と交感し合うことができます。「遠野物語」の主人公そのものであります。「なめとこ山の熊」の風景に私たちが密かに共感を寄せるのは、そこに日本文化の土台、地層を流れる精神構造を認めるゆえに、現代の私たちの心を共感という文化でつないでくれるのではないのでしょうか。淵沢小十郎とは、なめとこ山の風景に他ならないのであります。宮澤賢治や、『遠野物語』を生んだ岩手には、日本の文化、日本人の精神構造が濃厚に蓄積されていると申し上げてよろしいかと思えます。そういう場所を、社会学では、場所性、トポスというような言い方をしております。場所性が渦巻いている、溜まつているような所は、日本に数か所しかないので。

ではなぜ、トポスというものが重要視されているのかと言いますと、そのトポスというものが人間の存在を成り立たせる基本であると考えられているからです。ポスターの文頭にイギリスの作家、ロレンス・ダレルの「人間は遺伝子の表現というよりは風景の表現である」という一文を引用した理由がそこにあるわけです。今日私がこのような機会に風景を論じる理由であります。

私は、一九六一年に早稲田大学の法学部から毎日新聞社の東京本社編集局に記者として入りました。ずうっと一貫して社会部の、つまり事件を担当する社会部という部（部員が百四十、五十人いるんですが…）におりまして、その社会部の記者、あるいは全体の責任をまとめるデスク、あるいは科学部長、論説委員、といった経歴を経まして、九八年に早稲田大学の大学院にアジア太平洋研究科がつくられました折に、是非、日頃言ったり書いたりしていることを若い人にぶつけて欲しいと言われまして、教授になりました。新聞社の方は客

員という格好で今も書いております。そこで私は「環境と持続可能な発展論」講義とゼミナールを十年間続けておりました。それで、二〇〇八年に定年で大学を退めましてからは、企業や大学、行政やNGOや農民という壁を取っ払いまして、大学と社会をつなげたところに「早稲田環境塾」という交流の場をつくりました。いろいろな現場に出かけて、とりわけ東北の、山形の高畠という町を舞台に。一九七四年、作家有吉佐和子さんが「複合汚染」を「朝日」に連載しまして、農薬汚染告発の発端となり、無農薬農法と生産者と消費者提携の原点になりました。今年で四十三年間続けておりますが、そこの方たちと私は二十年來交流をしております。ご承知の、原発風評が起りまして、今、我々早稲田環境塾が風評被害に苦しむ高畠の米やリンゴを引き取って、皇居お濠端の毎日新聞社の一階に売り場をつくって販売してまします。そんなNGOとの関係などを含めて幅広く社会と大学をつなげていくということで塾を始めたわけです。

私は、先ほど一九六一年に新聞記者になったと言いましたが、これはどういう年かと言いますと、農業基本法ができた年であります。そして翌年に、第一次全国総合開発計画というものが閣議（第二次池田内閣）によって了解されました。この二つは何を意味するかと言いますと、産業構造を変えて工業化と都市化を中心に日本の構造を変える。つまり、高度経済成長がこの時からスタートしたのです。私は、アウトドアのスポーツをいろいろやっておりまして、育ててくれた日本の自然というものが、かくも無残に壊されるものかということとを非常に強く思いました。生涯の課題として自然や環境と向き合って行きたいというふうに、時代状況の中で考えたわけです。すでに産業公害が激発しておりまして、胎児性の水俣病が発見されたり、あるいは三重県四日市のコンビナートで操業開始わずか四年で千人を超える呼吸器系の患者が発生するという時代。四日市の海のそばに塩浜という市立の小学校があり、一番汚染された場所なんです、その子供は、ものすごい煙なもん

ですからマスクをつけて朝晩学校の行き帰りをする。一時限目の授業が始まる時に先生が「上半身裸！」って言ってですね、皆、女の子も男の子も脱いで、乾布摩擦をやるんですよ。「公害に負けない体をつくろう！」。そういう時代だったんです。全国至る所で海は埋め立てられて工場用地になる。あるいは山岳は観光道路、あるいは森林は多目的林道と称して切り刻まれていく。風景がはなはだしく壊れていくことを、実は霞ヶ関の若手の官僚たちが憂慮しておりました。環境庁が、一九七一年にできた直後です。大井道夫さんといって厚生省の、国立公園部の行政をやって来られた参事官の方が、風景研究会というのを霞ヶ関の、いわゆるキャリアの官僚たちを中心につくりました。文部省の国立教育会館に週に一度集まり、日本の風景をどう考えるかという研究会を、外務省や環境省や通産省や農林省、いろんなところの若手の心ある官僚たちが参加して、開いていたわけです。私は新聞記者としてそこに参加しておりましたので、毎日新聞の紙面上で自分なりのキャ

ンペーンを始めました。作家の井上靖、画家の東山魁夷、哲学者の梅原猛、随筆家の岡部伊都子、生態学の中尾佐助の所に伺いまして、こういう時代だからこそぜひ風景論を書いてとお願いしましたら、五人とも快諾していただきました。ただし、「私が書いたことを一字でも直さないことを約束しますね」と念を押されました。大型連載のあとでそれが本になりました、その本の帯を久しぶりに、ここに来る時に見ましたら、そこに「環境破壊は急激に私たちの美しい風土を蝕みつつある。もう一度この国を、私たちの風景を見直そう。ひたむきな祈りを込めて」。これは私が書いたんじゃない、この本をつくった編集者がそういうことを帯に記したのです。文中東山魁夷画伯がこう言っておられます。

どんな場合でも、風景との巡り合いはただ一度のことと思わねばならない。自然は生きていて常に変化していくからである。また、それを見る私たち自身も日々移り変わっていく。生成と衰滅の輪を描き、変転していく宿命に

おいて、自然も私たちも同じ根につながっている。花が永遠に咲き、私たちも永遠に地上に存在しているなら、両者の巡り合いに何の感動も起こらないであろう。花は散ることによって命の輝きを示すものである。花を美しいと思う心の底にはお互いの命を美しい、地上での短い存在の間に巡り合った喜びが無意識のうちにも感じられる。それならば、花に限らず名も知らぬ路傍の一本の草でも同じことではないだろうか。

東山さんは、大変奥深い緑を使って、水を描き森を画く、そういう絵の背景には、実はこういう感性が、非常に深くあの方を支配していたということが分かります。この本が出版されたその前の年に、「朝日新聞」に有吉さんの「複合汚染」が連載されました。日本の食と農がとんでもないことになっていると訴えました。当時、自然保護憲章というものが日本のあらゆる重要な社会組織、例えば労働組合と経団連という相異なる組織が一緒になって議論してつくったものを、現在の平成

天皇が皇太子時代、天皇は実は大変熱心な、環境や自然保護の考えを持っていらつしやる方でして、NHKのホールでこの憲章を宣言した時、皇太子がこれを読み上げたのですが、実はいろいろ聞いてみますと、お役所の人が書いた記事をご自分でほとんど書き直されたという話であります。そういう時代でございました。

こちらの桜本坊に、有吉佐和子さんは、ある夏の数日過ごしていたと聞いて、えーっと思ったんですけれども、仏教と神道が習合したようなこの地を訪ねていたわけです。自分の旅路の決定的な答えをそこで見つけ出そうとしていたのではないのでしょうか。実は、高島の青年たちが彼女の亡くなる直前に、杉並の東京の自宅で彼女と深夜まで話をしていたとのこと。彼女は朝ベッドで亡くなっていた。それを私は新聞社の社会部デスクとして、夕刊作りにひと騒ぎをした記憶がございます。時代が大変混乱して、座標軸といえますか、どうやって社会が、人間が、明日のある世界を考え信頼できるのか、という時代に、実は風景

論が、こういうシリアスなかたちで関心をもたれていたということ。です。

大学に転じまして、七年経ちました二〇〇五年二月末のことではありますが、毎日新聞社の依頼でチベットの仏教の生き仏のダライ・ラマ十四世法王にインタビューしました。ニューデリーから列車で10時間、カシミールに近いパタンコットという町へ行きまして、そこから三時間、ヒマラヤ山脈が見えてまいります。半日かけたインタビューですが、通り過ぎるだけじゃなくて、きちんと何をしているかという現場を見て欲しいと言われまして、五日間、真冬のダラムサラに滞在しました。もう雪崩が多くて、すさまじい風景の中で五日間過ごしたんですが、寝ておりますとものすごく寒くてですね、ホテルの暖房がゼロなんです。寒くて、朝真つ暗なうちに目が覚めるんですが、壁の向こう側から波が押し寄せるような音が伝わってくるんです。音のする方に歩いて行きました。岩山の頂に、ダライ・ラマの宮殿に入る手前の所



に、僧侶たちが集まる吹きさらしの館がございまして、そこに三〇〇人近い僧侶が上半身裸で、ものすごい声で読経してゐるんです。彼らの視線の先には五〇〇〇メートルを超えるヒマラヤが、明け方の日が眩まばゆくてですね、雪景にヒマラヤの稜線が広がっている。沈思黙考して、また読経している。この僧侶たちとダライ・ラマ師によって共有されている夜明けのヒマラヤの荘厳極まりない風景に、私は深い感動を覚えまして、ジャーナリストとして、このような課題を世の中に、日本に戻って訴えることはできないだろうかということをしてその時に考えたわけであります。

今日の私の講演のテーマは「風景が心を耕す」ということでありまして、「岩手文化へ、高まる共感」という副題がついております。これはその時、今お話ししましたダラムサラでのダライ・ラマとのインタビュの体験に根差しております。その社会が、人の心がどこへ向かおうとしているのか。海図の無い漂流状態を何年我々は続けている

のか。しかもこの先もこの社会の座標軸は多分得られないと私には思われるのです。このような、海図の無い漂流に陥って久しい日本人と日本の明日。何が日本の原風景なのか、かけがえのないものは何であるのかということを訪ね歩いて、それを表現することによって、あなたは何者だ、私は何者だという自己確認。アイデンティティー、そういうものをつかめないだろうかということを思いました。

JR東に友人がおりますので、話を持ち掛けまして、やろうじゃないかということになって、二〇〇七年の八月四日の朝刊が一回目だったんですけども、秋田県の羽後町に伝わる西馬音内の盆踊りを、最初に取り上げました。七〇〇年の間ずっと女たちが踊り継いできた、その盆踊りに私はかけがえのない、私の風景との出会いを実感することになります。お雛子の「ガンケ」、これは甚句のことを言います。お雛子のガンケは「お盆恋しや かがり火恋し まして踊り子なお恋し」というふううふうに歌い出されます。現世の悲運を恨み、来

世の幸福を願う。「願生がんしょうけい化生の踊り」がガンケの語源だとされます。私はそこに日本の、北東北の風土と抜き差しならず、結びついた「私の風景」を見出し、非常に深い共感を得ました。これが、私一人の勝手な思い込みでないことは、日本国政府が国の重要無形民俗文化財の盆踊り第一号に指定しているということです。日本人が共有している文化に、私も確かにつながっていることを強く感じるわけです。我々は、そういうれっきとした素晴らしい感性と、力のみなざる伝統を持っているわけであり、その価値を旅行者である私が強く感じたわけです。まさに、これこそ日本人の原風景、魂の不滅の故郷です。亡者が黒覆面くろふくめんで出て来まして、女性たちが藍染めや伝統的な端縫はなぬいいの美しい浴衣を着て、編み笠を被って共に踊るんですね、黒い頭巾は死者なんです。半月形の笠は生者です。その掛け合いが、死と生という避けがたい人間の命の在り方を、北東北の歴史と絡んで深く、ダイナミックに表現しています。

こちらの中尊寺は、まさにその意味ではクライ

マックスの歴史的風景の地と申上げてよろしいと思うのです。日本人が共有している原風景が見事に現世、現代において引き継がれ、人がそこに惹かれる。ここに、私は地域社会や日本人の明日へ向けての世直しの可能性があるのではないか。中尊寺の風景はそこをきちっと表現して、認識できる場所ではないだろうかと思えます。

風景にいろんなかたちで私たちは接するのですが、二通りの、風景を見る時の態度というものがあるだろうと思います。一つは、実験や科学的対象として、客観的に見るといって、これは科学的なアプローチ。対するに、人間の感覚を使って全体的に把握するという、そういう主観的な、「私の風景」なんかはそうですね。日本人は、後者の方が得意です。例えばこの月見坂を西行がたどります。さらに芭蕉が西行に憧れて奥の細道をたどるわけで、やはりここを上がって来ます。多くの方がこの道をたどって金色堂に至るわけですが、それはまさしくこの道を歩き、中尊寺の歴史と思想

を知る人々が、一步一步この風景の中で反芻<sup>はんそう</sup>し、自分自身が何者であるのか、何のために私はここにいるのかということを見つづつこの場に立っている。そういう誠に貴重な体験を得ることが出来る場所ではないか、というふうに思います。

熱烈な法華宗徒でありました宮澤賢治はご承知のように土壌学、農業の科学を専攻した科学者であります。宗教というと、科学としばしば対立的に語られることが多いんですが、決してそうではなくて、いわば同根の、同じ根につながる二つの大きな生命の一種だと思っますが、この二つを何とか結びつけようとしたのが、宮澤賢治の生涯ではなかったか、その作品の表現ではなかったかと思われるわけであります。

この、風景論というのは、日本の近代史で過去三回大きなブームがありました。第一回目は、日清戦争のさなかの明治二十七年（一八八四）のこととして、志賀重昂<sup>しげしげ</sup>という地理学者が『日本風景論』を著しています。戦争が起こってるさなかに

国家意識を盛り上げて青年たちが戦場に向うわけです。そういう大きな、青年たちに共鳴現象を起こしまして、この固い本がベストセラーになった。二回目は、小島烏水<sup>くしまくみず</sup>という登山家、随筆家が、今度は日露戦争の最中明治三十八年（一九〇五）に『日本山水論』を著します。これはまさしく日露戦争の真っ最中です。

三回目は、上原敬二という造園研究家が太平洋戦争の只中の昭和十八年（一九四三）に『日本風景美論』というのを書きます。これもベストセラーになります。この地味な風景論の書が、日本人のナショナルリズムをくすぐったんですね。日本人の国家意識を。戦争のさなかですから、猛烈に高揚させて、それがこれらの本が爆発的に売れた理由なんです。しからばです。現代はいかなる概念をもって風景論が書かれるべきなのか。過去の風景論はいずれも戦争のさなかに、戦争を戦うためのナショナルリズムをもって書かれたのが日本の風景論でした。しかし、二〇一一年三月のあの東日本大震災の光景を見た後の日本人の風景論、何を

もって書かれるべきなのか。それが、あれ以来ずっと私の頭の中のテーマです。あの時の景観を今思い起こしまして、本当にこう、あらゆるものが、あの巨大な水の壁に蹴散らされて、土煙を上げて、あつという間に消えていった。あれを見ておりまして、どうでしょう。皆さんも、自分の胸の中を何か突き抜けて行った、あるいはその心の中から何か失せて行った、そういう深い考えに捉われていたのではないかと思います。それから四年

経った今、依然として私たちはどちらの方向に社会が行くのだろうか。一日本人、一地域人としてどういう社会を構想し、自分自身がそこに関われるか、努力を重ねて行くようになるのか、依然としてその行方をつかめていないのであります。たいていそういう方をして恐縮<sup>おそく</sup>でございますけども、第四の風景論が書かれるとすれば、まさに「日本とは何か」ということを、日本人の故郷の原風景を辿ることによって確認をする。そういう風景論が、この第四の風景論として今まさに書かれるべきです。それも抽象的なものじゃなくて、例えば

この岩手県という場所にきちんとして腰を据えて、この岩手県の風土と文化、どういう歴史と自然状況の中でつくられて来たのか。そこに我々はかけがえない共感を覚えるわけです。

我々は、中尊寺に来て、いろいろな仏像や仏堂に、また社殿の前で頭を下げる。礼拝するのは、その人とこの中尊寺の、そこに存在する仏像が、その風景と共感するものがあるから自らそうするんです。心にひびくものがなかったら、観光客は礼拝はしなくていいです。そのところは、何で頭を下げるのかといった文化ですよ。自分のルーツ<sup>ルーツ</sup>というものをそこに瞬間的によみがえらせるんです。このことと関連して環境とは何かといいますと、基本的には自然があるということですね。自然の生態がしっかりしている。その上に人が生きるに足る産業というものが必要だろう。これを仮に人間環境と言いましょ。農業というものを考えますと、土や水があつて農業が成立します。農道が必要であり、灌漑用水が必要ですよ。田んぼの田という字を見れば、答えは明晰で、地域社会

がしつかりしてない限り農業は営まれません。自然と人が生きていくに足る、人間環境。そして最高の価値としての文化が保たれている。

今、私が縷々申し上げましたのは、自分にとつてこの故郷は、歴史は何であろうかということ。今こそ思い返すことが、第四の風景論を心に描くための基本であろうというふうに強く感じているからです。文学者が、こういうことを非常に鋭く感ずるんですね。感性の豊かな人たちです。奥野健男という有名な文芸評論家がいまして、『文学における原風景』という本が小学館から出版されています。彼が言いたかったことは、日本の代表的な作家を見なさい。たとえば、島崎藤村と長野の馬籠の宿、あるいは、太宰治と津軽、というような例を上げておられます。日本人の知性と言われている大江健三郎、この人は四国の松山の内子町という町、昔は大瀬村という小さな村だったんですが、そこで生まれて、山の中の生徒が何人もいない中学校で過ごし、まあ大変な天才だったんで

すけども、その大江健三郎さんが、御承知のように文学賞を、ノーベル賞を受賞します。その時に、地元は大騒ぎになるわけですね。「東京新聞」の記事がとても出色だなあと、私は、この風景論を書く上で思っているわけなんです。大江健三郎というフランス文学の、知性の持ち主でありながら、彼の書いてきたもの、言わんとすることは、故郷の大瀬村の森や川や、人々の暮らしを原風景として表現したものだ。そういうふうには社会面に書いたのです。これは記者の主観ですが、大江さんがこの日の朝刊に寄せた手記が載っております。こういうふうには表現してきます。「僕は四国の森の中の谷間をモデルにし、つくり上げた神話と歴史の舞台をやはり書き直し続けてきた。小説家はそのような場所の設定なしに現実を超えたものを想像し、思索することはできない。そのような、自分にとつても特別な場所に、やはり自分でつくり上げた人物たちを位置させることで小説を書くこと、あるいは小説家として生きることが始まるのである」、そういうふうには書いてあります。私

がここで勝手に熱を上げてるのではなくて、風景とは精神形成の空間であることがノーベル賞作家の同意を得たということでもあると胸を張って申し上げます。秋田の羽後町の西馬音内の盆踊りのことを申し上げましたが、最近、青森の弘前で風景論を書くことになりました。ご承知のように弘前は太宰治の故郷であります。私は、いろんな若い女性と大学で付き合ってるんですが、太宰大好きという女子大生と、あんな奴はもう殺したいんだという、こう二通りでして…。まあ、圧倒的に太宰ファンが多いですよ。

太宰が、こういうことを言ってます。春の夕暮れに太宰は弘前城を一人で訪れます。岩木山が弘前城から眺められます。弘前城は岩木山を見るためにつくつたと言われるぐらいのお城です。そういう城から岩木山を眺めて、弘前高等学校文科生の太宰治は、その時の印象を次のように記します。

重ねて言ふ、ここは津軽人の魂の抛りどころである。何かある筈である。日本全国、どこを捜しても見つからぬ特異の見事な伝統が

ある筈である。私はそれを、たしかに予感してゐるのであるが、それが何であるか、形にあらはして、はつきりこれと読者に誇示できないのが、くやくてたまらない。このものどかしさ。

昭和十九年（一九四四）に書かれた小説『津軽』に太宰はこう書いております。

弘前という街を歩きますと、石坂洋次郎、葛西善蔵、太宰治、さらに長谷部日出雄、福士幸次郎と個性豊かな作家・詩人と出会います。さらに、佐藤春夫は津軽を訪れて、作品「奥入瀬溪谷の賦」をのこしている。青森・弘前はそういうものをもつてる所なんです。私が風景の取材でこの場所を訪れて深く胸に刻んだのは、津軽の方言詩人という人たちがいることです。津軽弁で詩を書く土着の詩人たちです。例えば、一戸謙三とか高木恭造とか植木曜介。彼らの津軽弁の詩というのは、まさに津軽の風景そのものであります。その言葉の意味もさることながら、情感に溢れ、懐かしく温かい抑揚とリズム感ですね。これはまさに津軽三



味線のじょんがら節を酒を飲みながら聞いている時の気分にはびつたりです。一戸謙三の津軽弁の一節を私が津軽弁で…。題名は「弘前」だけど、これは津軽弁では「しろさぎ」なんです。

何処サ行ても

おら達ねだけア

弘前だけアえんだどこア何処ネある！

お岩木山ね守らエで、

お城の周りさ展がる此のあづましい

おらの街：

これ、まあこういうふうですね。どこに行っても、俺たちには、弘前のような場所はどこにあるというのか。お岩木山に守られて、お城の周囲に広がるこの快適な、心穏やかな俺の街！

こういう、弘前弁の詩が読み継がれ、多くの共感を得ているのは、彼らにとどまらずこの風景が日本人の原風景として共有されているからにほかならないのでないかと私は思います。太宰が直観していた「何か」とは魂の抛りどころ、原風景ではなかったでしょうか。

東日本大地震の直後に、私は被災地に行くことになりました。宮古の海岸から山の方に道路が走っておりまして、重茂半島という本州最東端の崎があります。道路が山の稜線に近いところまで上がり、大きな橋が架かっているんですが、その橋のたもとで車を停めてもらいました。進行方向の左側を見ますと、海側までずうっと、全滅した街の風景が広がって…。右側を見ましたら、そこは波一つない見事な浄土ヶ浜だったんです。それが一緒に見えるんですよ。同じ場所にたたずんで。こっちに地獄、こっちに天国があるんです。この矛盾する風景を被災者はどうとらえているか。

浄土というものは理想ではなくて、この現実の中で苦しみながら、もがきながら、しかし希望を失わずに生きることでしょう。我々は自然から逃れることも、自然を拒否することもできないんです。そういうところに生きているのが私らだと。被災漁民は覚悟を述べています。

皆さん、アニミズムという言葉聞いたことがあると思います。もう一つめつたに聞かない言葉でアニミズムに対するマナイズムという言葉がございます。この震災のすぐ直後に、宮城県塩竈の高台に鎮座する塩竈神社に取材に参りました折に、夏のさ中でございまして、恒例の祭典がそこで行われていました。この神社の主祭神は、塩土老翁神ツチノオジノカミという。野口次郎禰宜に、いったいの神様はどんな神様、どんな感じなんでしょうかと聞きましたら、イメージは白いあごひげをたくわえていて、非常に知恵の深い、ものをよく知ってる、民を思ってくれる老翁、そういうことでした。暑い盛りの、七月四日から六日にかけて塩竈の街の中心にあります塩竈神社の末社である御釜神社という、古い製塩法を伝える神社がございまして、そこで藻塩焼神事というものが執り行われておりました。塩釜市民が大勢来ておりまして、塩竈さん以前のおりだねえ、ほっとした、そういう言葉を漏らすのを聞きました。神社の社殿というのは普通、東か南向きに建つんだそうですが、

この塩竈神社は海に背を向け西向きに社殿が建っているんです。なぜかと言いますと、その塩土老翁神という主祭神は海の神、塩の神様である。海の中から藻塩を背負って陸に上がって来て、そのままの苦労を背負って立っていてくれる、そういう言い伝えだといえます。この地方では、大津波の度に塩の神様が乱れた世の中を収斂し、鎮めることの繰り返しだったと野口禰宜のお話でした。西向きに立っている塩土老翁神。それを見守り祀る人々の風景。それが大地震と津波、原発事故のメルトダウンという絶望的な状況のもとで、私たちの心の奥によみがえってきたアニミズムとマナイズムというものが交錯する風景ではなかったかと思えます。アニミズムというのはですね、自然の中に靈魂、霊を見ることなんです。日本人の自然観の際立った特徴というのは、古代の日本人がアニミズムというものとマナイズムをもっていた。どちらかといえば、人間と自然の親密感を表すのがアニミズムです。で、マナイズムというのは、自然の中に超自然的な魅力を感じる

ことです。それは自然に対する人間の畏怖の念を表す、畏れですね。アニミズムとマナイズム、日本人の心の拠り所につながっているであろう原風景。宮澤賢治が詠んだ詩「中尊寺」の、

七重の舍利の小塔に  
蓋なすや緑の燐光

は、おそらく、日本に数ある社寺の中で中尊寺ならではの歴史、日本人の感性を、多くの人々の共感を引き付けて、実証的に表現しているのではないのでしょうか。それほど素晴らしい迫力をこの中尊寺の風景は内蔵していると思います。

地域に潜在し、受け継がれてきた皆さんの、岩手の文化というものは日本文化の根っこにがっしりとつながっていて、大震災と原発事故が起きた危機の時代に、鮮やかにそれが掘り起こされた。それが人々の心をつなぐ。共有されていると私はこの風景の取材をとおして実感しました。歴史に鍛え抜かれた本物の日本の風景というものが今、東北、とりわけ岩手の各地に脈々と受け継がれて、

訪れる人々の心をつかんで放さないという感じがいたします。ご清聴ありがとうございました。

(拍手)

プロフィール

はら たけし

昭和13年生れ(東京都)

「毎日新聞」編集委員兼論説委員を経て、平成十年から早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授。現在は、早稲田環境塾長。早稲田大学名誉教授。国連環境計画グローバル500環境報道賞受賞。

(六月二十七日 午後一時三十分～四時四十五分)

・主 催 岩手県

世界遺産連携推進実行委員会

・特別協賛 中尊寺・毛越寺

パネルディスカッション

主催

岩手県

世界遺産連携推進実行委員会

## 「平泉―文化としての環境」

司会 本日のパネリストの皆様をご紹介します。

・基調講演をいただきました原剛様。

・そのお隣、藤沢摩彌子様。一関市出身で、JR東日本新幹線車内誌『トランヴェール』の編集をされてきて、著述業に転身して『アサヒビル大逆転』などの著書があります。

・日本古代史を研究されてこられた大平聡様。現在は、平泉藤原氏以前の安倍氏の時代についても研究されており、宮城学院女子大学教授。

・毛越寺の貫主代行、藤里明久様。国の重要無形民俗文化財毛越寺「延年の舞」の保存伝承にも努められています。

・そして、コーディネーターを中尊寺の仏教文化研究所



中尊寺本堂（夏陽に浮かぶもみじを背景に）

長の佐々木邦世さんをお願いしております。よろしく、どうぞ。

佐々木 パネラーの皆様からお話をいただく前に、いま皆さんが居らっしゃる、この会場、中尊寺の本堂について少々お話しします。現在の、この本堂は、明治四十二年に再建されたものでして、その六年後、大正四年の夏、まだ柱の木の香も新しかったでしょう、此処で、歴史講演会があつたんです。それが、講師が十名で五日間にわたって、講演時間が延べ二十五時間三十分という、今でもなかなか考えられないような企画でした。日本が、第一次世界大戦に参加した翌年のことです。東京ではなく、この、奥州の平泉村の中尊寺です。京都大学の原勝郎教授、日本歴史地理研究会を創めた大森金五郎、早稲田大学の吉田東伍といったお歴々です。ことにも、日本仏教史の辻善之助（東京大学史料編纂所の初代所長）大先生がここで講演されたのが、「平安朝仏教史上に於ける中尊寺の地位」として『日本仏教史』に収載されています。

これが、先例となり、そういう講演会に相応しい処と意識されたんでしょう。昭和二十四年八月、戦後間もない、

「中尊寺」の除幕式が済みましてから、蘭実円貫首はじめ一山の僧はそのまま金色堂に入りまして、予め決めてあつた式次第どおり、賢治の霊を金色堂に合祀し供養したのです。ですから、中尊寺金色堂には、藤原四代公と宮沢賢治の御霊が祀られているということす。識っている方、少ないでしょうが、これ事実、いや事実です。

さて、それではこうした講演の伝統ある中尊寺本堂で、今回は、お話の内容など事前の申し合わせは一切無しですから、それぞれの思いを存分にお話いただきましょう。

それでは、藤沢摩彌子さん。一関の出身だということは聞いておりましたが、これまで平泉に深く係わつてこられた経緯を踏まえて、どうぞご自由にお話ください。

藤沢 ご紹介に預かりました藤沢摩彌子と申します。「藤沢摩彌子」といいますのはペンネームでございまして、実は本名が「小野寺麻利子」と申します。小野寺という姓はこちらに多くいらっしゃいまして、一関市出身であるということ、さらに母が実は平泉町の出身でございます。母親

しかも、キャサリン台風・アイオン台風と二年つづけての大災害の後片付けもまだまだ、といった状況にもめげずに、ここで文化講演会を開催している。主催者として岩手県知事・国分謙吉も来席して、津田左右吉先生が講演されたのが「平泉の文化と中尊寺」です。津田先生は終戦の二カ月ほど前から平泉に疎開しておられまして、私どもの平泉小中学校の校歌「八百年のいにしえに…」を作詞していただいたり、中尊寺の神事能にも最初から最後までご覧になっていらつしやいました。

そして昭和三十二年には、奈良博物館の石田茂作先生です。奈良や京都、史蹟文化財の宝庫が米軍の爆撃を避けられないものかと、東洋の研究者を通じて訴えつづけておられた先生です。著されたのが『中尊寺の文化』です。

ここ本堂での講演は、平安の歴史だけではありません。哲学者・谷川徹三先生がここで講演されたのは、昭和三十四年、あの、金色堂の前の宮沢賢治の詩碑の除幕式の後でした。「われはこれ塔建つるもの」を話された。「雨ニモマケズ」を読む前にこれを、と語っていました。

ついでと言ったら何ですが、お話ししますと、賢治の詩碑

が平泉の出身ということは非常に大きく、私の中にございました。

私は、この一月末までJR東日本企画という、JR東日本の広告の会社なのですが、新幹線の中にあります『トラヴエール』という雑誌ですとか、このごろは吉永小百合さんでコマースヤルが定着しております『大人の休日倶楽部』、そういったJR東日本が発行している月刊誌の編集をまとめる部署にいました。そういう関係からも、かなり平泉、中尊寺、毛越寺、それから岩手県と非常に親しくさせていただいております、そういうご縁もございまして、この場と呼んでいただけたのかな、とも思います。

先ほど原先生のお話にございました「原風景」というものですね。お話をお聞きしながら、私はまさにここで生まれて、ここで十八歳まで育つて、それからはずっと東京で暮らしてはおりますが、いろいろな仕事をしております中で、何回も、何回もこちらにはおじゃましております。私の原風景は紛れもないこの平泉であると申し上げて過言ではございません。



それで、何を話しても良いということなので、話させていただきますが、私は度々この地を訪れておりまして感じることもあるんですね。私は千年前からこの地にいる、というふうにも感じております。まさか千年前から生きているわけではないかもしれないけれども、生まれ変わりを繰り返して、私は今、ここにいます。千年前からいる、というふうな感じをいつも思います。

それは、例えば東京から実家に、盆、暮に帰って来るとき、東北新幹線の中でだんだん近づいてくる途上を感じることもございますし、また、いろいろな取材で盛岡の支店に行つて、盛岡から車に乗せられて、山を見て、田畑を車でこちらに向かつて来るときに風を感じます。千年前から私はここにいて、ということ、私は会社でもぬけぬげと言ひまして、今、会社では安否確認のため、ツイッターで登録しなければいけないのですが、私のツイッターの登録名は「千年女王」です。「千年女王」という登録名を持った、たぶん唯一のJR東日本企画の社員だったと思います。それほど私は皆に言ひますし、誰もがそれを聞いて驚かないんです。「そうだったかもしれないですね」と、必ず誰もがおっ

今から十年ほど前、集英社から、宝生流の近藤乾之助という名人がいます。五月一日に借しまれつつ八十七歳で亡くなったのですが、この方のお能を観て、誠にびっくりしまして、やはりお能はすごい、というところに辿り着くんですね。

それで、その先生の芸談を書きたいと、聞き書きをしたと、巻紙に毛筆でラブレターを書き続けて、漸く許可を得まして、集英社から分厚い四、五〇〇円の本を出版させていただきました。

それで、こういうご縁が、私の「原風景」のこの土地に私が生れたということが、今の私の身体の中に蓄えられている財産でもありますし、お能に限らず、平泉の文化は、私の別な仕事でも大変親しく、深く付き合い合せていただいたということ、何か目に見えない力を感じております。

作家として、能のことを今年書いていくのですが、能だけでなくて、私が今まで関わってきた郷土の歴史、平泉の世界遺産のすばらしさ。この辺のところも、ものを書く人間として改めてもう一度振り返って、なぜここ平泉がすばらしいのか。京都・奈良のすばらしさは、もう皆さんは

しゃいます。そのような感じを持つて生きております。

私は一月末に会社を一応辞めたのですが、私の中では、物書きとして、作家として、これからのものを書いていきます。今まで、ご紹介にありました『アサヒビール大逆転』というのは文芸春秋から出まして、ずいぶん前なのですが、それから二足の草鞋を履いておりました。その後書きましたのが、実は中尊寺さんと誠にご縁が深いお能の話なんです。能楽の話を書きました。これも私が八歳のときに、初めてお能を観たのが中尊寺の野外能楽堂。私がこの世に生まれて初めて拝見したお能でした。私が八歳のときで、「船弁慶」をあのお舞台で拝見しました。シテは、たぶん邦世さんのお父様の実高先生でいらしたと思います。そう申し上げたなら、「そのとき、私が義経で出ておりました」と写真を見せてくださいまして、私の記憶は全く間違いがなかった、と。八歳の少女が、あの能舞台で能を観て、ちゃんと演目まで覚えていたというほど、ものすごい感動を受けて、能面にひかれ、お能のすり足、あの佇まいに、ものすごい感動を受けた私が、あれから何十年か経つたときに、あらためてお能のすばらしさに行き着いたんです。

よくご存知で、ものすごく多くの方々がいまして、どこへ行つても観光としてのルートが築かれていて、皆さんが憧れる京都・奈良なのですが、そうではない魅力、この平泉の魅力。いったいこれは何なのだろう、と。これを私はこれからライフワークとして、少しずつ解き明かしていつて、それを地元の方だけでなく、やはり多くの方に知ってもらいたい。日本国中から平泉へ、心の癒しの場として、こちらへ足を運んでいただきたい。また、世界からも。全世界の皆さんに、えも言われぬ、言葉には尽くせぬ平泉の魅力を感じていただきたい、ということをお思っております。

**佐々木** それでは次に、大平先生。柳之御所、それから私の特に記憶にあるのは、衣川の堤防建設工事に対処して、「それも大事だけれども、その下にこれだけの遺跡があるのだ」とがんばってくれた、現場で長ぐつを履いて見守っていた大平先生、どうぞ。

**大平** この中尊寺本堂でお話をさせていただくことを、大変ありがたく思っています、という話をしようと思いまし

たが、辻善之助、津田左右吉、石田茂作といった先生方がここでお話をされたということを知りかされまして、「ちゃんと話しなさいよ」と釘を刺されたようで、プレッシャーを感じております。

私は、仙台から来たのですが、地元の仙台では、「戦時中の学校教育に詳しい先生（日本古代史）」と紹介されておりまして、今年はずいぶん戦後七十年で、戦時中の展覧会などもありまして、今、仙台と登米と気仙沼のほうに関わっていきまして、明日もその関係の研究会で発表しなければというところで、完全に七十年前のころにおりまして、そこから一挙に平泉の時代、奥州藤原氏の時代にモードチェンジするのが本当に辛いところなのですが、私が今感じております世界遺産になった平泉ということ、浄土の世界ということについて、歴史研究者の一人としてお話し上げたいと思います。

私は平成二年四月に宮城学院女子大学、女子短期大学教養学部にて赴任してまいりました。もう四半世紀を超えました。あのころはまだ三十代でしたが、今年とうとう還暦を迎えてしまいました。

与えられた課題は、柳之御所遺跡に見える堀跡の意味を考える、という大問題でした。

柳之御所遺跡は、私にとつては二つの顔が見えたわけですね。一つは、寝殿づくり風の庭園を持った非常に優美な京都風の文化。しかし、その全域を囲んでいる無粋な堀。これが混然一体となっている柳之御所遺跡って何なんだろう、ということはずっと思っていたのですけれども、一生懸命に考えました。そして史学会で報告しまして、書いた論文の題名が「堀のある風景」というテーマでした。

寝殿造り風の、いわゆる京都風の生活は、藤原氏が中央貴族の血を引いていた。実は、奥州藤原氏のルーツはどこなのか、ということが大きな問題となっていました。戦後間もなく（昭和二十五年）中尊寺のご遺体学術調査があったわけですが、興福寺を復興するための寄付金の奉加帳「造興福寺記」の中に「経清 六奥」と書かれた名前があった。これは陸奥の藤原経清。経清は中央の藤原氏の出身だったんだ、ということがわかりました。中央藤原の血を引いていた奥州藤原四代が、中央風の、貴族風の生活をするのは、これは当たり前でしょう。

赴任してすぐに、東北中世史の大家である、その当時は東北学院大学の先生でいらつしやつた大石直正先生から電話が掛かってまいりました。「柳之御所遺跡は知っているでしょ。保存運動を始めますから、あなたも参加しなさい」と。「あなたもどうですか、一緒にやりませんか」ではな

いんです。「運動を始めますから、あなたも参加しなさい」なんです。これと似た電話がこの四月にも邦世さんから掛かってきました。「六月二十九日に平泉のシンポジウムをやるので、あなたも参加してください」「はい、わかりました」ということで、今日、ここに座っている次第です。

遺跡保存運動が始まった当時、私は長ぐつを履いて保存運動にがんばるだけで、何か学問的にも貢献できないかな、と密かに思っていたのですが、東京大学がつくっている日本史学会という学会が、遺跡の保存絡みで、この柳之御所遺跡も含めて、シンポジウムを史学会の大会で開く、ということになりました。ついでには、こちらは私の先輩なのですが、物腰の柔らかい人で「大平さん、発表してくれない？」と優しく言われまして、「はい、わかりました」と答えたのですが、それから大変でした。

ところが、もう一つの顔を持っているわけです。それは、経清の子どもの清衡が、幼児体験で前九年合戦を経験しているわけです。そして自らが後三年合戦を勝ち抜いて、奥羽を支配するという一大事業を成し遂げた。これは武士の顔であります。

武士というと、すぐに源頼朝とか、あるいは莊園を守つた武士というのが皆さんの頭に浮かんでくるかもしれませんが、けれども、実は地方の貴族の中にも、撰関に近いような地位にいた貴族も、保元・平治の乱では、自ら甲冑をつけて弓を引き、そして討ち死にして死んでいった貴族もいるのです。武芸も、貴族のもつ芸の一つであります。ですから、そもそも武士とは何か、という議論になるのですが、清衡公の場合には、自ら凄惨な戦闘を経験したということが注意されます。

中尊寺一山の研究仲間であります菅野成寛さんが二重重要な研究をなさいました。

一つは金色堂についてであります。金色堂のご遺体について、これを即身仏ととらえて、極楽往生の究極的な実践だったというふうに位置づけられたことあります。この

地には浄土庭園がいっぱいあります。この狭い町内が浄土庭園だけです。大きな伽藍が次々につくられていききました。これを単なる都習いと済ませていいのか、ということですね。ここだけではなくて、福島県いわき市白水の阿弥陀堂もありますし、宮城県には角田市の高蔵寺がありまして、見てみると、東北中浄土庭園が多くあります。これは何なのか。

菅野さんの発表されたものに、秀衡の無量光院について、『吾妻鏡』に「狩猟の絵図を描いた」とあることを論考されております。狩猟は殺戮であります。最悪の殺生戒を犯しているわけでありますが、実は、この殺生戒は武士の生業そのものであります。武士の生業は戦闘であります。戦闘の具体的な内容は破壊と殺戮であります。そして、自らもそれを経験していた。ここに自らを浄化する必要がある。しかも自分のことだけではなくて、一族そして臣下たちも殺生戒を犯したということの浄化ということが必須のことになってくる。これこそが浄土にこだわった、京都以上に浄土にこだわった、ということになってくるのではないかと私は考えたわけです。

寺というのがあって、そこじゃないかなと思ったのですが、時期が違うということではわからないのですが、そのように次々自分の臣下のために新しい浄化装置をつくり続けていった。そういう藤原四代の思いというものを下地に置かなければならないだろう、と。そして、その意味付けを、今の私たちがどういうふうに受け継いでいくのか、ということがすごく大事だと思っております。

ですから、藤原氏がつくってくれた浄土の世界を、私たちの社会の中に置いて、世界恒久平和を祈る場所として、この浄土を清衡公がつくった志を受けとめていかなければいけない、というふうに私は思っております。

歴史研究者として、過去に生きた人に学ばせていただいで、私たちが生きる。私たちの次の世代に、どういうふうに生きる方がより幸せになるかを知ってもらおう。歴史研究者として、発言を続けていかなければならないことだろう、というふうに思っております。

佐々木 パネルディスプレイです。パネルディスプレイです。今、この言われたことに対して、後でどうぞ質問してください。

そうやってきますと、この浄土の風景を、私たちはどのような目で見るかという次の課題を考えるわけです。

皆さんの中には、いつも来て、浄土の庭園で心洗われる思いを感じている方もいらっしゃると思いますけれども、私はただ単純に心とむよな、日本人の心の風景というふうには見られない。この穏やかな癒しの空間の背景には、もつともつと凄まじい世界が広がっていた。だからこそ、より完璧な浄土を実現して、そして自らの生まれ持ったきってしまった生業としての、武士としての宿命を浄化することが大切なんだ、と。それを凄まじいまでの浄土への渴望といいますか、飢えるほどにそれを求めるということを、私は感じるようになったわけです。

優美な平安文化に触れることのできる空間として、この平泉世界遺産が、これからも多くの方を集めていくということは、私の望むところでもあります。しかし、その背景に、この世界をどう思うかという最初で最初に清衡公がつくったのか。そして、それに続く基衡、秀衡。泰衡の浄土の庭園というのはまだ確定していませんが、私は花立廃寺かな、と。昔の郷土館、今の平泉文化遺産センターのところに花立廃

一つ私から言っておきますが、ここで、先ほど言った辻善之助さんが、一つだけ間違ったことを話した。それが、「藤原という姓を何かしらの手立てを講じてもらっていたのだ」というふうにここで話して仮説にしたのですが、そうしたら後で、聞いていた人から質問があって、「そうではありませんよ、これを見てください」と、『続本朝文粹』巻六に「藤原経清」の名が見えますと、指摘されたんですね。

それを辻先生が、「若い研究者が、こういう指摘を私にしてくれた。これは確かにそうである。これは訂正しなければいけない。ただし……」。と書いていますね。そういうことがございます。

先ほどの無量光院のことで、秀衡公がそこに狩猟の図を描いた意味について、私も、すでに『仏教文化の展開』に「自分がいる風景―「狩猟の図」を読む」を書いておりますので、読んでいただきたいですね。

お待たせしました。藤里明久さん、どうぞ。

藤里 平泉が世界遺産になって四年経つわけですけど



も、平泉というのは、なぜ平泉なのか。藤原氏初代清衡公は、なぜこの地を選んだのか。良い場所だから選んだのではないのか。その良いところとは何なのだろう、ということとを、私なりに考えてみたわけです。

それは、ご存知のように、藤原氏初代の清衡という人は、前九年の合戦も経験していますし、後三年の合戦も経験している。戦乱の中で生き延びてきた方です。もちろんその中で妻子が殺されたり、あるいは親族が殺されたり、夥しい人が亡くなっている。その方が生き延びて、この東北の地を治めようとしたときに、いろいろなことを考えたのだろうと思います。その時に平和、安寧ということとは当然考えたでしょう。戦乱に明け暮れた人々を、どうやって安寧に導くかというのは、為政者として当然のことです。

そのときに、何か心の拠がほしい、それが仏教、仏の教えだったのだろうと思います。仏教を広める上で一番ネックになるのは、怨念を捨てるということですね。恨みを捨てる。今、世界中で恨みが行きかって、殺戮の繰り返しです。この恨みを捨てるということが、大変難しい。それを仏様の力、ブツタの教えによつて何とかしていかなければ

ればこの地に安寧は訪れない。そういうことを清衡公は考えたのではないかと想像されるわけです。

それで、どういう場に仏を勧請し、導いてくるかです。かつて、大矢邦宣先生が、「自然美の浄土」ということを、本に書いたりされていました。ちょっと捉えどころがないような感じもしますが、自然美の浄土ということとは、この地域全体が浄土だよ、というだけではなくて、この地に何か特別な意味合いがあつて、この地は守られているんだというようなことも背景にはあるのではないかと、思つたわけです。

よく、平泉の地は四神相應の地であるということが言われます。これは後付かもしれませんが、この四神は平安時代、もつと前から出てくる話です。そうすると、平泉は東に青竜、川があつて、西に白虎、大道があつて、南に朱雀、湖とか沼とか、そういう湿地帯があつて、北に玄武、丘陵地がある。これは四神相應の地といわれて、貴い場所であると言われているわけですが、その中で一番意味を成すのは、川、青竜だと私は思っているのです。

物に説かれている、そのままを造形、造園したものです。その中にも四神の地形、意味が書かれている。東の青竜の水で、災いや悪鬼を西の方に流すということがあるわけですね。

それで、平泉の地形を見てみますと、東に北上川、北に衣川があり、南に太田川があり、北上川から水を引き入れた猫間が淵などもあります。そういうふうには、平泉と水は深い関係がある。水は絶えず流れ、留まることはない。それが常に災いを流し去る。そういう考え方もこの地を選んだ理由の一つになるかな、と思つているわけです。

それで、毛越寺の庭園もそうですが、平泉の浄土式庭園というのは、普通、浄土式庭園というのは、大体阿弥陀堂を中心にして、その前面に園池を設けて築堤するのが通常です。日本にはいろいろな浄土式庭園があります。例えば宇治の平等院とか木津川市の浄瑠璃寺とか平泉の観自在王院跡とか、先ほどの、いわき市の白水阿弥陀堂もそうですけれども、浄土庭園は残っているのですが、平泉の一つの特徴は、背景に山があるということです。宇治の平等院は、背景は市街地ですので、今は大きな高層マンションが

できて、史跡環境を壊すというので問題になっていますが、平泉の場合は、毛越寺の塔山という山があります。そして観自在王院、無量光院というのは、方角が違いますが、金鶏山を背景にしています。中尊寺の三重の池跡はちょっと特殊で、経蔵の裏をずっと登って行く蓮台野という古墳墓群があるという所がございます。必ず山があるということですね。

毛越寺の場合を見ますと、山があつて、前面に池があります。大泉が池。そして復元された遣水があります。そして、この大泉が池は海に見たててつくられているわけです。そして、遣水というのは、谷川から小川へと移る川の全体像がそこに再現されます。そして、そこに流れ出る水は、山に降った雨水、あるいは湧水なんですね。

浄土式庭園というのは、自然の景観に倣つて、景観に学んで人間がつくつたものです。古来、日本人というのは、山が大変尊いものである、と。山に神がいる。そして川にも神がいる。海にも神がいる。そうすると、仏様の周囲は、すべて神々によつて守られている。雨が降った水は、清らかな流れになつて、遣水として海である池に注いで流れて

いく。遣水の方角も、大体東方から水を取り入れて、そして南の方を通って、未申みづのしるの方向、南西の方向へ流すというのが順流ですね。『作庭記』の「遣り水のこと」に「四神相応の地を選び、左より水なかれたるを青龍の地とす」とあります。青竜は流れを表しています。水は常に流れて行って、常に新しいものが湧き出てきて、変わっていく。そして、常に災いを流していく、ということだろうと思います。

平泉を訪れた人々は、寺堂に仏様を拝み、そして、この地の清らかな風景なり、そういうものに心を洗われ、また新しい気持ちをもって帰って行く。そういう意味でいうならば、平泉はまさに大矢先生のおっしゃるような自然美の浄土なのか、と思っております。

今では堂塔も無くなりました。でも地形は往時のまま残っているのです。この環境は、まさに自然の景観ではありますけれども、我々はその中に歴史的意義を見出し、その中からいろいろな気持ちを触発されて、深い信仰心をおこしていくのだろう、というふうに思っております。

佐々木 「難しいことを易しく、易しいことを深く、深い

「気付く」という言葉をよく見るのですが、その辺をどうぞお話いただけますでしょうか。

原 三年前になりますが、夏八月に「日中韓学生環境フォーラム」が開催されました。「文化から環境を考える」というテーマで、中国の清華大、韓国の高麗大、そして日本は早稲田大の学生が参加しまして、日本の自然観に触れながら、一緒に環境思想を考えたいわけです。私はアドバイザーとして、かつての公害問題による法整備、しかし東日本大震災と東京電力福島第一原発事故によって、根底から見直しを迫られている現状を語りました。

東京から、被災した岩手県の田野畑村を訪ね、それから世界遺産平泉の此方に参りまして、佐々木先生に思想とか歴史文化のなかで環境を話していただいた。参加した十六名の学生は優秀な、リーダーとなる諸君です。中国青年報の記者もついてきまして、ここで話を聞いて、無形の文化環境というものに初めてはつと気がついた人もいた。なるほどそういう世界があったんだと大事なものをつかんだ様子でした。

ことを面白く」というのは、作家・井上ひさしさんが言われたことばです。平泉を研究される方は、普遍的なものを追いかけてながら、それを抽象化、一般化して論述しようと思える。もう少し、わかる言葉で書いてほしいなあ、と思うところがあります。

風水の思想という話が出ました。風水の思想というのは、もう、仏教と一緒に日本に入ってきて来て、古代中国の方位観、それから色彩観、そういったものに、地形に一定の意味を持たせる。それを環境の条件として、自然に対する祈りの体系なんですね。ということがわかると、あの浄土庭園になるほど、と己心の浄土と映る。ただし、浄土庭園という言葉は、昭和十年以降につくった造語ですからね。「浄土を思わせるような」ということです。

次に、いよいよ原先生にお願いするわけですが、先ほどから皆さんから出ていますが、私は、浄土というのは、そんなに高踏な理念の装着ではなくて、もつと日常の自分自身に引き寄せて気付くことだと思っております。その、「気付く」ということを大事に、原先生の書かれたものを読みますと、

ここから、日本の文化の基層をなす神道と仏教に触れて人間と自然との関わりを探ろうと、京都の貴船神社、鞍馬山へと周り、一週間のフォーラムでした。

佐々木 ありがとうございます。

藤沢 ちょうど世界遺産に登録された四年前、東日本大震災が起りましたね。そのときに、会社で私がさせていた仕事で、私がよかつたなと思う仕事がありました。「カウント・ベイシー・オーケストラ」Countdown at Mt. Hiei Temple「毛越寺」という、毛越寺の本堂の前で、あの世界的に有名なカウント・ベイシー・オーケストラをニューヨークから呼びまして、あそこでジャズのコンサートをやろうと、そういう話が出ました。

実は当時、原発がああいうことになりました、世界中のトップアーティストが日本に来なくなっちゃったんです。誰も来なくなっちゃった。そういうときに、カウント・ベイシー・オーケストラが、東京に来ることを、私どもの会社のジャズの大好きな人間がキャッチして、それで一関の

ジャズ喫茶のベイシー。ご存知の方も多いと思いますが、その菅原正二さんはカウント・ベイシーが存命のころから大変仲が良く、どうもカウント・ベイシーが日本に来る、東北に行きたい、一関に来て、平泉のどこかで復興のために演奏やりたい、と言っているという情報が入ってきて、それで、よし、半年後の九月十一日にやろう、となりました。

それで、サントリーさんから協賛をいただいたり、とにかく、お金を集めなければいけない。それで岩手県に行きまして、なんとか観光の方に回すお金を：一〇〇万以上のお金をいただいてきたりしました。被災地の大槌のブラスバンドをやっている中学生を：、あそこは中学生のブラスバンドがすごく盛んな町だということも全部調べて、県北バスに頼んで、大槌から中学生を一関へ呼んで、一関一高が私の母校なので、一高の校長に電話を掛けてまして、何とか体育館を貸してほしいと頼みました。カウント・ベイシー・オーケストラのメンバーとセッションをさせるから、貸してほしいのだと。そうしたら、見事に断られました。一関一高の体育館も3・11の後の4・7でしたか、大余震

佐々木 ありがとうございます。こちら、ご本尊の前に「不滅の法燈」がありますね。ずっと伝統の灯を燈しているわけですね。その油を自分たちで、平泉の地で何とか生産して奉納できないだろうか、と。そのことを皆で集まってやってくれている方々がおられます。(平泉なのはな会)の方々ですね。「おめもやらねが?」「よし、俺もやる」みたいな感じで、休耕田、草がぼうぼうの田んぼを耕して、種を蒔いて、皆で草刈りをして、そして収穫する。いつもいつも良くできるわけではなく、それで、奉納されたら、ちよつと今まで買っていたものと違うなあ、煙が多いなあ、みたいな状況が一度ありました。そのことをこちらから申し上げたら、それを扱って油を搾るデクノボンズという会社が：、その方が宮澤賢治のどくのぼうのように：、それで「工夫してみます」と。菜種油を分留して、水で洗浄したんですね。そうしてもう一度納め直してくれた。地域の人たちの工夫と、やる気と、そして、納めようという気持ち

宮澤賢治の弟の清六さんが、『雨ニモマケズ』の中で大事なのは、「東ニ病氣ノコドモアレバ行ッテ看病シテヤリ

がありまして、体育館のステージがズドンと抜けて、柱にひびが入って、とても貸せない、ということでしたが、無理を申しましてなんとか了解を得て、一関一高と大槌中学校の生徒と、カウント・ベイシー・オーケストラとセッションをさせて、その後に毛越寺のライブを聴く、ということにしたわけです。皆、津波でお父さん、お母さんが亡くなりました、という子どもたちなんですよね。その子どもたちが、今日は本当に楽しかった、と。毛越寺の前に大きく、カウント・ベイシー・オーケストラの看板がかかって、そこでピースサインをして記念撮影をして、そしてにこやかに帰って行っただけです。それが大変思い出に残る、私の最後の大きな仕事のひとつだったと思います。

それで、全部支払いを済ませて、うちの会社は儲けなくていいから、ということ、残ったお金二〇〇万円を、岩手県庁さんにお返しに行きました。いただいたお金の倍近くをお返しさせていただきました。

復興支援も文化の一つだと思っておりますが、今生きている私たち一人ひとりの行いが文化につながっているのではないかな、と思っております。

西ニ疲レタ母アレバ行ッテソノ稲ノ東ヲ負ヒ」の「行ッテ」が大事なのだ、と。頭の中で思っているだけではだめだ、ということをおしやっています。

菩薩というのは「行く」ということです。行く人。ずっと座ってテレビを観ていてはだめなんです。立ち上がる人、そして長ぐつを履いて行く人。島根県の行政に行ったら、役場の人は、話を聞いて「できない」「だめです」という言葉をすぐには言わない。そして、カウンターのところには、市内・町内の事情をよく知っている課長が一番前にいる。そういうふう

に市民に対する心配りを、実際にやっているんですね。デクノボンズ、そして平泉なのはなの会の人たち皆、菩薩ですよ。浄土とは死んでから行くところ、だけではない。浄土というのは、心を清める。浄土の「土」というのは、これは「心」ですね。

そして、もう一人、今日は東京から、赤坂の高橋みつゑさん、いらしていますね。

この高橋さんは、何か被災地のためにできないか、ということを考えて、お客さんでみえた彫刻家・藝大の藪内先



生にご相談されたんだそうです。どなたか若い学生さんにもお地藏さんを制作してもらえないだろうか、と。そうしたら、藪内先生自ら、お地藏さんをいっぱいつくって、つここにこした「和顔施地藏」さん。これを、お父さん、お母さんを失った子どもたちのために拜んでください。中尊寺で拜んでくださいと送ってこられたのです。貫首と、私も一緒に拜してもらいました。そして、「はい、拝みました。どこへ返送すればいいですか」と言ったら、それはあなたたちが考えて下さい、ということ。宮城県の石巻市の大川小学校や、岩手県の釜石など百体を配ったのですが、さらに百体拜んで、できるだけ多くの方々の慰霊にということでした。御遺族の方々に喜んでいただきました。

大平 私がかかわっております金ヶ崎の鳥海柵跡とよみかざりですが、残念ながら世界遺産からは切り離されてしまったわけですが、けれども、これは奥州藤原氏の母体となる安倍氏の遺跡です。

大事なことは、浄土の部分だけではなくて、歴史全体を

桜が千二百年生きているはずがない、ということ、土地の人に、何とか私をあゝの桜の巨大な洞の中に入れてくれ、と頼みましたが、特別天然記念物だから文部省にお伺いを立てないとだめだと言いますよ。特にお願いしまして中へ入ってみました。何があつたと思いますか。大きな洞です。直径が三メートル。天井から、こちら本堂に太い柱が内陣に入るところにありますでしょう。この柱とほぼ同じサイズの、こんな大きな丸太が、天井から土について、それが根になっているんですよ。不定根というのだそうです。定まらない。不定の根。これは本来は根ではないのですが、桜の空洞になった部分に成長細胞が爆発的に殖ふえて、それがどんどん大きくなっている、柱のようなものになつて下がつてきている。そして、土にくっついたところから、それが根になっているんですよ。本来は根の細胞でないものが、根に変化している。それがあの木をがっちり内部で、六本も七本も支えているんですよ。だから、千二百年の間に、自分自身の内部から、完全に繰り返し繰り返し更新して新しくなつて、堂々とそれを支えている、というのが科学的な見解であるということがわかりました。

理解することが必要だと思えます。ただ浄土庭園を見た、心和む美しい風景だな、ということだけではなくて、歴史全体をわかつていただけるような、そういう工夫もこれからは必要なだろうと思えます。ぜひそれを、意識的に、柳之御所を世界遺産から外したのは間違いなので、それから、あそこも堂々と世界遺産の一部ですと言えるように、これから範囲を広げるということであるようですね、ぜひ全体を見回していただきたい。そして、ただ岩手県の歴史ではなくて、日本の歴史の最先端を歩いていた時代があつたのだ、というぐらいの気概を持って、平泉だけでなく、関係の地を誇りを持って大切にしていきたいと思えます。

原 私は、絶えず現場から学んで、自分自身の固定観念を変えていく。そういう意味で「気付き」と言っているんです。

福島県の三春町の滝桜ですね。郡山市の近くです。私はこの桜が平安時代から千二百年あそこに生えているということに疑問を持ちまして、そんなことはないはずだ、と。

やはり大事なことは、科学と宗教性というようなものを、宮澤賢治がそうであつたように、自覚して、科学と宗教が、お互いがお互いを尊敬するような関係をつくって、同時にお互いがお互いを侵してはいけないという線をはっきりと持つて、絶えず更新し、新たな人々の共感をそそるような、そういうストーリーを、社会はきちつと維持するべきだろうと思いました。

そして、この滝桜の後ろがちよつとした丘になっていて、その丘の上に立ちますと、安達太良山が正面に見えます。そこにあの有名な草野心平という詩人の詩碑があります。「紅枝垂の その見事さ 美しき 背景はあやめの空と 羊雲」、これがその桜の真後ろにあるんです。

それで、昨日、私は毛越寺に一日おりました、毛越寺を久しぶりに隅々まで歩きました。あやめが絶頂ですばらしく、まさにあやめの色というか、紫と白と黄色と、あのあやめというのは明るさがすごいんですね。あの花びらの色が持つている明るさ。草野心平が詩人として、どうして「あやめの空と 羊雲」といったか、昨日よくわかりました。あやめの色は本当に明るい。人の心を明るく幸せにする、

そういうものがある。「あやめの空と 羊雲」というのは、皆さんも私も含めて、かつての少年少女時代に、私たちに生きる喜びとか、明日への希望というものを確かに与えてくれた日本の美ではなかったか。この時代、この平泉の風景が人の心を励まし、生きる力を持たせてくれる、そういうことを強く希望しております。

佐々木 ありがとうございます。

それではまとめに、先ほど触れました宮澤賢治の「われはこれ塔建つるもの」を読みます。

手は熱く足はなゆれど

われはこれ塔建つるもの

滑り来し時間の軸の

をちこちに美ゆくも成りて

燎々と暗をてらせる

その塔のすがたかしこし

一人ひとりが、その生活の中で心に塔を建てている、塔

を建ててほしい。法華経の精神であります。これを、熱でうなされながら、宮澤賢治は書いた。密やかな祈りや、自戒のつぶやきであります。精神の余韻がここにも聞こえる、と谷川徹三先生は解説を、此処でしてくださいました。

今日の皆さんのお話を聞いて、それぞれの心に塔を建て、その気持ちが大事なのだ、ということでは共通していたかな、と思います。

先生方、どうもありがとうございました。

## 人・社会とつながる

高橋 美千子

### 一 玉川学園について

玉川学園は、一九二九年（昭和四年）に創立者小原國芳により「全人教育」を第一の教育理念に掲げて開校されました。東京都町田市にある学校は、現在K—12 (Kindergarden to 12)、大学、大学院まで約一万人が広大なキャンパスに集う総合学園に発達し、幅広い教育活動を展開しています。

### 二 玉川学園の教育

創立以来「全人教育」を教育理念の中心として、人間形成には真・善・美・聖・健・富の六つの価値を調和的に創造することを教育の理念としています。

その理想を実現するための「十二の教育信条」  
—全人教育・個性尊重・自学自律・能率高き教育・

学的根拠に立てる教育・自然の尊重・師弟間の温情・労作教育・反対の合一・第二里行者と人生の開拓者・二十四時間の教育・国際教育—を掲げた教育活動を行っています。また、自ら困難に立ち向かい、それを担う気概のある人材こそ、次世代のリーダーにふさわしい人間像であると捉え、

「人生の最も苦しい、いやな損な場面を真っ先に微笑を以って担当せよ」

という玉川モットーを、本学共通の指針としています。

### 三 玉川学園の音楽

玉川学園は創立以来、音楽を日常の中に取り入れ、「音楽の生活化」を目指しています。「生活化」とは、生活のなかで音楽をする機会を数多く設けるということだけでなく、音楽を通じて豊かな感性や創造的な表現力を培い、音楽活動に積極的に取り組む意欲を育てることで、調和のとれた人間となつて生活していくことです。

玉川学園の創立者である小原國芳は、

「歌は人生に潤いと励ましを与えてくれる」  
「音楽は善き日本人としての、また世界に通用する文化人としての不可欠な素養である」という言葉を残しています。そして、創立以来、「歌に始まり、歌に終わる」学校生活を児童生徒は過ごしています。私たちが奏でるハンドベルの響きは、夢中になって生活音楽する中から生まれてくるもので、「玉川サウンド」として受け継がれているのだと思います。そして、お客様と音楽の喜びを共有できること、そして、人間としての豊かな感性と神に適う精神を養っていくとともに、芸術としての音楽の質を磨いていくことを目標としています。

#### 四 玉川学園ハンドベルクワイア

玉川の丘にハンドベルの音色が響き渡ったのは、今から五十年前。ハンドベルが日本にやってきてからすぐのことでした。

今年、五年生から十二年生まで一緒にクラブとして活動するようになり、十年目という節目を向

かえます。最初の二年は一緒に活動といっても、コンクールへの参加を中心とした活動で実績を積み重ねてきました。しかしながら、冒頭にもありますように、玉川学園の生活音楽を大切に感じる性を養うには何かが足りない、技術の上達や聴衆に感動を伝えるだけではない「音楽の真髄」には到達できないと考え、訪問演奏と一流の会場（現在はサントリーホール ブルーローズ）での定期演奏会を行うということに方向を転換しました。沢山の方々にハンドベルの良さ、魅力をお届けしたいという気持ちから、年間五十ステージを行っています。

演奏者とお客様が近い空間を目指し、ひとつの音楽から人と人との触れ合いに繋がる、そんな素敵な空間と時間を提供出来たらと願い、練習に励んでおります。

#### 五 東北演奏旅行（訪問演奏）

訪問演奏旅行は今年で八年目を迎えます。お客様の人数に拘らず、一名でも一〇〇名でも同じも

のを提供する。そして、日本に数多くある人生の中で一度は訪れておきたい貴重な場所（世界遺産・文化遺産等）で必ず公演する。こんなコンセプトで開始しました。一年目北海道、二年目九州、そして二〇一〇年、三年目ハンドベルと東北の出会いが始まりました。この年の四月、どうしても中尊寺様で演奏したい。漠然と、そして凶々しくもお願いにあがったことがきっかけです。菅原さまにご対応頂き、念願の奉納演奏をさせて頂くことが出来ました。それは、世界遺産になる前の出来事です。初めての奉納演奏は、沢山のお客様に支えられ、またお言葉まで頂戴し貴重な素敵な空間を感じる事が出来ました。八月末中尊寺含め、五泊六日の演奏旅行が終了し、さあ来年はどこに行こうか。と考えている矢先、翌年の三月に東日本大震災が起こりました。関東で地震に直面した私たちは、私たちが伺った東北地方の皆さんは大丈夫なのか、どういう状況なのか。と心配をしながら、情報を集めていました。そんな中、生徒たちから「私たちにできることは何か」そんな言葉

が四月下旬にありました。その年は、とても伺える状態ではありませんでした。二〇一一年、関東で一年間「何ができるか」生徒とともに考え、やっと二〇一二年、自らが知ること、感じることから始めようと決心し、東北演奏旅行を開始、今年で四年目を迎え、中尊寺での演奏は五年になります。



2010年中尊寺にて



二〇一二年震災翌年は、気仙沼・石巻・南三陸と沿岸を中心に仮設住宅を訪問させて頂きました。眼前に広がる光景を表現する言葉が見つからない、生命の営みを感じることができない風景、人は居ずトラックと重機の音に包まれた中にひまわりが咲いている。生徒たちは、多くの場所で、一人になり歩いている姿が印象に残っています。そんな景色とは裏腹に出会った多くの皆さんは、「ありがとう、毎年来てね」「震災のこと、私たちのこと忘れないで」と生徒たちに泣きながら語ってくれました。その後、二年目、三年目、四年目と毎年、中尊寺や毛越寺にて奉納演奏をさせて頂きながら、昨年からは福島（南相馬・喜多方）まで下りてきました。

この毎年の訪問演奏で報道では感じることもできないことを五感で感じ、真実に向き合い、その中で「笑顔と涙」「沢山の言葉」を毎年もらいます。そこには、ハンドベルがあり、その楽器を通じて自然に会話が生まれ、毎回の演奏後には三十分の交流を持ち、沢山の方と触れ合います。



平泉を訪ねて（上段：中尊寺、下段：毛越寺）

仮設住宅は毎年伺っている箇所も多くあり、「孫が帰ってきたみたいだ」「おかえりなさい」「○○ちゃん、大きくなったね」と喜んで下さる方も数多くいらつしやり、今では風評被害、震災のこと、今の生活のこと、本当に多くのことを話して下さります。

被災し不自由な生活であるはずなのに、温かく迎えて下さり、明るく親切に接してくれる、また時に逆の姿にも直面する。その触れ合いと交流は、私たちに生きていく勇気と意味を教えてくれている気がします。

人を思いやる心、相手に寄り添うこと、初めて出会う多くのお客様（時に生徒一人に対してお客様二十名）と会話をさせて頂くこと、演奏でお客様が感動して下さることを声として実感すること、挙げ尽くせないくらい多くのことを体験し、この訪問を通して、生徒たちは一回り価値観・行動言動・全てが成長しているように感じます。

来年も、そして今後も毎年東北に八月伺い、多くの出会いを。と考えています。音楽を通じて被

災者の方と触れあい、震災を忘れず、東北の皆さんに想いを寄せることを忘れず、人と社会に繋がる活動を今後も続けていきたいと思えます。人も場所も一期一会、出会いを大切に、今後も中尊寺の皆様にお会いできることを楽しみに日々精進して参りたいと思っております。



中尊寺本堂にて

六 生徒の言葉 瀧川 真央（高校三年）

私は四回に渡り被災地で公演を行いました。実際に被災地を目の当たりにし、今おかれている東北の本当の現状を知ることが出来たこと、世界遺産でもある中尊寺という素敵な、素晴らしい場所で演奏させて頂くことは、普通ではできないことです。

毎年、中尊寺の方とお会いして少ない時間ではありますが、音を通して奉納させて頂くという空間は、通常では感じることでできない空気感があります。昨年「千の風になつて」という曲を演奏したときに、暑い夏のなか、本堂にスーッと風が心地よく吹いたことがありました。きつと見守って下さっているのだな。と感じたことを覚えています。

また、被災地ではテレビや新聞で得た情報との大きな違いを学ぶことができ、貴重な時間を過ごせました。音楽を通して多くの人と触れ合うことは素敵なことです。「私たちにできることは何か。何を大切にしなければならぬか」毎年、この訪

問で考えます。十年、二十年経つても、この経験を忘れず、その時にも何ができるか想いを寄せたいと思います。



被災地にて

たかはし みちこ  
玉川学園音楽科主任。

第五十四回 平泉芭蕉祭全国俳句大会 記念講演

「みちのくの芭蕉」

「おくのほそ道」を中心に――

講師 宮坂 静 生 先生



ただ今御紹介を預かりました宮坂です。

今日は、「みちのくの芭蕉」――おくのほそ道を中心に――といったサブタイトルをつけてまして、プリント（別紙）を用意してあります。難しいような資料を挙げてますが、できるだけ易しくお話をしたいと思えます。みちのくだけではなく、もう少し広がった話になるかと思えます。平泉の毛越寺を会場にお話をすること、このような題名をつけました。

昨日、此方へ伺いまして、中尊寺や毛越寺をくまなく案内して頂きました。私も、この平泉、岩手県にはしばしばお邪魔をしております、その度にいろいろ考えることがありました。今回この平泉の地を巡りまして何を感じたかということからお話します。

私が住んでいますのは信州の松本です。それから月の十日ほどは神奈川県の逗子におります。

逗子は海辺ですが、松本は山国として岩手県と同じように信州も大きな県です。岩手県が一番大

きいですね、信州は四番目位ですかね、同じような地形なんですが、こちらへ来まして昨日ハタと気づいたことは、草がいつばいだということですね、草。木じゃなくてね、秋田杉とかそういう木ではなくて、草がいつばいだということですよ。こんなに草がいつばいなところは日本にあるかという感じがした。

信州にも草はあります。けれども岩手の草は、名もない草、雑草とは言いませんが、まだ名前がついていない、ついているんでしょうが、私が知らない草がいつばいある。実に珍しい感じがしました。木じゃない、木も沢山あるけれども、私には草がいつばいだという感じがした。たぶん、芭蕉も草がいつばいだということを感じたんじゃないでしょうか。

みちのくの白河の関を過ぎて——、元禄二年といえば三六二年前ですね。この平泉まで来る間、たぶんこんなに草がいつばいなところはあるだろうか、ということに気づいた。ちょうどそれが、陰暦では五月十三日で、陽暦に直せば今日、この

六月二十九日にあたる。梅雨の頃で、夏の盛りです。

#### 夏草や兵どもが夢の跡

この「夏草や」というのは草の中でも最も勢いのいい、よく繁った草がいつばいだということですよ。その草にも勿論命があります。私がさつき、この平泉の地へ来て草がいつばいだということを感じましたのは、名もなき草ひとつひとつに命がある。そういう草がいつばいだということを感じたわけです。

芭蕉は高館の地へ着いて、茫々とした夏草を目の前にしました。「兵どもが夢の跡」、清衡、基衡、秀衡、藤原三代。それに義経一党が加わって、それぞれ夢を持ちながら亡くなってしまった。そのような人たちの夢が夏草を通して浮遊している、そういう感じでしょう。

私は一昨年鹿児島県の知覧というところへ行ってきました。そこは特攻隊の若者が、戦争も末期の昭和二十年（一九四五）五月にそこから飛び立つ

て沖縄の嘉手納に停泊していたアメリカ軍に突っ込む、特攻の基地があったところです。その中に、私の住んでいる近くに上原良司という慶応大学経済学部三年生、学徒兵がいました。特攻隊で亡くなった学徒兵ですね。その上原良司を始めとして、知覧には実にたくさんの特攻隊の人たちの写真が遺品と一緒に展示されている。その地を何遍も私は訪問しております。

上原良司は「きけ わだつみのこえ」という、これは戦後に東大の出版会から出て、あと光文社のカッパブックス、更に、岩波文庫にはいつています。この「きけ わだつみのこえ」の巻頭に上原良司の所感、更に遺書が入っております。なぜ巻頭に入っているかというと、戦時中でありながら戦争の大局を鋭くみつめているんです。この戦いは日本が必ず負ける、負けた暁に戦勝国であるアメリカ・イギリス連合軍が日本を支配するだろう。けれども戦勝国であるアメリカ・イギリスも、勝った勝ったということで、それを絶対化した時には必ず滅びるだろう、ということを書いている

んです。戦中でありながら、戦後の日本のあり方に、更に連合軍のあり方までも見通したような形で実に鋭い指摘をしております、その先見性から所感が冒頭に載っております。ですから、上原良司は大変、無念の思いで亡くなったのだらうと思います。

上原良司のお宅は五人兄弟ですが、良司の下が妹二人です。上に兄さん二人。その二人とも軍医。一番上の長兄はビルマで亡くなり、二番目の兄さんはニューヘブリディーズ諸島というところで亡くなる。そして良司が特攻兵として沖縄で亡くなる。兄弟三人がそのような形で亡くなっておりまして、妹さんが良司を中心にした兄たちの供養をしております。そのような特攻兵の無念な思いが、知覧の地へ行きますとまざまざと感じられる。同じように沖縄でもたくさんの人たちの無念の思いが、この空中に浮遊している、そういう感じを私は持つております。

同じようなことが、この平泉では三六二年という昔であったにしても、高館の地を中心に、「夏草」



を通してたくさんの亡くなった兵士たちの無念な思いが浮遊していたであろう。しばらく前に、私はいまお話ししたような特攻兵の映画を見たことがあります。そのラストシーンで、茫々とした木々の中から亡くなった特攻兵たちが皆元気な顔、みんな未来に向かって明るい顔をしながら立ちあがってくる、そういう画面がありました。私は高館の地へ来ますと、藤原三代は勿論のこと、義経一党も皆無念の思いを抱きながらグーツところ、夏草の間から立ち上がってくるような、そういう感じを受けますね。

『おくのほそ道』で、同じようなことを感ずるのは出雲崎なんです。みちのくの旅を終わって、日本海の金沢を目指して芭蕉は越後の地を下って行きますね。その時に出雲崎というところで作っただといわれる

荒海や佐渡によこたふ天河

これは実際にはどうも出雲崎では作っていない。よく調べてみますと、これは金沢に行く手前、富

山辺りで作ったんじゃないか。なかなかこの「荒海や」という句がまとまらなかったんです。その前の、

文月や六日も常の夜には似ず

という句はできた。これは今の直江津、昔の今町というところで発表しています。けれども、その一番のメインにあたる「荒海や」というのはまだできていなかった。本当に苦勞に苦勞を重ねて、それを芭蕉は『おくのほそ道』の中で「暑湿しじつの勞に神をなやまし、病おこりて事をしるさず」と記して、次に「荒海や」という句があるんです。「暑湿の勞に」梅雨時で、ジメジメしている海沿いの湿気の中で精神もすっかりくたびれてしまつて、という様な書き方をしていますが、「荒海」という一句を是非、出雲崎というところで発表したいと思つた。ところがそれは上手くできなかった。

「荒海や」という句をみますと、天の川ですから七夕の夜。佐渡の金鉱を掘る人たちは多く流人を、幕府は都やその他の地で罪を犯した人を送りこんで、佐渡から出られないようにして、金山を

掘るといふ苦しい勞役に課しております。

その金鉱掘り達にも、それぞれ生まれた在所には家族がいる、恋人がいる。そのような恋しい人たちのことを想いながら天の川を眺めている、七夕の日ですね。

「荒海」の句は、言ってみれば、現実における芭蕉の時代に、戦時と同じような幽閉されている人たちが、もう二度と出ることが、会うことが出来るかどうか、叶わない夢を抱きながら現実に囚われている姿。それを「荒海や」という、あの句に託しているわけですね。

そうしますと、平泉の藤原三代、義経一党たちを追悼した句が、芭蕉の時代からいうと大体五〇〇年前の世界の戦時詠であった。同時に、現実の戦時に匹敵するようなひとつの一句があつた。それが荒海の句であつたらうと思えます。そのように、過去における戦時を今に蘇らせ、現実における囚われた人たちの想いを「荒海」の句で重ねるといふこと、これが『おくのほそ道』の芭蕉の生涯における、ひとつのカケのような大きな

テーマであつたと見ることができます。

では、芭蕉が「夏草」を通して、一方は「荒海」を通して、それぞれ囚われた人々の、または、亡くなった人々の想いを、どうして芭蕉が描いたのであるうか、ということを考えてみたい。それが私の今日一番のテーマなんです。

(別紙プリントに)講演の趣旨を書いておきました。「古きよきもの」への探求という生涯のテーマがみちのくの風土、私は地貌という言葉を使っておりますが、風土を体験して深化し、さらに変化していく。芭蕉が『おくのほそ道』の旅を続けた日は、西行が亡くなってからちようど五〇〇年忌にあたり、芭蕉の中での西行を追慕する、そういう強い。ところが、旅を続け、西行を追慕したり、慕ったり評価したりしたことから段々変化してくるんですね。どういうように変化してくるかと言いますと、西行の眼鏡をかけた風土の見方、みちのくの見方ではなしに、芭蕉自身の見方を作りだしていく。そのひとつの過程が義経か

ら義仲へという、あの義経を大変慕いながら、西行も大変義経を慕っているんです。義経と義仲というのは五〇〇年前、西行は同時代の人物でしたね。

西行は義経に対して好意を持ちながら、義仲に対しては徹底的に嫌っている。ところが芭蕉は、義経に好意を持ちながら尚且つ、なぜこんなに想いを寄せるのかと思うくらい、義仲へ思い入れをしている。それが『おくのほそ道』を通して明らかになる。そのことを私はお話をしたい、これがひとつのテーマです。

私は、角川の雑誌『俳句』に連載している中で、人が読まないような『おくのほそ道』の読み方をしてみました。と言いますのは、芭蕉は同行した（河合）曾良とみちのくの旅をしながらみちのくの言葉がわかっていない。

我々は今、私がこういうお話をしても言葉は通じまずね。明治三十六年、標準語と言われる言葉が、東京の山の手の中産階級の人々が使う言葉を中心に、文部省が標準語を定めました。その

ために全国的に言葉が通じるようになった。

ところが、江戸時代は各藩によって皆言葉が違う。方言、訛りと言いますか、ですから旅をするのに一番困るのは言葉だったんですね。特に一番分かりにくいのは岩手県（一同笑い）。それから鹿児島、政策的にね。沖縄は勿論です。そして土佐、高知県も分らない。

それぞれの国が、皆独自の言葉で、そうしますと芭蕉は三十歳までは伊賀に居ましたから、伊賀の言葉をベースにして江戸の言葉が入っている。同行の曾良は信州の言葉に江戸の方言が入っている。そういう言葉を持って旅をしますでしょう。白河の関からみちのくへ来て言葉が通じるはずがない。ではどうするかというと、江戸で旧知の話が通じる、知っている人のところを訪ねる以外無いわけですよ。

みちのくでは須賀川の相楽等窮、芭蕉が会った頃は五十二歳。芭蕉は四十六歳ですから、みちのくの一歩の長老です。そしてしばしば芭蕉と出会って、芭蕉と俳諧の歌仙を巻いていたのが尾花

沢の鈴木清風、この二人です。相楽等窮は大庄屋農民としては最高のお金持ちでした。それから鈴木清風は紅花の御問屋で、紅花を作らせて、集めて薬にしたり化粧品にしたり、紅花を都へお餅のように加工して特に大阪の市場へ送るとい、みちのくで一、二を争うくらいのお金持ちですね。一番は「本間様にはなれないけれど」と唄われた酒田の本間様だと思いますが、その本間様と一、二を争う鈴木清風とは二回位、芭蕉は江戸で俳諧を巻いています。

その他、例えば酒田の医師・伊東玄順（淵庵不玉）だとか、ちよつと知っていたのが羽黒の染物業の凶司左吉（近藤左吉）、俳号では呂丸（露丸）ですね。そういう僅かな顔見知りの人はいましたけれど、まずは等窮と清風ですね。白河の関を越えて須賀川へ行つて、等窮と歌仙を巻く。その中で等窮が「白河の関はどうでしたか？」と単刀直入に聞くわけだね、「どういふ作品が出来ましたか？」、極めて具体的に聞くんですよ。そこで芭蕉は言いよどむ。「いやー、白河の関という

のは皆素晴らしい作品がありまして、上手い句は出来ませんでした。」私が気づいたのは、お宅がちよつと今、田植えの最中ですが、

#### 風流の初やおくの田植歌

みちのくへ入つてまず、耳に入つたのが素晴らしい田植歌でした」といふ風に称えますよね。この、「風流の」句で、芭蕉によって初めて田植えが句材になった。それまでは早乙女とか早苗饗とか、平安時代から歌人たちが和歌の題目に使つてますが、田植えという「労働そのもの」を歌つたのは芭蕉が初めてなんです。これは大変注目していることです。そして俳諧を巻きます。

その俳諧で、等窮が芭蕉の「風流の」の発句に続いて、脇句をつけます。

#### 覆盆子を折て我まうけ草

等窮

須賀川というところは何もなくて、僅かに我が家で出来てる苺を御馳走したい、こんなことで勘弁してくださいというよう挨拶をしますね。田植えどきの苺を以つて応じた。

このように須賀川では、等窮との交流が俳諧を

通して出来る。といえますのは、俳諧というのは「古典」の知識ですね。農民でも庄屋階級、武士や庄屋さんなど教養のある人たちは皆、古典をやりません。謡曲を謡います。謡曲を通して古典という共通の教養を持っている。ですから、俳諧を巻きながら、どういう古典に興味があるか、お互いに古典を読みこんで、その俳諧に出すわけなんですよ。そうすると、その古典の興味のあり方によって何を考えているのか、相手の気持ちに分かる。日常の口語では通じませんが、本当に片言隻語しか通じませんが、古典で分かる。そのために俳諧を巻くんですね。

また余談ですが、私の雑誌の長老である円城寺龍（市野川隆）という岩手県の俳人がいます。今日見えますが、その円城寺龍さんがしばらく前に、宮沢賢治の「永訣の朝」という、賢治の妹が亡くなる、永遠にお別れする朝の詩を朗読しました。その中に今、熱病でうなされて亡くなるうとする妹が最期に言った言葉。雲の降っている日で

したね。外に降ってる雲の雨雪を取って来て頂戴とお兄ちゃんに頼む。それを賢治の表現で言うところ。「あめゆじゆ とてちて けんじゃ」と書いてある。

私は昔、「永訣の朝」を学校で教えたことがありますが、ただ、雨雪を取って来て下さい「あめゆじゆ とてきて けんじゃ」とやった。それでは分かりませんよ。私がつくりしたのはね、岩手県の方言で言うところ、イントネーションが全然違う。我々はアクセントをずーつと平らかな感じでね、「あめゆじゆ」とやってた。ところが「あめゆじゆ」こうやって、最後を、ふつと（語尾を）上げる。あれでね、妹が本当に最期に言った、苦し紛れに言った想いというのが、あの表現でぱっと分かった。という具合にね、本当に地域の方言、地域の人たちが使うイントネーション、そんなものは他所の人は理解できない。

芭蕉一行も、石巻に行く途中喉が渴いた。で、この一杯の水が欲しいというわけ。曾良と一緒に一軒一軒、通りすがりの農家をあたっていく

わけなんです。ところがどこへ行っても言葉が通じない。見るに見かねたある武士が知人のところへ連れて行って、湯茶をいっばい貰って飲んだ。こう、いっばい飲みますな（笑い）、というような場面がありますね。結局ね、それが普通なの。言葉が通じない。

そのようにして相楽等窮の須賀川から仙台宮城野、そして御当地平泉へ来て、山刀伐峠を通過して尾花沢へ出ますね。そこで、あの鈴木清風が待つて。

『おくのほそ道』は、鈴木清風の招きに応じて成立した旅だと思えます。清風のところで、二回も俳諧を巻いてますから言葉が通じる。いやー、ゆつくりお休みください、それを「おねまりください」と言った。「ねまる」という言葉、芭蕉はもうびつくりしてましたね。この「ねまる」という方言、お楽にとりう方言に大変感激した。いい言葉ですな、「ねまる」というのは。

涼しさを我宿にしてねまる也

我が家にいるようなつもりで過ごさせてもらいます。こういう発句を立てましたら、清風が

つねのかやりに草の葉を焼

清風

梅雨の時期は蚊が多くて、草を焼いて、これで蚊やりの代わりにしております。粗末な蚊取り線香ですがどうぞ、と言った。「涼しさを」「つねのかやりに」上手いですね。その次に曾良が付ける。

曾良が目に付けたのは養蚕。

蚕飼する人は古代のすがた哉

曾良

お蚕さんを飼うという、このみちのくの一の生業でした。そして早速「蚕飼する」昔からみちのくの人たちは、こういう姿で蚕さんを飼っていたんです。尾花沢で「ねまる」という方言、それから蚕を飼うという作業、こういう句を残しますでしょう。これに目を付けたということは須賀川の俳諧と同じように大変、大事なことです。

尾花沢の鈴木清風はあの辺の宗匠ですから、俳諧を教わりに来ていたのが大石田の高野一栄一



行。若い、一栄一行がかねてから考えていたのは、新しい江戸の俳諧を学びたいということでした。清風達の俳諧は人事的な事が中心。談林俳諧といって既に古い俳諧だった。ところが、都で江戸を中心に流行っているのが、いかに風景を斬新に詠むかということです。これを「景気」といいます。景気の句、風景をいかに詠むかということ、これが新風だった、その中心が芭蕉でした。

ぜひ、芭蕉翁に新風を教わりたい、そこで予定になかった大石田へ引つ張ったんですね。芭蕉は途中、山形立石寺、山寺を観て、それから高野一栄のところへ行つた。一栄宅は最上川を眼下にする大変素晴らしい屋敷です。一栄は最上川の大船主というか、船問屋の主です。そこで巻いたのがご存知のとおり

さみだれを集めてすゞしもがみ川

芭蕉がこの句を発表した時は、みな驚いたと思いますよ。梅雨、五月雨。室町時代から「梅雨」という言葉はありましたけれども、使われたのは五月雨。梅雨という言葉が頻繁に使われるのは明治、

大正にかけてからです。今は五月雨という言葉はあまり使わずに梅雨という言葉を使いますけれども、五月雨という言葉はどうか。同じ梅雨であつても五月雨というと本当にこう、身体に纏まといつくような感じでしょ。五月雨の「さ」という言葉は、農業に関する言葉なんです。早乙女とか五月雨とか早苗とか、みな「さ」という言葉。

あの「さしすせそ」は殆ど農業に係る言葉なんです。農業というのは一番大事な生業でしたから、その言葉がみな入っている。特に「さ」という言葉は大事で、「五月雨」と言うのは、あれは稲を、苗を育てるための雨。それで五月雨。

稲を育てるための雨というのは天からの恵みですから、五月雨の降るとき苗を植える、その早苗を植えるというのは神様の力によつて稲がすくすく大きくなって秋に刈り入れが出来る。田植えの時期というのは、神聖な時期なんです。ですから田植えの始まる前、五月雨の時期は、皆、おこもりをするんです。男と女を一緒にはいけない、男は男、女は女で分かれて物忌をするんです。そ

れが五月雨の時期なんです。

『源氏物語』の帚木はらきぎの巻、第二巻に雨夜の品定めという巻が出て来る。その中に、五月雨の日に男達が集まると女の噂話をする。どういう階級の女が一番自分たちの経験のなかでは良かったか、上流階級、中流階級、下流階級、三つに分けて女の噂をする、雨夜の品定めといってね。あれが五月雨の時期です。というように、五月雨の夜というのは物忌をする時なんです。その五月雨、稲作に一番関係する五月雨が、それぞれの支流から集まって今、一本の大きな川を作る。これが最上川ですね。

「さみだれを」こんなスケールの大きな句を芭蕉が示した時に、高野一栄達は飛びあがる程びっくりした。素晴らしい句ですね。

この「さみだれを」の句に、一栄達は目を回すくらい驚いて

岸にはたるを繋ぐ舟杭

一栄

おりから蛭が飛ぶ、こういう脇句を作った。

今お話ししている『おくのほそ道』というのは

元禄二年に旅をして：全体では原稿用紙四十枚位（四〇〇字詰）、それを五年もかかって芭蕉は推敲に推敲を重ね、元禄七年十月十二日大阪で亡くなる、その最後の旅へ出るのが五月十一日、そのひと月前四月ぐらいにやっと、紀行文『おくのほそ道』を完成させている。

『おくのほそ道』は、元禄二年に御当地へ旅に来たそのままじゃないですよ。五年もかかって手を入れて、芭蕉唯一の生涯に遺産として残した。芭蕉の最期の考え方が入っているとみる事ができるわけです。

「集めてすゞし」というのは、仲間に対して俳諧を巻くときのご挨拶の発句なんです。これが、独立した一句としては「さみだれを集めてすゞしもがみ川」は弱い。そこで

五月雨を集めて早し最上川

一句独立した、堂々とした句にした。「早し」じゃないやダメですね。いま我々は、多くの人は俳句を作りますね。また、連句（俳諧）を巻きます。

芭蕉の時代は半分半分。芭蕉は一句独立の俳句

も作るけれども、連句を巻いてる。ところが、『おくのほそ道』では連句を巻いてる芭蕉のやり方から段々、一句独立した俳句をつくることへ全体の動きが芭蕉の中で変わっていく。各地で連句を巻きながら尚且つ、一句独立した俳句をつくるということになりつつある。そのひとつのお手本が「荒海や」です。あれは発句にならない。

ところが「さみだれ」の場合には、「集めてすゝし」、すゝし、というのは発句をやりましよう、俳諧を巻きましようという、仲間を一緒に誘い込むような感じがありますが、「集めて早し」と言ったら独立して強い表現ですから相手を受け入れない。ですから『おくのほそ道』を完成させる時は独立した形で、俳諧じゃなくて俳句として出した。

それからもうひとつ、この『おくのほそ道』の旅で俳諧を巻く一番の特徴は、芭蕉の恋句。芭蕉は真面目で、艶っぽいところが何もないと思いがちですがそんなことはない。『おくのほそ道』では、

ひとつや  
一家に遊女も寝たり萩と月

市振ではちよつと艶っぽい話があります。それからみちのくに入る前の那須野では

かさねとは八重撫子の名成べし 曾良

こんな句があります。けれど、あと真面目二辺倒だと思われるでしょ？ ところがそうじゃない。連句になつては実に艶っぽい。出羽三山で歌仙を巻いた中に、芭蕉の生涯でも一、二という位の連句がある。どういう場面か：そこが私の専門なんですけれどもね（笑い）。男と女が逢っている。平安の貴族の濡れ場です。女性の方がなよなよしちゃって男が手に負えなくなっちゃうの。折からちよつとお月様が出ている。

月見よと升起されて恥しき 曾良

この歌仙の恋句における本領發揮というところ。月が出たよ、一緒に月を見よう、と女を起こす。「恥しき」とは裸なんです。相手を起こしてね、「うーん」と起きた（笑い）

髪あふがするうすものゝ露

芭蕉

薄物ですね、中が透けて見える。蝉の羽みたいな薄い布を纏っているんですよ。「髪あふがする」湯上がりか何かですか。侍女に扇子か何かで仰がせている。「うすものゝ露」こう、薄く纏っているだけなんです。

それに対して三十歳位の呂丸がつけたのが  
まつはるゝ犬のかざしに花折ア 呂丸

その前が女性でしょうね、その女性が犬を抱いている。元禄の時代はとくに犬を大事にした。その自分が飼っている犬のかんざしに花をつけた。「まつはるゝ」纏わりつく「犬のかざし」犬のかんざしね、「花折りて」という画面。

更に、酒田での俳諧では芭蕉の恋に対する考え方が出て来る。不玉さんの付句

蚕種うごきて帚手に取 不玉

ちよつど種から蚕が生まれる、蚕が生まれると箒ではなく。それに対して芭蕉が付けたのが、これが

芭蕉の句の面白いところなんです。

錦木を作りて古き恋を見ん

芭蕉は、先述した「古き良きものの探求」ということが、みちのくへ来る時のテーマだったんです。みちのくの恋はというと、好きな人の家の前に「錦木」を何本も立てるんです。それを千回も立てたというんです。好きな人が錦木を自分家の前に立てたらすぐ、家の中へ入れる。ラブレターにあたる錦木を立てても家に入れられなかったらその恋は終わりなのです。みちのくにはまだ錦木を立てて恋を占うという「錦木を」が残っている。つまり、一途な恋なんです。みちのくというところは、ひたすらな恋が残っていると芭蕉は思っている。それに対して曾良が付けたのは

ことなる色をこのむ宮達 曾良

いや、そうじゃない。本当の色恋というのは神代の昔から移り気がいい、これが色好みの本領だと、このようにつけた。曾良は、神祇、神道の専門家です。神は昔から、恋は移り気だという。

いやいや、恋は一筋がいいんだと芭蕉は言った

んですね。私はこれが面白いと思った。相手を次々変える色好みが一番だという曾良に対して、芭蕉は、いや、一人を一途に想う恋がいいんだと言った。これはちよつと記憶しておいた方がいいです(笑い)

『おくのほそ道』の後半、平泉から尾花沢、大石田を経て出羽三山へ行きます。出羽三山は、芭蕉は生涯でこんな二〇〇〇メートル級の山へ登ったのは初めてでした。そこで何を見たかというところ、ミネザクラかといわれていますが、桜を見たわけです。その文章をちよつと読んでみます。

雲霧山気の中に、冰雪を踏<sup>ふみ</sup>てのぼる事八里、更に日月行道の雲関に入<sup>い</sup>か<sup>と</sup>あやしまれ、息絶<sup>たえ</sup>身こ<sup>え</sup>えて頂上に臻<sup>いた</sup>れば、日没<sup>ぼつし</sup>て月頭<sup>あらか</sup>る中略 三尺ばかりなる桜のつぼみ半ばひらけるあり。ふり積雪<sup>つゆ</sup>の下に埋<sup>うめ</sup>て、春を忘れぬ遅<sup>おそ</sup>ぎくらの花の心わりなし  
もろともにあはれと思へ山桜花よりほかに知る人もなし

出羽三山の中で雪に埋もれて、やっと芭蕉が訪れた頃花開いてる桜があった。これは実は桜じゃなく、ミネザクラという高山植物なんです。が桜だと思つた。私が今読みましたところ「三尺ばかりなる」これちよつと記憶しておいて下さい。出羽三山で芭蕉がこのことを経験したということが後になって、『おくのほそ道』を終わって翌年、大津の膳所<sup>ぜんぜ</sup>というところで義仲のお墓を詣でます。その時に詠んだ句が義仲に対する想い

木曾の情雪や生えぬく春の草  
これが木曾塚で詠んだ時の句です。みちのくの旅を終わって、日本海側を金沢から小松を通り、福井から敦賀、更には琵琶湖のほとりを通って大垣へ行きます。大垣が「おくのほそ道」の終点です。後半になると、芭蕉は西行が慕つたところよりは、義仲の跡を尋ねるようになります。

『おくのほそ道』を全般に見てきますと、芭蕉は「日々旅にして、旅を栖<sup>すま</sup>とす」という芭蕉の基本的な始めの考えを書いて、「舟の上に生涯をう

かべ馬の口とらへて」という、あの文章がありま

す。  
当時、「船頭馬方御乳の人」という諺がある。つまり船頭とか馬方とか、乳飲み子を子守する乳母とか、どうしようもない者、身分の低い人です。ところが「船頭馬方御乳の人」の気持ちに自分はなりたい。草でいったら名もない草の命というものを大事にしたい、こういう想いで旅をするなかで芭蕉が西行を意識したところは、旅立ちから始めて芭蕉が西行を意識したところは、旅立ちから始まって仏五左衛門、遊行の柳・白河・須賀川・実方<sup>かた</sup>の塚・仙台・松島・平泉・出羽三山・象瀨<sup>きま</sup>・市振・種の浜…、皆西行の後を追って尋ねている。西行五〇〇年忌でしたからね。

ところが後半になってから、そこに重ねて義仲の跡を訪ねる。小松では多太神社、それから実盛の甲<sup>かぶと</sup>で、

むざんやな甲の下のきりぎりす  
木曾義仲は二歳の時に実盛に託され、養育された。実盛は、木曾での育ての親です。その実盛が、年を取ってから白髪を黒く染めて義仲の軍と戦い、

戦死する。義仲は、自分の育ての親の甲を多太神社に奉納した。「むざんやな」というのは、義仲の気持ちを詠んだ芭蕉の句ですよ。

義仲の寢覚の山か月悲し

越前燧<sup>ひらちやま</sup>山

というように、芭蕉は次第に義仲の方へ傾いてる。西行は義仲が大嫌いだ。義仲は木曾から出て都を平定します。朝日將軍と呼ばれた。しかし(後白河)法皇に嫌われ、義経の軍に攻められて義仲は近江の粟津で亡くなります。義仲が亡くなったと聞いて西行が歌つた「木曾と申す武者死に侍りけりな 木曾人は海のいかりをしずめかねて死出の山にも入りにけるかな」。ああ、木曾という武者が亡くなったそうだな、あの木曾の山猿が都に錨を沈めて平定しようと思つたて出来るはずがない。死んじやったよと、本当に憎々しく西行は詠んでいるのです。

ところが、芭蕉は、西行が好きであつたけれども、西行以上に義仲の方へ心を入れる。西行を好きだったのは、やっぱり自分と性格が似ている。西行は生涯迷いの人物だつた。二月の望月<sup>もちつき</sup>の頃に



亡くなりたいたい、という様な辞世の歌を残して亡くなっている。西行が嫌いな義仲に対して、芭蕉は「木曾の情」を詠んでいる。「夏草や」と重ねるわけです。「夏草」を通して義経一行、藤原三代の先人を詠んだのです。

今度は「春の草」を通して義仲の心を考えると、雪の中を生え抜いた春の草のような、義仲は純情な一途な男だった。自分はある義仲に心惹かれる。出羽三山でのミネザクラを、深雪の中に春を忘れぬ志を持つて花を咲かせたと讃えた。あの描写を頭に置きながら『おくのほそ道』が終わった翌年、木曾塚でつくった「春の草」の句がある。その時に義経を悼んだ、あの「夏草や」という句を置きながら「春の草」を重ねた。義経に対しては西行が肩入れをしていた、芭蕉は義仲に肩入れしている。段々違ってくる。芭蕉独自のものが出来ています。

いよいよ芭蕉の最晩年です。芭蕉に奥さんが居たかどうかは分からないけれど、寿貞という女性

が芭蕉のお妾さんじゃなかったか、と言われてます。多分そうだったんでしょう。芭蕉が、桃印という姉さんの子供ですが、十六歳のとき、姉さんが亡くなるものですから引き取ります。そして自分の身の回りの世話をさせてました。その時に芭蕉は三十歳位の寿貞という女性とお妾さんの関係になります。正式な結婚をするには大変お金が要りまして、当時正式な結婚というのは四割くらいでした。六割くらいはお妾さんの関係だろうといわれる。お妾さんといっても一年交代のお妾さんもあるし、五年から十年の契約するお妾さんもあります。

ところが、近年の説では、甥の桃印と寿貞が仲良くなって、十年ほど芭蕉の許から消えてしまします。出てきた時はすっかり寿貞も桃印も劣核、結核です。そして桃印は、芭蕉が最後の旅をする一年前、元禄六年三月末に三十三歳で亡くなります。

芭蕉は、その寿貞と桃印を許したんです。もう大変な苦しみがあったと思います。桃印が亡く

なった時に何の借金か分かりませんが、大垣の宮崎荊口という武士に借金をしておりました。

「拙者、当春、猶子（甥のこと）桃印と申すもの、三十餘迄苦勞に致候而病死致、此病中、神魂をなやませ、死後斷腸之思難止候而、精情草臥、花の盛、春の行衛も夢のやうにて暮、句も不申出候」と書いている。

これは桃印が亡くなった時に借金をした相手、宮崎荊口に宛てたもので、そして葬式をあげてやった。

翌年、大阪の旅の途中、六月二日に芭蕉庵で身を養っていた寿貞も亡くなります。その時寿貞の連れ子、二郎兵衛を連れて旅をしてましたが、途中から江戸へ帰します。そして寿貞の世話をしていた猪兵衛さんという老人に宛てた、長い手紙があります。一節だけ言いますと「寿貞無仕合もの、まさ、おふう、同じく不仕合」まさ、おふうは子供でしょうね、（二郎兵衛含め）三人連れ子がいます。まさ、おふうは桃印との子供かもしれない。

考えてみれば寿貞は幸せなどなかった。その子供である、まさ、おふうも同じく不幸せだ」とかく難申尽候」、長い文なんですがね。「何事も何事も夢まぼろしの世界」、夢という言葉が芭蕉は大変好きです。「夢まぼろしの世界、一言理くつは無之候」（元禄七年六月八日、猪兵衛宛）です。そのお盆の時に伊賀によって、「尼寿貞が身まかりけるときぎて」、

数ならぬ身となおもひそ玉祭り

亡くなったからお前、私は世の中で人間の数に入らない屑だと言ったけれども、そんなこと言わないでもいい。亡くなったらもう、仏さんだ。こういう句をたむけて、寿貞の死を送っている。

かつて自分のお妾さんであった寿貞が甥に取られてしまつて、十年間行方も知れず、果ては結核になつて転がり込む。その甥も亡くなる。世話をし、更に寿貞も許して。まあ、この様な形で寿貞を供養する。いつてみれば芭蕉の恋というのは、みちのくで古き恋だと言った「錦木を作りて」と同じように、一途なんです。純粹で一途なもの、

それが大変芭蕉が好きなものなんです。西行と違うところなんです。西行はどこらかというところ、やっぱり都の貴族ですね。迷いに迷って、あんまり、これはという決断がない。芭蕉の方は、その西行を慕うけれども、西行的な性格を持ちながら一途に、純粹にといつた決断を出来た。

### 旅に病で夢は枯野をかけ廻る

これは勿論、大阪で旅に病んで、更にもっと旅をしたという夢を自分が持っているという解釈が主ですけれども、やっぱりここでも「夢」と言っている。この「夢」というのは「夏草や」の「夢」と同じように、夢を持ちながら、叶わぬ想いでこの世から去って行った実に多くの人々、藤原三代、更には義経一党、そして義仲もそうでしょう。結局は夢半ばにしてこの世から去って行った、自分も言われてみれば夢半ばにしてこの世から去るようなものだ。「旅に病で」これからもっともつと九州へも旅をしたいとか、北の、外ヶ浜まで旅したいという夢よりは、私は、人間として生まれて

叶わぬ夢を持ちながら、我々は皆亡くなっていく。そういう夢が最期になって義経の夢、藤原三代の夢、義仲の夢、そういう夢を持った者たちが、わーっと死の枕に立ちあがって来る。それを、最終の「旅に病で」と言っただんじやないかと私は思っています。

芭蕉が生涯をかけて求めるものは何であったか。それは芭蕉が亡くなる元禄七年、芭蕉に弟子入りをした東本願寺の門主の弟がいました。越中井波の瑞泉寺の中興の祖と言われている浪化上人。この浪化上人は去来のお弟子でしたから、去来を通して浪化の俳句に助言をしております。

「俳諧あらび可申候事は言葉あらく、道具下品の物取出し申候事に無御座、ただ心も言葉もねばりなく、さらりとあらび仕候事に御座候。」結局、俳諧の言葉というのはただ荒々しくいうんじやなくて、心も言葉もネチネチしくなくていい、さらりと、尚且つ、荒々しい素朴さが無ければ駄目です。あんまりこう、お豆腐の肌みたいになれ

て粘々して、というものでは駄目なのだ。言葉も心も、さらっと「あらび仕候事」、これが大事だと。軽み軽みと言ってるけれど、ただ「軽い」がいいんじゃない。「あらび」ということ、「軽み」とは只軽いではなく「さらりとあらび仕候事」これが大事だということです。

生き方としては今申し上げた通り、ひとつの純情、一途な夢を持ちながら、結局我々は、夢半ばでもって亡くならざるを得ない。出会っていれば一日一日を精いっぱい生きることでしょう。これが「日々旅をして旅を住処とす」です。毎日旅に出るような、新鮮な気持ちを持って送るということです。結局、そういうこと以外に人生はない。皆、夢を持ちますけれども、夢が全部叶えられたという風にして亡くなる人は居ないだろうから、あの義経、藤原三代と同じように夢半ばで亡くなりませんが、一日一日が充実していた日であったという風に回想出来れば、それで人生良しにしなきゃいけない、ということをお芭蕉は生涯かけて語っている。平泉の地という最高の切り口、芭蕉の考え方

の切り口を明らかにしたところでもあります。時間となりました、話す極楽、聞く地獄、御苦労さまでした。(拍手)

### プロフィール

みやさか しずお  
昭和12年 長野県生れ。「岳」主宰。  
第45回現代俳句協会賞 第1回山本健吉文学賞  
第58回読売文学賞各受賞。  
現代俳句協会会長

句集『山の牧』『宙』『雑土蔵』『草泊』  
著書『語りかける季語』『ゆるやかな日本』  
お国ことば(「気嵐」「猫柳」など)にもこだわりを。

\* 天に風鳴りていよいよ曲がる窓  
泣くやうに引き摺るやうに蝦夷の蟬

# 今年 よみがえる 「信の風光」

佐々木 邦世

「秀衡の母」が、延暦寺の澄憲僧都に請託して説法成文された『如意輪講式』が、世界遺産登録五周年の今年、中尊寺本堂で復原厳修されることになりました。

「講式」とは、經典の解釈や仏・菩薩の功德、信仰の道標を、名文をもつて讚歎し、各段ごとに声明の音律によって偈を唱える。偈とは韻文、詩の形で仏教を説いた漢文です。

少し説明を付します。

「秀衡の母」とは、基衡の妻で、『吾妻鏡』の「寺塔已下注文」（文治五年九月十七日条）には、

観自在王院「阿弥陀堂と号す」、基衡妻「宗任女」建立なり。四壁は洛陽の靈地・名所を

図絵す。仏壇は銀なり。高欄は磨金なり。と記しています。安倍宗任の娘ということですから年齢的にみて吟味の余地はあるかも知れませんが、いずれ宗任が相当高齢になってからの子であったろうし、基衡と妻は年齢の差はそれほど無かったものと想定されます。

没年は、後に享保十五年に建立された墓碑に「基衡室安倍宗任女墓 仁平二年四月二十有日」と刻しています。

観自在王院跡の阿弥陀堂に「哭き祭り」が年中行事になっています。「四月二十日、(毛越寺)一山の衆徒、堂を廻り葬礼の儀式をもって法事」をしたことが、江戸時代の平泉研究の先駆者である相原友直の『旧蹟志』に書き留められています。妻に先立たれた基衡の悲嘆の様を伝えるように、僧は逆さ袈裟を被って行道し、「その声どよむまで、よくと哭きし」と、菅江真澄も伝えています。この、基衡の妻が、「秀衡の母」です。仁平二年（一一五二）とすると、秀衡三十一歳のときです。

基衡の妻と書かず「秀衡の母」と伝えられたの

は、基衡が夭死（早く世を去った、あるいは頓死）したという事情もあったかと思いますが、秀衡が、鎮守府將軍となり、さらに陸奥守となつて、その存在が京の方にも聞こえていたからでしょう。

京都の大覚寺に所蔵されていた『如意輪講式』は、鎌倉時代の写本です。その奥書に、

本に云う。陸奥秀衡の母の請によつて、延暦寺澄憲僧都の所作なり。

在る人云う。秀衡の母、年来此の如意輪観音を恭敬供養す。此の式をいか、せんとするところに、澄憲僧都（の尊）を聞きて、金一馬を贖勞（代償）としてこれを誂う。その時、澄憲書写山に籠り、二七日の間、精誠を致しこれを書すと云々。

秀衡の母は、年来、如意輪観音を信仰し敬つていた、ということです。教えを深くうけとめたいと願つて、独自に「講式」を作ってもらいたいと思つていたところ、延暦寺の澄憲僧都の評判を聞いて、請託したということです。

延暦寺の澄憲僧都とは。その出自（生れ）は、父は、後白河天皇に重用され博識多才で知られた藤原通憲。というより、平治の乱（一一五九）で非業の死を遂げた信西入道です。弟の明遍や甥の解脱上人貞慶など、学僧の家系でした。

「講式」を起稿するにあたって、澄憲が播磨国書写山に二七日（十四日）籠もつたというのは、書写山は如意輪観音信仰の山で、あの摩尼殿の本尊が、如意輪観音です。

しかし、澄憲は当時まだ二十代半ばで、「能説名才」とか「四海大唱導」などと称讃されるようになるのは、もつと後、承安四年（一一七四）に内裏の法会に祈雨の表白を述べ、「言泉涌くが如し。聞く者心情を動かさざるなし」（九条兼実の『玉葉』）と、名声を博してからのことでした。

当時はまだ、比叡山に在つて詞章の学を修めながら、講經唱導の道を期していたころでした。

「講式」の構成と概要を記します。

先ず表白（趣意）で、十方諸仏のなかで観自在





(観世音)の慈悲がことに深重であり、六観音の内で如意輪の利生がもつとも際立っていることを述べます。つづいて、七段の項目を立てて、

第一に観音本源門(諸仏の慈悲は観音一体に)  
 第二に名号功德門(如意輪観自在の字解功用)  
 第三に形声利益門(六臂(手)の意味を解説)  
 第四に本願利益門(一切の罪障を滅すること)  
 第五に宿縁厚故門(日本に縁深き事例を叙述)  
 第六に如意福德門(貧苦から救うを第一とす)  
 第七に往生極楽門(安養の弥陀、娑婆に観音)そしてこう説く。露命消えやすし。遅るといえども先立つと雖も、冥途は遂に行くべき路なり。この菩薩は、大船師として中有の迷界を渡し、大導師として西方の覚岸に送る。安養には弥陀と号し、娑婆には観音と現れき。

この講演結縁の力によって、今日より永く……  
 南無帰命頂礼大慈大悲大聖如意輪観自在菩薩と。秀衡の母は、晩年、如意輪観音に恭敬供養し「南無」一筋の祈りの日々を送ったのでしよう。

平成四年、『大覚寺聖教目録』が発行されて、この澄憲の「講式」が全文遺っていることを知り、大覚寺および関係者のご厚意によって写真版を贈っていただき、解読することができました。

中尊寺の『論集』創刊号に、写真版・解読とその読み下しを載録してから、十九年が経ちます。これは、『吾妻鏡』の記載や遺跡調査の成果を踏まえて語る「都市平泉の構造」とか、「街のざわめき」などと違った視点から、みちのくの山河に飡する「信の風光」と受けとめたいものです。

(中尊寺仏教文化研究所長)

平泉世界文化遺産五周年記念  
 「如意輪講式」奉修委員会

委員長 中尊寺貫首 山田俊和  
 副委員長 藤里 明久(毛越寺)  
 副委員長 海老原廣伸(千葉県泉養寺)

委員 柴 佳代乃(千葉大学文学部教授)  
 近藤 静乃  
 (東京芸術大学音楽学部 講師)  
 佐々木仁秀 佐々木邦世  
 清水 広元 千葉 慶信  
 菅野 宏紹

# 天台宗僧侶の卵たち

桑 谷 祐 顕

はじめに

今回はこの紙面をお借りして

「比叡山の若いお坊さんや、地方から本山に上がって天台宗の僧侶となろうとしている若者が、どのように勉強し、どのような修行を重ねて一人前の僧侶としてのスタートを切るのか」

という、普段はなかなか知ることの出来ない、現代天台宗版「僧侶の卵たち」の生活や、その日常の一端をご紹介します。

もしかしたら、皆さんの菩提寺のご住職や、その若さん（後継者、法嗣ともいう）も、ここで勉強と修行に励まれたかもしれませんね。

特に今回は、そうした志ある若者が集い、他の一般大学と同等の教育を受けつつ、天台宗僧侶と

しての高度な専門的知識を習得することが出来る、天台宗立の専修学校「叡山学院」のあれこれをご紹介しますと思います。

そういう、わたくし、叡山学院の学監を務める桑谷祐顕と申します。学監とは、学校の教育力やキユラムや学生の成績など学生に関する一切や、学校運営に当たる実務的な会計をも管理する役職で、早い話、教頭と会計責任者を兼ね備えた立場にあります。

しかも、週の半分、学生寮に寝泊まりしておりますので、学生たちの日常は結構見聞しているつもりです。

果たして、どういいうお話となりましょうか。

## 一、比叡山麓の学舎

京都駅から湖西線に乗って二十分ほどで、JR比叡山坂本駅に到着します。琵琶湖の南端から京都側、即ち西側を北上すること約十分程度の場所です。一方、東海道線や新幹線は琵琶湖の東側を

北上して行きます。

さて、その坂本の町、「比叡山の登り口」「石積み町の町坂本」「日吉大社の門前町」とも紹介され、食いしん坊（いや、失礼、食通ですね）の方は、大鳥居近くの「鶴喜そば」のある所ですねとおっしゃる。確かに、その通り。

JR坂本駅から二キロほど西側、即ち山側に緩やかな坂を登っていくと、比叡山延暦寺に登るケーブル駅に着きます。その途中に、伝教大師最澄さまの誕生地に建てられたという生源寺や、天台宗の宗務一切を取り仕切る天台宗務庁、天台座主猊下の山麓の住坊であった滋賀院とともに、その東側に隣接して我が校「叡山学院」があります。

ちなみに、滋賀県の観光ポスターで苔むした石積みと、そこにおおいかぶさるように色鮮やかな紅葉が写った写真などは、この坂本の里坊辺りで撮影されたものが結構多いらしい。里坊とは、比叡山のお坊さんたちの山麓の住居をいいます。

そうした、昔ながらの里坊や住居跡が居並ぶ大津市の伝統的建造物保全地区内に叡山学院はあり



叡山学院全景

ます。そして通りを隔てて斜向かいには、地方から来た学生たちのための学生寮「叡山学院寮」があります。

そもそも僧侶は、インド以来、僧伽（サンガ）といって、僧侶集団を形成して共に学問・修行に励んでいたものでありますから、本校も勿論、衣食住を共にした寮生活や随身生活を基本としています。随身とは、本校の場合、あるお寺やお堂に住まわせてもらって、その寺院の仕事を手伝いながら学校に通わせていただくものです。

比叡山上の阿闍梨さまのところや、比叡山の里坊、京都市内の有名寺院など、多くの先輩僧侶のいる世界に飛び込んで、新参者である上に、しかも「新米僧侶の卵」としての生活をスタートさせるのです。

五月の連休明けまで持ちこたえた学生は、だいたい中途退学せずに学業を終了し卒業して行きます。昔、学生寮に入るのが嫌で、学生寮前の坂を裸足で、両親の車を追ってどこまでも追いかけて行った新入生もいたといえます。

ともかくにも、生活環境も、僧侶としての生活も、はたまた先輩後輩の上下関係も、全てが、ガラリと変わって、忝心なしに本人を巻き込んで、様々なことが展開して行くのです。傍から見るよりはるかに大変な、新米・新入生の生活がスタートします。

## 二、宗祖の学校、その由来

そもそも、現在のこの「叡山学院」の前身を遡ってゆくと、宗祖伝教大師最澄（七六六～八二二）さまの時代にまで遡ります。

宗祖大師は、延暦二十三年から二十四年（八〇四～八〇五）の一年間、還学生として、桓武天皇の命により中国（当時は唐）に渡られ、聖地天台を訪れ、天台大師智顛（五三八～五九七）禪師の学を学び、多くの経典類を日本に伝えられました。

その翌年、延暦二十五年（八〇六）一月二十六日、太政官符が出され、南都の諸宗に加えて始め

て天台宗に二人の年分度者（その年に僧侶と成ることが許された得度者）を賜りました。即ち、一般にはこれを以て、天台宗が開宗されたということになっております。

当時、僧侶は国家の完全管理下に置かれており、得度に於いても朝廷の承認が必要で、国家の承認を得たものしか僧侶になれませんでした。よって、この日、年分度者を一名許可されたということは、そのまま、旧来の華嚴宗、法相宗などの南都諸宗と同列に、中国から将来（伝来）されて間もない新興天台宗が、早々と国家の承認を得たことになるのです。即ち、桓武天皇を始め、当時の国家・朝廷にとって、伝教大師の天台宗は、それほど魅力的で、如何に大きな期待を担っていたかが容易に想像されます。

さて、この二名の年分度者、「止観業」と「遮那業」という「法華円教を専門とする者」と「天台密教を専門とする者」の、二つのコースに分類されますが、ともかくにも、これを契機として「天台宗僧侶の育成」がスタートすることになっ

たのです。

まさに、その日を以て「天台宗の国家承認」＝「天台宗開宗の日」とし、また同時に、我が叡山学院の前身としての「天台宗の子弟育成がスタートした日」と解釈されています。

以来、宗祖大師が、後世の天台宗僧侶に示された規則、『山家学生式』のご精神に則り、学問と修行は、車の両輪、鳥の双翼に比され、「解行双修」を旨にその教育が施されているのです。

無論、当初は比叡山上の堂舎にて天台宗僧侶の育成が始まったのですが、その教育機関は、時代の変遷を経て明治時代に比叡山大学林、西部大学への改称を経て、明治三十九年（一九〇六）に便宜を図って比叡山麓に移されました。

その後、比叡山専修院を経て叡山学院となり、現在は学校法人延暦寺学園の組織下に属しながら、その運営は天台宗に依る天台宗立の専修学校となっているのです。宗祖大師の弟子となった天台宗僧侶を育成し続けて一二〇〇年余、比叡山麓に宗祖大師の教育理念を掲げ、その理念を継承す



る本校が、「天台宗の最高学府」とも呼ばれる所以であります。

### 三、天台僧侶の教育プログラム

さて、昔の比叡山上に於ける学僧教育に関する詳細な内容は不明ですが、ここに現在の叡山学院での教育プログラムをご紹介します。尚、以下のカッコ内の数字は、修業年限を示しています。

現在の叡山学院には、仏教総合学科（四年）、仏教基礎学科（二年）、仏教研究学科（二年）、仏教専修学科（二年）の四学科と、仏教基礎学科特修（一年）、仏教研究学科特修（一年）の二つの特修科、以上、合計六学科があります。

まず第一に、「仏教総合学科」は四年制コースで、その高度な専門的知識の習得とその専門的技術が社会的に評価され、この課程を終了した者には「高度専門士」の称号授与とともに、大学院受験資格が与えられます。つまり、現在、叡山学院は専修学校であります。文科省が一般四年制大学の卒

業者と同等の扱いをすることを認めたことになり  
ます。

平成十八年（二〇〇六）、叡山学院の永年の教育プログラムが評価されて、滋賀県で二番目の早い段階で「高度専門士」授与が許可されました。その結果、既に本校卒業生で、自坊から地元の大学院に進学した卒業生もおります。

言うまでもなく、文科省の承認するところの文化教養課程としての「仏教総合学科」は、専修学校としての専門的知識と、片や四年制大学と同等の高い教育レベルを確保しているのです。

ですから、本校は天台宗の僧侶育成機関ではありませんが、一般大学の教養科目である文学・哲学の人文科学系の他、経済・法学等の社会科学系や、環境自然学、自然科学等の自然科学系や、その他にも情報論やスポーツや外国語（英語）など、一般教養科目も一般大学と同等単位必修となっております。

お坊さんになるのに、「何でスポーツや外国語が必要なんや？」といわれますが、一般大学と同

等の教養科目を履修しているが故に、文科省は大学卒業と同等の扱いをしてくれていますので

す。  
無論、円密禪戒を特徴とする天台学の基本科目に加え、中国・日本仏教史や仏教概論等の一般仏教学に加え、法儀声明、



声明公演

詠讚道（ご詠歌）、布教、書道、止観実修、実践仏教等々の実修・実践科目が、一年次から相当数組み込まれています。正に、これ等の実修・実践科目の豊富さと奥深さが「高度専門士」の称号授与の所以であると言えます。

無論、卒業論文も必修で、四年間のトータルとしては、一般大学の1・五倍の総授業数を受講し、全ての単位を取得（必修）しなければなりません。ですから、月曜日から土曜日まで、ほぼ毎日ほとんど空きなく授業が埋まっており、中学高校並みに授業がひしめき合っています。

他大学のように選択制ではなく、全ての科目が必修なので、逃げることも、落とすことも出来ません。

しかし、何時も私は感心するのですが、こんなにギューギュー詰めのカリキュラム（こう言う、私達がそのようにカリキュラムを編成しているのですが……）を組んでいるのに、卒業時の平均点が、八十点を超える生徒が、毎年数人存在します。実技や実修など、得手不得手もありましようが、それも難なくクリアし、無論、講座科目のペーパー試験もトータルで八十点を超え、卒業時には、天台座主賞（平均点八十五点以上）や叡山学院院长賞（平均点八十点以上）を貰って帰るのです。

すべての科目でそうなのだから感心脱帽致します。

す。しかも、ほとんどの学生は、ほぼ全ての科目をクリアして、ほぼ全員みな上級クラスに進学します。

世間で言われる自由気ままな一般大学生に比べ、私が言うのもなんですが、「彼らは、本当に大したものだ」と、我が校の学生ながらも、私はつくづく感心しております。

\* \* \* \* \*

さて、「仏教基礎学科」は二年制コースで、先の「仏教総合学科」四年制コースの前半二年間のコースです。一方、「仏教研究学科」は「仏教総合学科」四年制コースの後半二年間のコースです。また、「特修コース」は、二年間の仏教基礎学科の前半一年間のコースと、仏教研究学科の前半一年間のコースです。

こうした様々なコース設定は、学生の置かれた様々なニーズに応えるためで、急に師僧が亡くなつて帰らねば成らなくなつたとか、一年の猶予しかない、そういう僧侶ならではの要望に応える目的で設定されたものであります。

特に、「仏教研究学科」は、四年制他大学の卒業者が編入するコースで、理系の研究者であった者やコンピュータのプログラマーであった者など、ユニークな学科の卒業生や社会人経験者もこの課程に多くいます。その意味、このクラスの講義に行くのはなかなか楽しいものです。それは、

仏教以外の学問を学んだ連中や、社会人経験者のバラエティー豊かな意見を聞けるからで、世の様々な若者の認識や行動原理が聞けます。実は、私達はそうした彼らからもらった情報を一方に置き、片方では、その彼らとあまり変わらない（僧堂経験のない）僧侶の卵たちに、僧侶のモノの見方、生き方の違いを話します。よつて、この学年は個性豊かで、ワイワイガヤガヤでありませんが、高卒の十八歳から本校に來た学生達には、結構いい刺激になっています。

また、「仏教専修学科」は、一般大学の大学院に相当するもので、四年制の他大学卒業業者や、他大学の大学院修了者が入学し、より深い研究を重ねるコースで、修了時には百枚以上の論文を執筆

せねばなりません。

この学科は少人数のため、正に「寺子屋」状態で、時には先生とマンツーマンで勉強できます。学生には、少々苦痛かもしれませんが、毎回専門の家庭教師がやつて来てくれるわけですから、本当に勉強に勤しみたい者にとっては、これほど恵まれた環境はないということになります。

\* \* \* \* \*

現在、叡山学院では、本校で学ぶ学生たちの便宜を図るため、満杯になつた現図書館の南側の土地に、新しい図書館を増設する計画を立てております。平成三十三年に宗祖伝教大師壹千二百年大遠忌（ご命日）を迎えるに当たり、その報恩の為の「祖師先徳鑽仰大法会の記念事業」として、一宗から助成金をいただくことになりました。

総工費一億五千万円。その内、六千万円を同窓会や縁故・関係寺院様に勧募・協力をお願い致しております。現在、勧募が始まつたところですから、是非ともご協力賜れば幸いです。叡山学院図書館建設事務局（TEL：077-578-002

9）まで、お問い合わせ下さい。平成二十九年着工、平成三十一年春完成予定です。 合掌

#### 四、お坊さんの卵たちの日課

さて、叡山学院には、比叡山の小僧として随身したり、京都方面の大きな寺院に随身し、そこから日常は学生として通い、日曜日や祝祭日、学校が休みの期間は随身先の寺院の法務に従事している学生も多くおります。

基本、学問し修行をする学堂生活を課す学校ですから、世の学生のように、何処かのアパートやマンションに勝手気ままに生活することは許されていません。

よつて、随身先の日常の日課や、叡山学院寮の日課など、その学生が居住するその場所によつて、細かな日課やルールは違えども、基本、僧侶としての毎日の日課（朝夕の勤行、掃除等）は、概ね共通するものがあると思います。

以下は、叡山学院寮の日課をご紹介します。

叡山学院寮の朝は、七時の木鐘もくしやうに始まります。即ち、起床ですが、朝の掃除のスタート時間でもあります。多くの学生は、六時半頃に既に起き出し、七時前には既に掃除に取り掛かっています。

本堂、寮内、トイレ、食堂じきやう、寮の外周などの掃除ですが、現在は寮生が三十名に満たないため、手際よくサッサと行っているようです。

七時半の木鐘は、朝の勤行しんぎやうを知らせます。毎日、勤行の次第しだい（内容）を変えて、たとえ一年しか在学しなくても、殆どどの勤行が習得出来るように、数々の次第をこなしています。約二十分程度の勤行です。朝は学校に行く準備がありますから、長時間の勤行は無理なのです。

勤行が終わって、食堂にて朝食です。朝食は新生が配膳しますが、その後、その食を口にするまでに、多くの偈文げもんや経の読誦があり、全ての食事作法を終えてから、やっと食事に至ります。

三十名ほどの学生が食事をしますが、物音ひとつしません。僧堂生活の基本が徹底されている姿はさすがだと思います。

勤行が終わって交代で布教実修として五分程度の法話を行い、院長、もしくは学監が講評を行っています。

授業は九時から九十分授業を午前中に二講座。十二時十分から十三時までの昼休みを挟んで、午後は十三時から十六時十分までの間に二講座。合計、毎日四講座の授業を受けます。昼食は学院寮に戻り、お弁当をいただきます。ご飯とみそ汁は毎度出来立ての品です。

一日四講座の授業が終わって、再び斜向かいの学院寮に帰り、電話当番や朝の掃除の続きをしたり、夕食の準備やお風呂の準備を行ったり、順番で回って来る当番は結構多忙を極めます。

十七時半から夕座、即ち夜の勤行です。夕方は朝とは違い時間がありますから、朝座より勤行は長めで、やはり日替わりで勤行次第を変え、導師も順番に交代して勤めます。

夕座が終わって食堂で夕飯を食べ、二十時までに風呂に入ります。二十時から二十二時まで自由時間。寮には図書室兼自習室もあり、コピーや

朝食は、基本、ご飯とみそ汁と沢庵一切れ。たまに、納豆か生卵、梅干しが出てきます。質素な修行僧の食事です。しかし、米は地元の農家に頼んで分けて貰っている無農薬の近江米です。ある意味「とても贅沢なご飯」と、食堂のおばさんが作ってくれた温かいお味噌汁があれば、ひとまず十分だと私は思います。

その後、斜向かいの叡山学院に向かい、八時半から学院本堂での勤行が始まります。約二十分。毎日勤行次第が変わり、どんな法要でもこなせるように実修します。よって、勤行の導師も毎日交代で勤めます。学院寮もそうであるように、順番で導師が廻って来ますから、導師が近い学生は、休み時間や夕座後の就寝までの時間に、先輩に指導を仰ぎながら導師作法の練習を日々行っています。

実は、他大学でも、他の宗門系大学でも、こうしたことが出来ていないのが現状で、こうした学生たちの自主的な実習修練こそが、本校の教育環境の良さであり特徴であろうと思っています。

更に、朝座では法話の時間を設けており、朝の



大般若転読会法要実習



諸資料、基本聖典の大蔵経も揃い、加えてパソコンも数台自由に使える環境が整えてあります。

そして、二十二時に点呼があります。寮監が、一人ひとり確認に回ります。

一般のアパート、マンション、学生寮と大きく違う所です。

昔は、上級生と下級生が同室で、一室二名でしたが、平成十二年以降、学院寮が新設されて一室一名の個人部屋となりました。電化製品も特に規制はないから、学生たちは結構快適な寮生活を送っているようです。三十年前の私の下宿生活の方が、よっぽど侘びしい生活だったように思いますが、これも時代の違いなのでしょう。

## 五、当代学生気質

同級生や上級生との交流が深まってくると、寮のあちらこちらで深夜の酒盛りが行われます。基本、本校の寮は、学生の自治寮のようなものですが、酒、たばこも自由です。ですから、たまに

何人かの学生が集まって、鍋をやったり料理会をやったりしています。「田舎から〇〇を送って来たから」と、郷土料理を振る舞ったり、結構まめに調理室に立っている姿を見かけます。

世の男性は、料理・洗濯が出来て当たり前、出された甘いスイーツは難なく平らげ、加えてイクメン（子育てに参加する男子）でなければならぬいようですが、我が学院寮の男性僧侶も十分その資質はあるようです。

冬などは、あちらで水炊き、こちらでチゲ鍋、お椀と箸を持って行ったら、どこにでも出入り出来ます。無論、歩いているだけで、

「先生、こっち、こっち」

と、学監などを務めていると、結構役得である。寮内をうろついていると、いい匂いのする部屋から、ちよくちよくお声が掛かる。有り難いことだ。自分の学生時代は、こんな風に先生と触れ合ったのだろうか？

否である。指導教授とは結構お付き合いさせていただいたが、こんな感じではなかったように思

う。やはり、毎週寮に泊まり、学院の授業だけでなく衣食住を共にしていることから親近感を生むのである。加えて、昨今の学生気質なのか、なかなかフレンドリーな彼らの性格にもよるのである。

加えて、私自身は学生たちに接する時、自分も彼らと同じ（天台の）宗門人であり、自分はその中でもちよつと先輩で、少し先行く舵取りみたいなものど何時も思っている。それでだろうか。学生の中には、私がいつ寮に泊まりに来るのか、指折り聞いてくる奴もいる。なかなか楽しい学院寮宿泊タイムである。（笑）

さて、先程の続き。およばれをした部屋では、ビールや焼酎も各自で用意して本格的な宴会をやっている。聞けば、先日の法要実修の打ち上げだそうだ。法要の舵取りを務める「会行事」を中心に、学校の休み時間や夕食後、寮本堂で長い修礼（予め法要さながらに練習すること）を度々行っていた。私もそれは、よく知っている。

それだけに「やった!!」という達成感がそうさ

せるのであろうし、上級生下級生の垣根を越えて新たな連帯感が生まれるのであろう。こうした酒盛りはしょつちゅうやつてもらいたい。

学生一人ひとりの抱える事情も、また生まれ育った環境も違う中で、縁あって叡山学院に同期入学をした。そして、この同じ時代と同じ釜の飯を食いながらこうして切磋琢磨しながら勉強している。この環境にあることを「有り難いこと」と感謝し、将来の真の友を作ってもらいたいと思う。

また、かなりハチャメチャで自由奔放な大学生活を送らせてもらった私からは、彼らの寮生活はかなり制約された環境にも思えるが、逆に、ここまで親しい人間関係を構築できるこの環境の中で、他の何事にも変えることの出来ない貴重な「学舎・僧堂生活」を満喫してもらいたい。

むすびにかえて

叡山学院では、宗祖大師が願われたように「国宝的人材」を育成することを目指して日々学僧教

育を実践し、また一方で、学生たちは宗祖大師が  
お示しになられたように、学問と修行の両方を「解  
行双修」と称して、一方に偏ることなく学習習得  
することを目指して日々学業に励んでいます。

私が叡山学院に奉職したのが平成八年でした  
が、その時は学生数が、あと数名で百人を超すと  
いう大所帯で、それから約二十年を経た現在は、  
その半数どころか、四十人を切っていました。  
相對に、今、どの大学でも世の少子化の影響  
を受け、受験生の減少と入学生確保に東奔西走し  
ているのが現状です。世に、コンビニより沢山あ  
る日本の寺院で、少子化がこんなに深刻な問題に  
なるうとは思ってもよかったです。しかし、現  
状は世の仏教系大学はどこもそのような状態で、  
入学生確保に目の色を変えています。

そこでどうしたかというところ、仏教系学部  
の仏教系コースを、従来はその宗門の子弟にのみ入学を  
許可していたものを、一般の学生に開放して定員  
を埋めたため、本来、その学部・学科が担ってい  
た宗門の学生の為の宗門教育が出来なくなつたと



天台会曼供法要実習

という弊害が起きていますと聞き及んでいます。

しかも、仏教系コースは、会社を定年退職した  
社会人が再入学してくるケースが多く、宗門の子  
弟育成どころか、いつの間にかやら「仏教カルチャー  
センター」になりかねない状態の所もあるよう  
です。

ある学校の先生と話す機会があつて、

「叡山学院はいいですね。少人数で、しかも  
教育が徹底している。もつといいのは、皆が、  
チャンと僧侶になろうと、意欲と夢を以て、  
全員が同じ方向に向いているのが素晴らしい。  
」

と、称賛のお言葉をいただきました。

確かにそうかもしれない。小規模でも、本来僧  
侶がそうであるべきであるように、衣食住を共に  
し、僧伽（サンガ）として、片や上達した僧侶、  
一方には初修の僧侶の卵、それぞれが共に集団の  
中で力を合わせながら、個々人の技能・スキルを  
高めつつ切磋琢磨して行く、今、そうした学舎・  
修行道場が求められていると思います。

本来、師僧というものは、個々の寺院に於いて、  
師僧自らが自身の子弟を徹底的に指導し、自らの  
学業と修行の全てを弟子に伝授、継承させる務め  
を負うのが本義でありましょう。しかし、現代は、  
日常の法務や寺院の檀務、二足の草鞋を履かねば  
ならない寺院では、つきつ切りで弟子を育成する  
ことが出来ません。故に、本山や宗立学校にその  
教育を委ねるのです。その意味、委ねられる側の、  
我々宗立学校教員の責務は、今後益々重くなるに  
違いありません。

宗祖大師の理想を世に実現するため、私たちは  
最善の努力を惜しまないつもりでいます。今後と  
も、本校の行く末に深く感心を賜り、この先も変  
わらぬご理解、ご協力をお願い申し上げます。

#### プロフィール

くわたくしに ゆうけん

天台宗應聖寺（沙羅の寺）住職。叡山学院学監・  
教授。天台宗総合研究センター研究員、福崎町教  
育委員。姫路少年刑務所教誨師。

# 平泉のまちづくり

尾崎 信

わたしが初めて平泉を訪れたのは平成十六年でした。当時勤めていた会社が、都市計画や景観づくり、まちづくりを専門とするコンサルタントでした。入社一年目のわたしは、平成十五年度よりはじまっていた、平泉の世界遺産登録に向けたまちづくり・景観づくりの業務の担当になったのです。実はその前年、大学院生としてアルバイトで平泉の資料づくりを手伝っていましたので、そこから数えれば、わたしが平泉に関わりはじめて十二年が経ったこととなります。これまで、毎年欠かさず平泉に来ています。平泉には、人や史跡、自然など、わたしを惹きつけるものがたくさんありますが、わたしの専門でもあり、わたしが平泉に関わり続けたきっかけでもある「まちづくり」について少しご紹介させていただきたいと思います。

わたしの最初の仕事は、世界遺産のコアゾーンとなる場所（中尊寺や毛越寺など）の周辺エリアの景観を、どのようにして世界遺産にふさわしいものに誘導していくか検討をするというものでした。右も左もわからない入社一年目です。委員会の大学教授や僧侶の方々、平泉町役場の方々の叱咤激励を受けながらひたすら走り続ける日々でした。平成十七年度からは、景観計画（建物や道路などのデザインのルール）の検討がはじまりました。平泉のことを勉強し、平泉を歩き回り、いろいろな方のお話を聞き、一層勢いをつけて走り回りました。

仕事のことごとくおとりわかってきた入社三年目のことです。わたしはひとつのアイデアを持っていました。それは「看板」についてです。世界遺産となるまちでは、建物だけでなく看板についても、ふさわしいデザインであることが求められます。つまり、原色づかいの派手な看板や、巨大な看板などが多くあると、世界遺産にふさわしいまちではないという烙印を押されてしまう危険性

があるのです。かといって、看板は大事な商売道具です。それを一方的に規制してしまつては、業者からの反発も大きくなつてしまいます。また、明治時代や江戸時代ならまだしも、中世に起源を持つ平泉にふさわしい看板デザインとは一体どういうものなのか、根拠となるデザインの規範が皆無といつてよい状況です。この状況を突破するためには、業者の方も一緒に、みんなで話し合つて平泉にふさわしいデザインを決めていくのがよいのではないかと考えました。行政が一方的に決めるのではなく、町民が主体的に平泉の景観を考え、自分たちのまちの看板デザインの規範を決めようというわけです。さらに、町民主体の動きができれば、今後の平泉のまちづくりが加速するのではないかというもうひとつのねらいもありました。そのようなことを考え、看板デザインのコンテスト開催を提案しました。

提案が実り、平成十九年に看板コンテストが実現することになりました。コンテストの名前は「まちづくり看板コンテスト」の頭二文字ずつをとつ

て「まちカンコン平泉」としました。まちカンコンの最大の特徴は、審査基準を住民で議論して決めるという点にあります。五回のワークショップを開催し、デザインの専門家やまちづくりの専門家、観光の専門家を招聘し、レクチャーをしてもらった後に、業者を中心とした町民のみなさんに審査基準を議論してもらいました。かなりいろいろな意見が出され、参加者のまち並みに対する期待の強さがうかがえました。作品の募集は、一般に募集しただけでなく、夏休みの宿題として小学校や幼稚園においても作品を募つていただき、一般の部で五十点、小学生・幼稚園生の部で一五七点、合計二〇七点も

の作品が集まりました。一次選考として、それらから審査基準に照らして優れてい



写真1 小学生のデザインを地元職人が実施制作した





写真2 二次選考会では試作品の看板を展示し休憩時には町民のジャズバンドの演奏も

るものを審査員に選出してもらい、特に優れた七点については、地元の工芸職人さん（銅細工・漆・提灯）や大工さんの協力を得て、試作品をつくつてもらいました。平

泉郷土館（現・平泉文化遺産センター）にて実施

した二次選考会は公開イベントとし、試作品の看板や応募用紙を会場に展示して、審査員だけでなく来場された町民のみなさんにも投票をしていただきました。会場は約一五〇名の大入り。町民の投票をもつとも多く集めたのは、いまでも中尊寺通りに多く飾られている行灯型の看板でした。

さて、この二次選考会の最後に「今後、どのようにしてこれらの看板を普及していけばよい

か？」というテーマで公開討論会を行いました。コンテストはいわば打ち上げ花火です。国の予算で行う単発企画です。しかし、大切なのはむしろその後。平泉らしい看板デザインが見えてきたところで、それをいかにつくっていくのか。町民が主役となってどう広めていくのかを議論してもらいたいと考えて企画しました。しかし、そこで出された意見の多くは、行政や商工会に普及や継続検討を要望するものが多く、住民が主体となる継続的な取り組みを積極的に提案した意見は「地区の若手が集まってもつと議論をすべきだ」という意見ただひとつでした。

まちづくりの仕事をしていると、どこかまちへ行っても、行政に対して要望をされる住民の方をよく見かけます。本当に必要な要望は、もちろん否定されるべきものではありません。しかし、なんでもかんでも行政に要望してしまうとどうでしょう。「行政で看板をつくつて欲しい」「行政で商業者へ周知をして欲しい」などなど。結局は税金となって住民に、もしくは子どもたちの将来に

跳ね返ってきてしまいますし、町民がみずから実行する楽しさや充実感も享受できません。訪れた人が、そのような「住民の心意気」を感じることもできないのです。それではまちづくりは盛り上がりません。まちづくりの主役は住民でないとき生きとしないのです。ですから、公開討論会の様子を見て、もしかしたら多くの方が、まちづくりとは行政が行うものであり、住民は行政に対して要望を出すことによってまちづくりの一端を担っている、すなわち、「まちづくりの主役は行政である」という認識を持たれているのではないかという危惧を抱きました。

年度が明けた平成二十年、さつそく新たな提案をしました。その名も「住民が自分たちで出来ることを考える会」というワークショップの開催です。名の表す通り、道の印象や景観を良くするために、住民として、行政に頼らずに出来ることを見つけることが目的です。このワークショップは参加者の方々もたいへん苦労されたと思います。行政への要望は言いっ放しが許されるので楽です

が、自分たちでやるとなると予算の都合や仲間集めなど、途端に様々なハードルが出現します。しかし、みなさん本当によく粘ってアイデアを出されましたし、よくぞ実行に移されました。五つの具体的なアイデアが出され、すべて実現したので。そして、そのうちのひとつは、現在まで継続的に開催されており、また平泉でもつとも素敵な活動のひとつである「平泉浄土のあかり」です。

浄土のあかりは八月十六日の送り盆に、紙粘土や牛乳パックでつくったシェードをろうそくにかぶせた数千基もの灯りを、観自在王院跡や歩道に並べる灯りの行事です。同じ日に、束稲山には大文字送り火が灯ります。浄土のあかりも同じように、お盆に帰られていた先祖を送るための火、送り火の意味を込めています。参加者銘々が合掌、黙祷を捧げておひらきとなる、浄土のまちにふさわしい行事だと思えます。実はこれは、元々は数名の主婦の方が「夢灯り」という名の活動として行っていたものです。基本的な内容はその頃と変わりませんが、ひとつだけ大きく変わった点があ

ります。そして、それは平泉のまちづくりの文脈において、とても価値ある変化だと思っています。その変化とは、今までバラバラに活動していたまちづくりグループに声をかけ、一緒に活動したという点、さらにはお寺さんにも参加してもらったという点です。平泉を良くしたいと考えている主体を一堂に会することで、より大きな力を生み出すとしたわけです。

平成二十一年度に初回を開催（その当時は「夢灯りプラス」という名前でした）し、それ以後も



写真3  
観自在王院跡での会場設営の様子



写真4  
灯りのつくる幻想的な風景

毎年開催を続けています。昨年は雨天で開催できませんでしたが、今年は天気にも恵まれ無事に開催できました。年によってライブや映画上映という同時企画も工夫され、年々安定感を増しているように思います。わたしは初回の立ち上げを少し手伝わせていただきましたが、それ以後は単純にお客さんとして来ています。つまり、この活動は住民の方々が力を合わせて、自分たちで運営されているのです。「住民が自分たちで出来ることを考える会」でアイデアが出されてから七年、まちづくり関連団体やお寺さんの力を合わせるという目論見は見事に成功し、住民による自律的なまちづくり活動としてしっかりと根付いていると言えます。

しかし、「浄土のあかり」の実行委員のみなさんのお話を聞いていると、ある問題が隠れていることに気づきます。「腰がイタイ」「体力的にイカン」などなど。それもそうです。あれから七年も経過しているのですから、新たな若い世代にどんどん入ってきてもらわないと、体力面での限界が

来てしまうのは当然です。

それを見越していたわけではありませんが、ひよんなことから平泉中学校との関わりが生まれました。校舎の建て替えに併せて、玄関脇にある「交流ホール」という多目的ホールの家具（デザインを中学生と一緒にやるうという話が出てきたのです。田代久美先生（宮城大学（当時））、平野勝也先生（東北大学）、南雲勝志さん（ナグモデザイン事務所）と組んで、平成二十三年度の二年生とデザインを進め

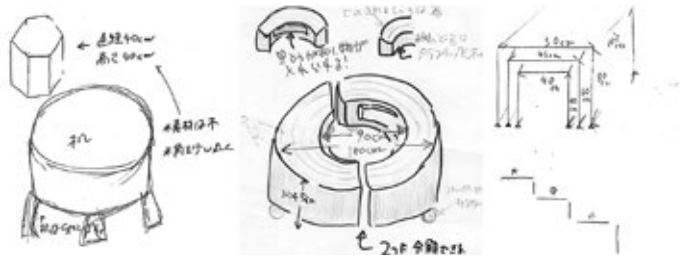


写真5 中学生の描いた台のデザイン画  
(左：六角型、中：バウムクーヘン型、右：階段型の原型になっている)

ました。デザインのテーマは「台」です。テーブルにもなるし椅子にもなる、自由自在な使い方ができる台のデザイン



写真6 完成した台  
(前：バウムクーヘン型 中：六角型 奥：階段型)

を中学生とワークショップを行いながら検討しました。中学生のデザイン画を基に設計図を起こし、地元の大工さんに試作品をつくってもらいました。さらに試作品を見ながら中学生と改善点を議論し、反映しました。この試みはいろいろなどこで高く評価され、平成二十四年度のグッドデザイン賞受賞を皮切りに、こども環境学会賞、キッズデザイン賞を受賞しました。

その後、毎年、三年生が卒業する時に、二年生

と一緒に塗装のオイルの塗り替え作業を行っています。つまり、この台のメンテナンスを上級生から下級生へと継承しているのです。そして、その作業にまちづくり活動をされている大人が応援に来て、手伝いがてらまちづくり活動について紹介をしたりもしています。ここに持続的なまちづくりの芽があるように思います。平成二十四年度の卒業生から毎年、平泉中学校を卒業する子どもたちもみな、台づくりやまちづくりの体験・勉強をしています。彼ら彼女らが、これらの体験を通して、将来まちづくりの担い手へとなってくれたらどんなに素晴らしいことでしょう。また、親御さんたちが興味を持ってくださったらどんなに心強いことでしょう。この台づくりは、そのようなまちづくりの文脈へとつながるきっかけをつくりつつあるように思います。

さて、あくまでわたしが知っているごく限定的な「平泉のまちづくり」について書かせていただきました。これ以外にもまちづくりの文脈は多様に存在することと思いますが、わたしの視点から

は、住民が自分たちの力だけで自律的にまちづくり活動を推進し（NPO法人もできました！）、新しい世代である中学生とまちづくりを結ぶチャネルが出来た、というのが平泉のまちづくりの現在地点のように見えます。そしておそらく、平泉のまちづくりは次のステージへと昇る時が来ているのではないかと思います。若者に参加してもらうためには、これからのまちづくり活動のヴィジョンが問われます。浄土のあかりの時のように、今一度、まちづくりを考える様々な主体が一堂に会し、一致団結して未来の平泉に向けたまちづくり作戦会議を開く時が来ているのかもしれない。

#### プロフィール

おさき しん  
東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻・助教。専門は都市・地域計画、景観計画、まちづくり。東京大学大学院修了後、都市計画コンサルタントを経て、現職。現在、平泉町景観審議会委員、平泉町重要公共施設デザイン会議委員を務める。

#### 〔グラフィア解説〕

### 還蔵 紺紙金銀字交書一切経

菅野 澄 円

昨年八月、紺紙金銀字交書一切経「観世音菩薩秘密藏如意輪陀羅尼神呪経」一卷が中尊寺に還ってきた。折しも、秀衡公の母が請託し比叡山澄憲僧都によって作られた『如意輪講式』の復元が進められているなかでのことで、仏縁に他ならない。後世の所持識語が尾題後ろと軸付紙に他筆にて墨書される。また巻末紙背に朱書きにて識語が記されている。

資料を左記に掲げ、カラー写真についてはグラフィアの頁に掲げ参考に供することとした。

經典名 観世音菩薩秘密藏如意輪陀羅尼神呪経

尾 題 仏説如意輪陀羅尼経

見返絵 樹下説法図（如来、菩薩、僧形）

※表裏欠損部分の補修あり



紺紙金銀字交書一切経 観世音菩薩秘密藏如意輪陀羅尼神呪経 見返絵及び巻首



入蔵年月 平成二十七年八月  
 文字色 金銀交書  
 本誌縦 二五・七〇  
 全 長 三〇〇・七七  
 見返横 二〇・八  
 紙 数 七  
 界 高 一九・五  
 界 幅 一・六八  
 大蔵経No. 一〇八二

注1 經典名は、便宜、大正新修大蔵経の経題とした。

注2 「中尊寺金銀字経に関する研究」報告書（研究代表者：京都国立博物館長藤澤令夫）に準じ、本紙縦・全長・見返横・界高・界幅の単位はセンチメートルとした。紙数は見返しを除く本文のみ紙数を示す。

注3 大蔵経No.の数字は大正新修大蔵経の番号である。

（管財部執事）

## 北米の一隅に灯った 天台の法灯 ―その二十年―

聞真・ポール・ネエモン

ここ天台宗ニューヨーク別院・慈雲山天台寺は、マンハッタンから約一六〇キロ北上した山々と森林に囲まれた地域に佇まいを置く「大草原の小さなお寺」です。熊・鹿・狐・山猫・アライグマ・スカンク・ビーバー等の野性動物と共存する、ニューヨークの摩天楼からは想像もつかない片田舎。札幌とほぼ同緯度に位置し、真冬は氷点下三、四十度以下になることも珍しくありません。

このような辺鄙な所に、初めて山田俊和貫首がお越し下さったのは二〇〇一年の三月のことでした。前年、ハワイ別院で行われた海外伝道師認証式にて御貫首とお会いしたことが縁となり、当時天台宗海外伝道事業団副理事長であられた山田



カトリック教会で行われたコロンビア郡異宗教対話団体主催「感謝祭」の集いにてスピーチをしている筆者



朱書きによる  
 巻末紙背識語



巻末及び尾題（尾題後ろの識語は墨書のため肉眼でないとわかりづらい）

貫首は、事業団の諸先生方と一緒に、ニューヨーク別院の前身である、カルナ天台達磨センターをご訪問下さったのです。当時は古い馬小屋の一部を改築し、本堂として活動していましたが、六器の水が凍てつく本堂での止観と法話の集まりにご参加いただき、当地での仏教活動の様子をご覧になって下さいました。

ご訪問頂いたその年の暮れには、事業団の皆様のお力添えで、達磨センターは天台宗ニューヨーク別院となり、正式に天台宗の一寺院として第一歩を踏出すことになりました。そしてその数年後には、宗内の多くの方々のご支援と、メンバーのボランティア作業により、老朽化が進んでいた馬小屋は解体され、新たな本堂として改築。日本から大勢の記念参拝団の方々も加わり、新本堂の落慶法要が厳修されたのは、二〇〇五年六月二十五日のことでした。御貫首は御多忙にもかかわらず、本堂工事の地鎮祭から落慶一周年、五周年記念そして十周年記念法要式典等、ニューヨーク別院の節目毎に、当地まで足をお運び下さり、私達の活

動をご支援して下さいます。ですので、地元の人メンパーにとりましては、山田貫首のお顔は「日本天台仏教の顔」のお一人でもあるのです。

さてここで、私がなぜ天台仏教布教活動の道に進むことになったのか、そしてどのような活動を行っているのかを、簡単ながらお話いたします。

私は、十代の頃より東洋思想哲学や仏教に興味を持ち、手当たり次第に関係資料や書籍を読みあさり、禅グループが行う座禅会にも参加していました。しかし当時は、英語での仏教関係書物は数える程しか無く、疑問ばかりが増えてゆく日々でした。そのような中、研究のためブラジルへ。ブラジルから短期間の予定で、妻の母国である日本に向かったのは一九八九年の夏のこと。今思えば、これも仏縁なのでしょう。来日直後、後に師僧となる一島正真先生（大正大学名誉教授・北総教区泉倉寺住職）と巡り会ったのです。そして一、二ヶ月もしない内に、ブラジルの政治情勢が急変、研究を開始していた大病院へ戻ることができなくなりましたのです。通常、研究の対象や地域

を変更することは、そう簡単なことではありません。しかし恰も物事が決まっていたかの如く、研究内容を変更し地域対象を日本にすることができました。このように予想外の形で日本滞在生活が始まったのですが、師僧の下で天台仏教を学ぶことが、私の日本滞在の一番の目的であったと思います。

一島先生とお会いするまでは、TENDAIと言う名称は目にしたことはありませんが、知識は皆無に等しいものでした。しかし師の豊富な知識を通して、総合仏教と言われる天台仏教の教えに触れるうちに、今まで私の頭の中で個々に存在した知識や疑問点が、意味を成し一つにまとまってきたのです。こうして一島先生の下、五年半ほど天台仏教を学ぶ機会に恵まれた私は、いつの頃からか、天台の教えを通し、アメリカの人々に仏教を広く学んでもらう場を開きたい、と思い描くようになっていきました。

仏教の学び舎設立を胸に、一九九四年の秋にアメリカへ帰国。翌年二月ニューヨーク州ケイナン



毎週水曜日には、本堂で座禅会が行われる

町に農家であった物件を購入、その時点でカルナ天台達磨センターを開設致しました。築二〇〇年からなる古い建物。その上、しばらく人が住んでいなかった家屋ですので、修理・改築は必須。物件購入後の数ヶ月は家内と二人、修理や塗装作業の毎日が続きました。そのような作業が続く中、一九九五年四月に第一回の「座禅会」を開催。それ以来、毎週水曜日の講義・止観・法話・持寄り夕食会の集まりは、続いています。この「座禅会」がニューヨーク別院の第一の主要活動で、毎週十五〜二十五名、時には四十名以上の人達が集まります。ま

た、毎月第一土曜日は経典の勉強会を行い、時間をかけて経典を深く学ぶ機会を設けています。この他、年三回の週末リトリート<sup>(注1)</sup>には、メンバー以外にも北米各地は勿論、時には海外からの参加者もあります。

右記の活動の他、ニューヨーク別院での主要活動の一つに「堂衆・僧侶行」があります。十日から二週間の修行期間で、毎年六月に開催。朝三時半に起床し、沐浴。それから分刻みのスケジュールです。より深く天台仏教を学びたいというメンバーの希望を叶えるため十九年前に開始しましたが、サンガ・グループ<sup>(注2)</sup>が形成されてゆく中、その目的は「サンガ・リーダーの育成」に移行。そしてカルナ天台達磨センターが正式に天台宗ニューヨーク別院と認定されてからは、必然的に英語圏の窓口となったためか、今まで以上に「天台仏教を学びたい」「天台の僧侶になりたい」という問合せをアメリカ国内のみならず海外からも受けるようになり、堂衆・僧侶行の内容もそれに対応すべく変化してゆきました。ちなみにこの

数ヶ月だけでも、シンガポール、ベルギー、カナダ、プエルトリコ、コロンビアからの問い合わせを受けております。

恒例行事としては、毎年、大晦日から新年にかけての法要・座禅会、新年会、施餓鬼会、授戒会があります。この他特別行事として、書道作品展、書道や華道のワークショップ、茶道のデモンストレーション等、日本文化を紹介する機会を設け、一般の方々にも気楽に御越し頂けるようなイベントの開催にも努めております。また、メンバーと地元の野球チームの試合観戦や、美術館の特別展示会に出かけるなど、仏教活動以外にも懇親を一層深めるような機会を設けています。

仏教の教えを日常の行動に現すこととして「エンゲージド・ブディズム」(Engaged Buddhism)というフレーズが北米で使われるようになって数十年になりますが、いわゆる「一隅を照らす運動」と等しい内容と思います。このような観点の下、ホームレスや貧困者対象の食事提供所での作業や食料品提供、公共道路や地元公園の清掃、老人ホー

ム訪問、また地元団体とともに、貧困家庭対象の暖房用資金提供活動にもニューヨーク別院として、あるいはメンバー個人として携わって参りました。住職個人としては、日本の寺院と同様、冠婚葬祭の依頼や悩み事の相談の他、ホスピス・チャプレン、異宗教間対話団体(インターフェース)の仏教徒代表、環境保護団体の顧問委員、また地元ケイナン町生命倫理委員長としての活動も行っています。特に、多種多様な文化と宗教が存在するアメリカでは、他宗教の知識を十分に持たせた上で、仏教徒代表として仏教の教えに基づいた意見を述べる事が、平和運動活動の中でとても重要なことだと言えると思います。一元的価値観に様々な疑問が出てきている現在、特にこれからの世界は、欧米に於いても仏教的世界観が新たな地平線を切り開くのではないのでしょうか。その担い手として、天台のような総合仏教に期待が寄せられると思うのです。昨今のアメリカ国内や国際情勢に対応すべく、ニューヨーク別院としても、数多くのインターフェース平和活動に参加し、メ

ンバーにもその平和活動の輪を広げるよう呼びかけています。

ところで、ニューヨーク別院の活動からは少し内容が離れますが、昨年度より、カリフォルニアでの活動が、私達の布教活動項目に上がることとなりました。と言いますのも、カリフォルニア天台モナスタリー(CTM)を設立・運営なさっていた恵照・レアレイ師が昨年四月にお亡くなりになったからです。余命告知を受けた恵照氏から二月に連絡を受け、CTMの将来を託されました。恵照師は赤山禅院で修行なさり、アメリカに戻った後、カリフォルニア州北部の山間に護摩堂を建設し、布教活動をなさっていた方です。日本に行かれる前から色々とお電話を下さり、ご帰国後はより一層、まめにご連絡を下さっていました。また堂衆・僧侶行にも何度もご参加なさり、別院メンバーにとりましても兄弟弟子のような方でした。恵照師に安心してもらうため、難問はあるものの、CTMの責任者となることを引き受けたのです。ご葬儀(お別れ会)の後、別院の本堂落慶



十周年記念慶讃法要、堂衆・僧侶行が立て続いたため、CTMの書類整理に取りかかったのは既に七月も半ば。ニューヨークとカリフォルニアという距離のため、作業に時間がかかり、やっと本格的な作業を開始した矢先に、山火事が発生。アメリカ西部は毎年大きな山火事が発生する地域ですが、四、五年続く干ばつの影響で、カリフォルニアの水不足が大々的に報道されていました。この



座禅会では修行の前に、般若心経を唱える

夏、同時にいくつもの山火事が発生していましたが、その中でも規模の大きいヴァリー・ファイアーがCTMの近くで発生。全部で七万エーカー（九三〇〇万坪）以上の地域を焼き尽くし

ました。もちろんCTMの護摩堂も、恵照師が庫裡として使用していた山小屋も全焼。丸焼けの土地だけが残ったCTMですが、恵照師が苦勞なさって築き上げたお堂と団体です。恵照師の遺志を受け継ぎ、いつの日か天台仏教の布教の場として再興し、師の功績を残すことができないか、と考えあぐねているところです。何か良い案はないものでしょうか……。

仏教は世界三大宗教の一つであり、北米でも「関心」が高まってきている、と言われる昨今ながら、現実的には未だに少数派の宗教に留まっています。アメリカ国民一般の間では、仏教のことを全く知らない人の方が多いたが現状です。日本に仏教が伝来し、日本の宗教となるまで長い年月がかかったように、ここアメリカに仏教が根付くまでには、まだまだ時間がかかることでしょう。しかし、故小堀光詮前三千院御門主がお話して下さった「仏教東漸」のとおり、確かに二十一年前、太平洋を渡り、この地に天台の法灯が灯りました。多くの方々のご理解とご協力によって灯された法

灯です。風で吹き消されそうな時もあったかもしれませんが、やがてこの灯火が北米の一隅を照らすイメージを心に描き、守って参りました。百年、二百年、三百年後の北米の仏教の姿に思いをはせながら、七転び八起きの精神で一步一步進んで行くつもりです。今後とも皆様のご指導とご支援をお願い申し上げます。

注1 宗教的修行に専念するため教会や寺院等に籠もって行う静修・瞑想・修養会（安居）。

注2 現在サンガ・グループは、アメリカ国内ではニューヨーク州に二つ、コロラド州、マサチューセッツ州、ワシントンDCに各二支部。海外ではカナダとデンマークに存在。

#### プロフィール

もんしん・ぼーる・ねえもん

一九八九年、ニューヨーク州オルバニー大学大学院生時代、研究のため来日。大正大学名誉教授・一島正真師に師事。現在天台宗ニューヨーク別院慈雲山天台寺住職。及びバード大学サイモンズ・ロック校にて教壇に立っている。



# 何も持っていない手

北嶺 澄照

讚衡藏（中尊寺宝物館）に入りますと、まず三体の丈六の仏さまがいらつしやいます。中央が阿弥陀如来、阿弥陀さまは念仏を称える人を西方極楽浄土へ導く仏さま。その左右は薬師如来。薬師さまは、心身の病を取り除く東方淨瑠璃世界の教主です。丈六とは一丈六尺を省略した言葉。一丈は十尺のことですから、十六尺ということになります（メートル法に換算すると四八四・八cm）。お立ちになつていて五メートル弱。お座りになるといわゆる座高ですから、その半分強の大きさとなります。中尊寺の丈六仏は坐像ですから二七〇cmほどの像高となっています。その大きな仏さまが中尊寺ご参拝のみなさまをお迎えするかたちとなつている、言い方を変えればそういうこともできるのでしよう。館内に入つてこられた方々は、その尊容に自ずくと合掌されるわけです。説明板をまず読まれる人、しばらく佇み沈思きれている人。仏さまがおわします須弥壇の手

前、フロアの片隅には長いが置かれています。そこに腰掛け、長い時間平安のご尊体と向き合つていらつしやる、そのような方を目にすることも多くあります。

館内を進んでまいりますと、千手観音菩薩さまがお立ちになつています。



千手観音菩薩立像

千手観音さまの特徴といえば、みなさまもおわかりの通り、あのたくさんある手です。絵画・彫刻で表現する場合には、日本国内ですと四十二臂（本）に省略するのが一般

的です。しかし、奈良唐招提寺の千手観音像は現在九〇〇本を超える手があるところから、当初は実際に千本の手があつたと考えられていますし、葛井寺（大阪府藤井寺市）の千手観音像は一〇四一本（注1）の手があります。四十二臂の代表的なものは京都三十三間堂の千手観音像でしょう。堂内には中尊の丈六坐像、その左右に五〇〇体ずつの等身大の立像が並んでいます。

また、千手観音さまにはそれぞれの手到一个ずつ眼があるといわれています。千の眼と千の手で衆生（生きとし生けるもの）をお救いくださるお姿なのです。「千手千眼観世音菩薩」が正式なお名前。千眼千臂観音、大悲観音、蓮華王とも呼ばれます。先ほどふれた、三十三間堂の正式名称が「蓮華王院」というのはこのためなのです。

京都清水寺のご本尊も千手観音さまです。手の一組を頭上に上げて天に向けて組み、掌に小仏像をいたたくという、特色のあるお姿です。清水寺は、東北地方、そして平泉にもゆかりの深い坂上田村麻呂が諸堂伽藍を建立したと伝えられています。

五月四・五日は中尊寺北方鎮守白山神社の祭礼で、中尊

寺の僧侶により能楽が神前に奉納されます。能「田村」はたびたび上演されている番組ですが、その詞章の一部を紹介しましょう。

## 地謡

今もその、名に流れたる清水の、名に流れたる清水の、深き誓ひも数々に、千手の御手のとりどり、さまざまの誓ひあまねくて、国土万民を漏らさじの、大悲の影ぞありがたき。

## 口語訳

今に至るまで、まことに有名な清水の観世音、その有名な清水の観音の、深いご誓願は数々あり、千手の御手のそれぞれに、さまざまなお誓いが広くゆきわたり、この国土のどの民をも漏らすまいとする、大慈大悲のご恩沢（注2）はまことにありがたきことだ。

日本古典文学全集 『謡曲集（二）』（小学館）

清水の観音さまが古くから信仰を集めていたようすが、謡曲の一節からも伝わってくるのではないのでしょうか。

中尊寺観音院蔵の千手観音さまは、京都清水寺のご本尊と同様、手の一組を頭上に上げて天に向けて組み、掌に小

仏像をいただいていますので、「清水型千手観音」と称されることもあります。



手の一組を頭上であげて組み小仏像をいただいている

一年ほど前のことになりました。Tさんという女性に出会いました。お寺廻りが大好き。話をしてみました。「中尊寺の千手観音さま、何も持っていない手がありますよね」と言われたので、「どなたかに教えてもらったのですか?」と問うと、「自分で手を一本ずつ見ていて見つけた」とのことでした。人に教えてもらったり、書籍を読んだのではない、「自分で見つけました」と言われたのに心を動かされました。

仏さまの手のかたち（印相）にはそれぞれ意味があります。千手千眼観世音菩薩の何も持っていない手は、右手の内の一本で、掌を見せて五本の指を上に向けて立てている場合と、下に向けている場合とがあります。

中尊寺の千手観音さまは手を下向きにしています。これは与願印、いわゆる『手当ての手』です。手を当ててわたしたちの心身の痛みを感じ取ってください、そして安らぎを与えてくださる、さらにはどんな願い事も聞いてくださる、という法力を示しているのです。手を上向きにしている場合は施無畏印、われわれ衆生の畏怖（おそれおののく）心を取り除いて安心（仏法）によって迷いがなくなった境地

るのには気がきましたか?」と問いかけると、「気がきましたでした。次に中尊寺をお参りした時にすっかりチェックします」という返事でした。

「親指ピンの意味は、今度会った時に」と言って別れましたが、そのうち本坊に「見てきました！意味を教えてください」とTさんがやつてくるのを楽しみにしています。

注1 『仏教美術事典』五一頁。

注2 引用にあたり、筆者が振り仮名を加えました。

〈参考文献〉

・西村公朝

『仏像の声―形・心と教え―』 佼成出版社 平成七年

・千田孝信

『花咲け みちのく 地に実れ』 中尊寺 平成十五年

・真鍋俊照編『日本仏像事典』 吉川弘文館 平成十六年

・中村元・久野健監修『仏教美術事典』 東京書籍 平成十四年

（薬樹王院住職）



千手観音さまの与願印（何も持っていない手）

を与えてくださいます。

「何も持っていない手の意味ってそうなんですか。勉強になりました。ありがとうございます」とTさんが言われたので、「千手観音さまの左足の親指がピンと上がって



## 「心齋」

小野寺 伸 吾

油を搾り始めて十年がたちました。私と油の出会いには人との出会いであり、地域とのつながりが無くては続けていくことはできなかった、と心から思っています。

農業をしようと地元に戻った私は、はじめ父親の農業の手伝いと、当時、町の研修制度を利用して夏秋イチゴの栽培の研修生として働き始めました。右も左も分からないまま、ただひたすらに体を動かしていたことを思い出します。ですが、忙しい時期は短く、長い冬がやってきました。農閑期、収入が途切れた私はコンビニでのアルバイトをしながらどうにか生活をしていたとき、夏秋イチゴの研修で出入りしていた施設で、菜種油と出会うことになるのです。当時、大東町は菜種の栽培が少しずつ増えてきている時期でした。地域の

大先輩方は昔食べた菜種油を懐かしんで、また食べたいものだと注目を集め始めていたのです。地元で油にまで加工できないだろうかと考えていたのです。

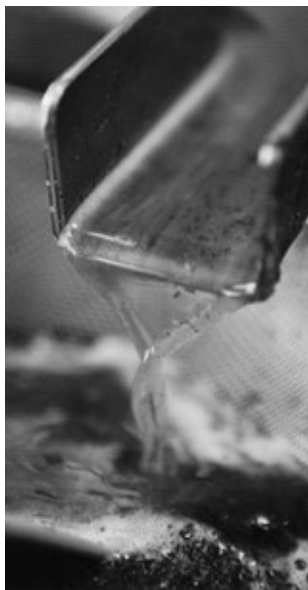
そんな時に時間を持って余している当時二十七歳の私は格好の作業員としてうつつたのでしよう。私も、新しく始まるプロジェクトに興味を持ち、農閑期限定の油屋さんとして携わることとなりました。

師匠は、その道六十年以上の職人でした。安価な食用油が出回るようになり、今では地域の油屋は全国的にも数少なくなってしまうました。そんな廃業された仲間の機械を譲り受けられ、保管していたその搾油機なども一式を譲り受けることができたことで事業を始めることができることになりました。

当搾油工房も、二〇〇九年に法人化し、私が専従で通年油屋をやらせていただいております。油屋が地域の宝となるように、誇れる地域の一つの要素になれるように続けていきたいと考えてお

ります。

油屋を始めたことで中尊寺様の「不滅の法灯」の燃料に菜種油を奉納することができました。この燃料は平泉町の有志の方々が栽培した菜種を当社で搾油させていただき、秋のお彼岸の際にお供えさせていただいております。菜種油をつくるということは、きれいな菜の花が春満開に咲き誇ります。そして油は燃料にし、もちろん食用にもなります。搾った後の滓は肥料として野菜などの新しい命の栄養になります。小さな油屋だからできること、小さな油屋でしかできないことに取り組んでいきたいと思えます。



大きいことはいいことだ、といった風潮の中で、

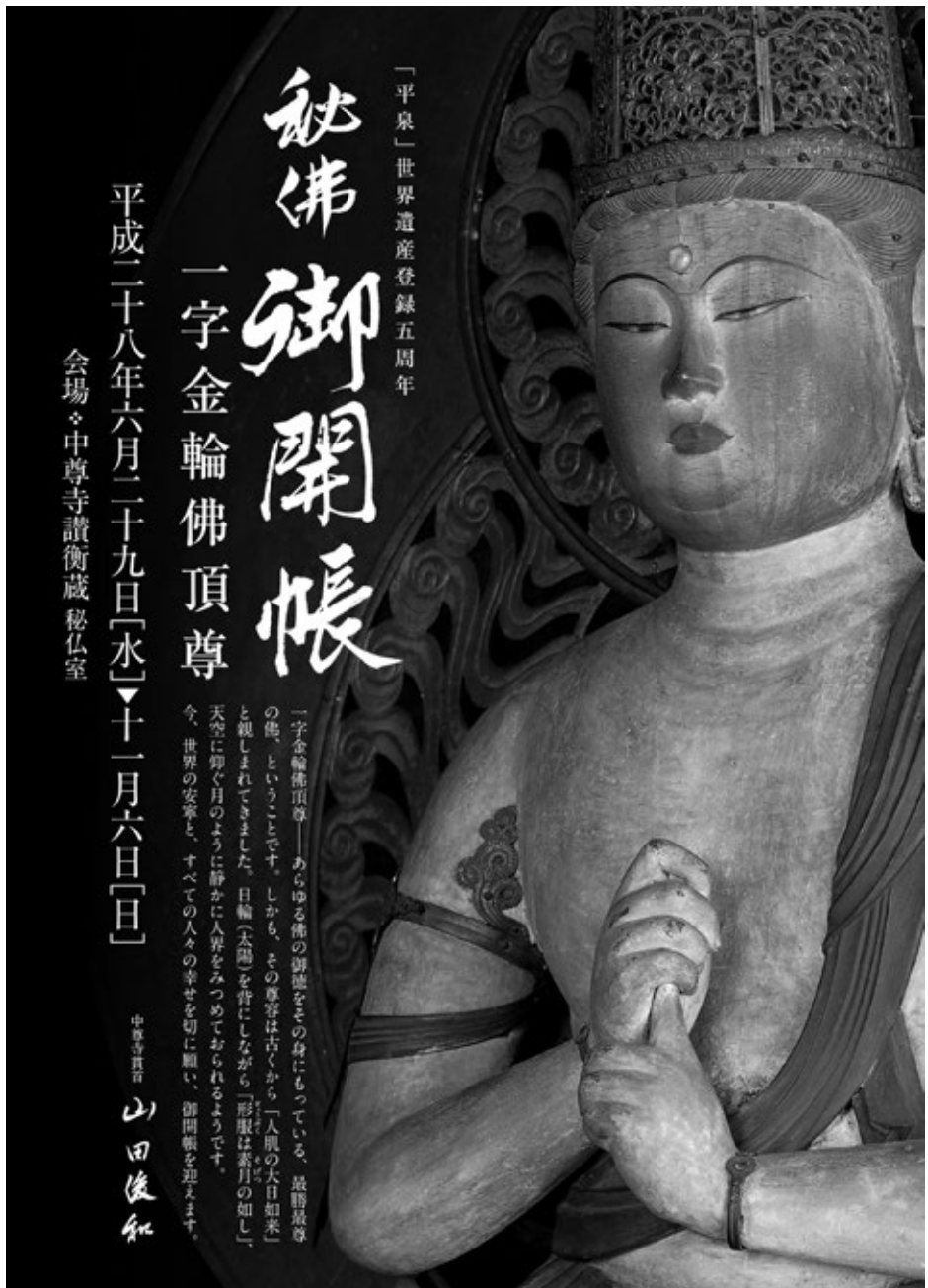
小さな取り組みを始めております。小さな事業所同士フットワークを軽く横の繋がりを大切にして何かできないものか考えております。地域の皆様に支えられたからこそ今の仕事ができています。

今年、中尊寺貫首様から「心齋」という書を頂戴しました。搾った油を清めるとともに、心も清めるの意味かと思われ、大事に私の機の正面に掲げさせていただきます。

新たな事業を起こすことは、労力とリスクを伴います。ではなく、既存の事業者が得意分野を持ち寄ってお互いが繋がることで化学反応を起こし、楽しい何かが生まれるんじゃないかと思ひ、業界とか年齢を超えた広いネットワーク作りにより可能性を感じています。

おのでもら しんご

(株)テクノボンズ代表取締役 (二関市大東町渡民)



「平泉」世界遺産登録五周年

# 秘佛 御開帳

## 一字金輪佛頂尊

平成二十八年六月二十九日〔水〕▼十一月六日〔日〕

会場・中尊寺讚衡藏秘仏室

「一字金輪佛頂尊」あらゆる佛の御體をその身にもっている、最勝最尊の佛、ということですが、しかも、その尊容は古くから「人眼の大日如来」と視してきました。日輪（太陽）を背にしながら「形服は雲月の如し」、天空に仰ぐ月のように静かに人界をみつめておられるようです。今、世界の安寧と、すべての人々の幸せを切に願い、御開帳を迎えます。

中尊寺貫首

山田俊和

### 「平泉」世界文化遺産登録五周年記念行事

一、平泉世界遺産の日 平和祈願法要・シンポジウム

◎日 時 平成二十八年六月二十五日（土）午後一時

◎会場 本堂（参加無料・要予約）

二、「如意輪講式」法要

◎内 容 藤原秀衡公の御母堂が延暦寺澄憲僧都に依頼して制作した「如意輪講式」の法要を、およそ八〇〇年ぶりに復元し厳修いたします。

◎期 日 平成二十八年六月二十六日（日）

◎会場 本堂（どなたでも参列できます）

三、「秘佛」二字金輪佛頂尊 御開帳

◎期 平成二十八年六月二十九日（水・平泉世界遺産の日）

◎会場 十一月六日（日）

◎会場 讚衡藏秘仏室

◎拝観料 大人五〇〇円／小・中・高校生二〇〇円

◎金色堂との共通拝観料・大人二二〇〇円／高校生六〇〇円／中四〇〇円／小三〇〇円

◎拝観時間 午前八時三十分～午後五時（十一月四日からは午後四時三十分まで）

四、天台寺「桂泉観音」出開帳

◎期 平成二十八年七月三十日（土）～九月十一日（日）

◎会場 讚衡藏（通常の中尊寺拝観料で拝観できます）

五、本堂法話

◎内 容 中尊寺貫首はじめ、一山僧侶が「平泉」の歴史や仏教文化について法話を行います。

◎日 時 平成二十八年九月・十月の日曜日 午後二時

◎会場 本堂（予約不要・聴聞無料）

六、世界無形文化遺産 みちのくの神楽 奉演

◎内 容 ユネスコ世界無形文化遺産「早池峰神社岳神楽」をはじめ、平泉近隣、三陸沿岸に伝わる神楽の奉演を行います。

◎日 時 平成二十八年九月十七日（土）・二十四日（土）午前

◎会場 十時・午後一時

◎本堂（どなたでもご覧になれます）

七、三陸郷土芸能 奉演

◎内 容 三陸沿岸地区に伝わる郷土芸能の奉演を行い、ともに三陸の復興を祈願します。

◎期 日 平成二十八年十月一日（土）・八日（土）・十五日（土）

◎会場 中尊寺境内（どなたでもご覧になれます）

八、念仏会 ～浄土の祈り～

◎内 容 僧侶の読経が厳修される中、ご参拝の方々にも大数珠を繰りながら随時お念仏をお唱えいただき、それぞれの祈りを捧げていただきます。

◎期 日 平成二十八年十月二十二日（土）

◎会場 本堂

あら？

## 中尊寺の千手観音様が

平泉に『どんぐり』という人形劇グループがあります。結成されて三十年になり、主に町の図書館や、お年寄りの施設から依頼を受け、上演してきました。メンバーは現在五名。

このほど、新作『わらしべ長者』ができました。登場するのは八体の人形と、馬、背景の絵が三枚。皆で分担して作成しました。

ストーリーりは、貧しいけれ



観音様、おねがいします！

ども優しい主人公の若者が、ある日観音様に「どうかおらにも運が開けますよう、お願いします」と拝みます。すると観音様から……。

「おまえの願いをかなえてあげましょう。今日、この寺を出てから、一番最初に挿んだ物を大事にしなさい」というお告げを受けます。

若者は、喜んで寺を出ますが、とたんに転び、その拍子に一本の『わら』を挿んでいました。

「たつたの、わら一本じゃないか」と、若者はがっかりしてしまいます。が、これが思いがけず役に立ち、次々と困っている人や馬を助け、お礼をいただくという展開になります。そして遂に、長者の娘婿になり、家を継ぐことになりました。

この話に限らず、昔話や民話には、観音様・お地藏様・お札などがよく登場します。

現在よりも仏教が身近で、親しまれ、重んじられていたのですね。

(どんぐりメンバーより)

## 座禅止観のおすすめ

清水秀法

仏道の修行方法の一つに「座禅」という修行があります。が、これほどに広く知れわたり、誰しもが知っている修行方法は他に無いのではないのでしょうか。けれども、座禅という言葉は知っていても、実際に日常生活の中で、あるいは、お寺で座禅をしたことがある人は、そう多くはないと思います。

毎日の生活では、仕事や勉強にいそがしく過ごし、あるいは時間ができたとしても、本を読んだりテレビを見たり、携帯電話を弄つたりと、何もしないで過ごすことが、なかなかできなくなっている私たちにとって、座禅という一見すると「ただ座っているだけ」に見えることに時間を割くということは、無駄にすら思えてしまうかもしれません。しかし、そのような忙しい日々をおくる人にこそ、体の動きはもとより、心の動きまで止めることを目的とする座禅を体験していただきたいと思っています。

中尊寺では四月から十月までの間、本堂で座禅の体験ができます。修学旅行や社員旅行での研修として、あるいはご家族やお友達と旅の思い出作りにと、様々な方が座禅の体験に来山されます。

座禅体験では、先ず本堂に入り、荷物を置いて素足になり、座禅用の黒くて丸い座布の後ろに座ってもらいます。座布の上には「座禅止観」と題された経本が置いてあります。座禅とは心を安らかな状態にして座ることです。一方止観とは、止めて観ると書きますが、体や心の動きを止め、心を観察するという意味です。経本を開いてお経を「懺悔文」、「三礼」、「四弘誓願」と唱えてもらいます。これにより日々の生活を悔い改めて、仏さまにご挨拶をし、修行をするにあたっての四つの誓いを立ててもらうことになるのです。

お経を読み終えたら、座り方の説明にうつります。あぐらになつて座布の前半分に座り、左足を右の太もものにせて半跏坐を組み、背筋を伸ばし、目を半眼にして目線は一メートルほど先に落とし、手は定印を組んでもらいます。次に、禅杖の説明をします。座禅といえど背中を叩かれ



るといふ観念があるのか、この説明の時に、学生さんなどは特にざわざわとすることが多いです。禅杖は、座禅の修行を助けるためのもので、罰を与えるものではなく、怖がらなくても大丈夫ということと、禅杖は修行をする全員に受けて頂くことを伝えた後、具体的な禅杖の受け方を教えます。順番がまわってきたら、お互いに合掌一礼をし、次に修行者は両腕を交差させて腕を持ち、肩を内側に入れるように背中を丸め、交差させた腕の中に頭を入れ、そのまま、体を四十五度ほど倒します。そうしましたら、右三回、左三回と禅杖を受けていただき、計六回終わりましたら、体をもどし合掌一礼。そしてもう一度定印を組んで、背筋を伸ばし、座禅の姿勢にもどります。

座禅中は数息観すそくかんという修行方法をとります。深くゆつたりとした呼吸をし、吸って吐いて一、吸って吐いて二、と自分の呼吸を数え、百まで数えたら、再び一から数えます。途中で数がわからなくなった場合も、もう一度始めから数えなおします。呼吸を数えるというのは、なにも多く数える競争ではなくて、呼吸に集中することにより、他のことを考えないようにするためです。

た筋肉と、それぞれ揉んでもらい、手で顔を覆い、その中で目を開いて、指と指の間隔を徐々に開けていき、周りの明るさに目が慣れたら手を下ろしてもらいます。座禅を終えたみなさんに、「何分くらい座っていたと思いますか。」と尋ねると四十分とか三十分、二十分と人によってそれぞれ違います。体が痛かった人、緊張していた人、早く次のことをしたかった人などにとっては長く感じ、リラクセスできた人、座禅に集中できた人には短く感じるのだと思います。

以前に、心を水槽に喩たとえる話を聞いたことがあります。心は楽しいことがあれば楽しい方に、悲しいことがあれば悲しい方に行く、常に様々な方向に向き、動いています。水槽が、上下、左右、振られ、回されると、沈んでいた土が舞い上がり、水が茶色く濁ってしまいます。そこで忙しく頑張るのではなく、水槽、すなわち心の動きを一度止めてみます。そうすると、徐々に土が下に降り始め、水草があつたことに気が付き、やがて魚がいたことに気が付き、完全に沈殿が終わると、水が透明になり、水槽の向こう側

座禅の座り方についての説明が一通り終わると、次に心身の緊張や硬さを取り除くために、座ったまま簡単な体操を行います。首の前後運動から始まり、肩の上げ下げ、腕回し、腰回し、最後に照明を消して、体を前に傾けながら息を吐き、吸いながら戻り、軽く後ろに反らせます。この深呼吸を三回行い、体内の空気を全て新しくし、音木おんぎ（拍子木）と打ち鳴らしを鳴らします。この打ち鳴らしの音を聴きながら修行者は座禅止観に入ります。

正しい姿勢であるかを確認しながら、参加者の周囲を一周し、僧侶も座につき呼吸を数えます。百まで数えたら音木を鳴らし、僧侶は立ち上がって禅杖を持ち、修行者のところをまわります。隣が気になる人や、緊張している人など、様々な人がいます。全員に禅杖を受けてもらった後、もう一度座ります。全体で約三十分くらい座り、打ち鳴らしと音木を鳴らした後、修行者には、定印を解いてもらい、目を完全に閉じてもらいます。最初と同じように深呼吸を三度、そして組んでいる足をほどき、ご本尊に足が向かないように脚を伸ばしてもらいます。痺れをとるために手で足を揉み、次に肩から腕、頭の後ろから首筋、顔の強張つ

まで見えるようになります。日常から離れた場所で座禅という仏道修行の体験をすることにより、濁っていた心が透明になり自分自身の心を観察することができるような座禅体験になるよう、指導する側として努めています。

座禅止観は、お寺においてはもちろんのこと、みなさんの日常生活の中でも行うことができます。ほんの少しの間を作り、静かに心を落ち着かせ、自分の心を見つめなおしてみましよう。きつと水槽の喩えと同じように、みなさんの心は澄みわたり、より一層自分自身について深く知ることができるようになります。

# 風信 / 語録

中尊寺で和尚さんの話を聞かせていただいたり、金色堂を見せてくださり、ありがとうございます。私たちは何回か中尊寺に來ていましたが、清衡の考えた理想についてのお話がとても心にのこりました。これから世界が平和になつていけばいいなと思いました。そして、金色堂に入るのは初めてだったので、すごく感動しました。

奥州市立衣里小学校六年 M・K

金色堂を見た時は、すごく輝いていてすばらしいと思いました。金色堂修理のビデオを見て驚いたのは、夜光貝や、象牙のことです。実際に見ると、夜光貝が輝いて見えました。ぼく達のいる衣川と平泉の関係も知ることができたので

良かったです。

奥州市立衣里小学校六年 K・I

先日、中尊寺でお世話になりました。映像視聴では、いろいろなことを学びました。金色堂は世界各国のものを使っていて、すごいと思いました。解体修理の様子を見ると、とても大変そうでした。でも、きれいに復元できて良かったです。お忙しい中、ぼくたちにいろいろなことを教えてください。ありがとうございます。

奥州市立衣里小学校六年 Y・C

六月十一日、私たち三十一人は中尊寺にうかがいました。金色堂はじめ、松尾芭蕉の銅像などたく

さん見学し、中尊寺ハスの話など、平泉文化について、たくさんのお話を学ぶことができました。ありがとうございます。

大船渡市立末崎小学校六年 I・T

この前の修学旅行ではわかりやすい説明のおかげで、中尊寺の歴史をすっかり頭にきざむことができました。忘れられない思い出になりました。また中尊寺に行きたいと思います。

大船渡市立末崎小学校六年 T・S

私は、見学の時に教えてもらった夜光貝のことをポスターにすることにしました。発表の日が楽しみです。ありがとうございます。

平泉町立平泉小学校三年 S・T

# 佐々木 典子

# 関山植物誌 <7>

(自然観察会 平泉メビウスの会会員)

## ツルアリドオシ

### アカネ科 ツルアリドオシ属

この植物は、中尊寺の鐘楼に至る土手にあります。

苔の中に見え隠れしながら、這うように蔓を伸ばしています。六月ごろに一センチの白い花を付け、晩秋に五ミリほどの実が赤くなります。

名前の由来は、ツルがあり「アリドオシ」に似ているからとのこと。ではアリドオシはというと……。

アカネ科。林に自生する常緑低木で、五月ごろ一センチの白い花が咲き、冬に五〜六ミリの実が赤く熟す。枝に一〜二センチの鋭い刺が多い。名前の由来は、この刺が小さな蟻でも突き通すから、また刺が細かく、蟻でなければ通り

抜けられないからともいわれます。

クリスマスや正月に飾られる「千両」や「万両」は、よく知られていますが、アリドオシには「一両」という別名がありました。山林でよく見かけるヤブコウジは

「十両」です。木の姿や実の数から、このランクが付けられたように、面白いですね。ウメモドキやナンテンなど、晩秋から冬にかけて実の赤くなる植物はたくさんあります。目立つ実を小鳥が食べ、糞として種をまいてもらう、自然の営みですね。

能の曲目に『蟻通』があります。紀貫之ゆかりの、大阪・蟻通明神が舞台です。参拝者の賑わいを、蟻の行列にたとえたのが名前の由来ともいわれ、植物のアリドオシ

との関連はないようです。

鐘楼の苔の土手には、最近まで「ホツツジ」がありました。地味な花であり、わざわざ植えたものではないと思います。今は苔だけで、スッキリして見えますが、そのためにも古くから自生していた植物が無くなるのは残念な気がします。



ツルアリドオシ

## この一年を振り返って

佐々木 浩子

平成二十七年の活動としましては、通常お勤めさせていただく年間法要の出仕に加え、六月十三日に松島湾で行われた「四寺廻廊船上法要」と仙台市博物館で開催された奈良薬師寺展見学、六月二十五・二十六日の千葉県南総文化ホールでの「福聚教会東日本奉詠舞大会」出場、翌日に中尊寺本堂で開催された平泉世界遺産の日「平和祈願法要」、十一月八日には平泉小学校を会場に開催された一隅を照らす運動震災復興祈念大会等の行事に参加させて頂きました。

また、十一月二十五・二十六日には福聚教会陸奥地方本部主催の詠唱・舞踊研修会が平泉町ホテル武蔵坊を会場に開催され、当支部より二十四名が参加し研鑽を積みました。この研修では検定試験も実施され全員合格させて頂きました。

特に印象深いこととしては、平泉を会場に大勢の方を迎えての一隅大会でした。その中で十二年籠山行を満行され

た、宮本祖豊師の「覚悟の力」と題した講演がありました。死を覚悟するほど壮絶な修行の模様を淡々と時にユーモアを交えて話されました。自分で限界と思っても「あと一歩」と思えば立ち上がれる。どんな人間でも自分のポストでベストを尽くせば周りの人間に光を投げ掛けられる。癒しを与えられる人になれると言われた言葉が強く心に残っています。

私にとりましては、色々な事がありまして、ご詠歌を始めてから数年しか経過しておりません。もちろん、奉詠舞大会にも初参加でした。皆さんの足を引っ張らないようにするだけで精一杯でした。初参加の方が多数いる中での準優勝（詠唱）と奨励賞（舞踊）の二つをいただけたことは、本当に驚きと大きな喜びで夢のようでした。

平成二十九年度には、この岩手の地で福聚教会東日本奉詠舞大会が開催されます。地元開催の名に恥じないように早めに曲目を選定し、通常法要の度に練習を重ねてゆこうと話し合っております。これからも当支部にご指導・ご高配をお願い申し上げます。

（常住院寺婦・福聚教会中尊寺支部幹事）



叡山講福聚教会東日本奉詠舞大会  
平成27年6月25日・26日 南総文化ホール





# 新刊紹介

(二〇一五年一月〜十二月)

『東北の中世史1 平泉の光芒』

吉川弘文館 編・柳原 敏昭 二〇一五・七・一

『東北の中世史2 鎌倉幕府と東北』

吉川弘文館 編・七海 雅人 二〇一五・九・二十

『シリーズ「遺跡を学ぶ」101 北のつわもの都・平泉』

新泉社 著・八重樫 忠郎 二〇一五・八・十五

『岩手県文化財調査報告書 第141集 平泉遺跡群発掘調査資料集

柳之御所遺跡 出土資料(重要文化財指定品) 目録』

岩手県教育委員会生涯学習文化課 二〇一五・二・二十七

『岩手県文化財調査報告書 第144集 平泉遺跡群発掘調査資料集

柳之御所遺跡 ―第75次発掘調査概報―』

岩手県教育委員会生涯学習文化課 二〇一五・三・三十

『アジア都市史における平泉

―平成26年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会報告書―』

岩手県教育委員会・一関市教育委員会・奥州市教育委員会・

平泉町教育委員会 二〇一五・三・三十

『アジア都市史における平泉 資料集

「平泉の文化遺産」拡張登録に係る共同研究成果2』

岩手県教育委員会・一関市教育委員会・奥州市教育委員会・

平泉町教育委員会 二〇一五・三・三十

『平泉文化研究年報 第15号』

岩手県教育委員会 二〇一五・三・三十

『岩手県平泉町文化財調査報告書 第123集

特別史跡無量光院跡発掘調査報告書XI―第28次調査―』

平泉町教育委員会 二〇一五・三・三十一

『岩手県平泉町文化財調査報告書 第124集

倉町遺跡第14次 西光寺跡第9次 志羅山遺跡第106〜108次 瀬原II遺跡第11次

中尊寺跡第83次 花立I遺跡第31次 無量光院跡第27・29次』

平泉町教育委員会 二〇一五・三・三十一



〔関山句囊〕

(平成二十七年六月二十九日 於毛越寺)

〈第五十四回 平泉芭蕉祭全国俳句大会より〉

(當日句入選)

毛越寺あやめ千本供花とせり (大会長賞)

\*宮坂静生選 特選 奥州 梅森 サタ

池めぐる弁慶顔の鬼やんま (中尊寺賞首賞)

(岩手県ユネスコ協会連盟会長賞)

特選 北上 菊池 郁子

万緑の日の斑を踏みて光堂 (毛越寺賞首賞)

特選 盛岡 加藤久仁子

平泉の日の青芭蕉かがやきて

秀逸 奥州 菅原 淑子

眼の前はむかし戦場いま青田

秀逸 奥州 伊藤さとる

花菖蒲今日の時間を輝す

秀逸 奥州 阿部 系子

蟬の穴七堂伽藍のむかし見ゆ

秀逸 盛岡 鈴木 睦子

金鶏山暮も遺産の面構へ (岩手県知事賞)

\*小菅白藤選 特選 宮城 鈴木喜久郎

三代の栄華この世に浮いて来い (河北新報社賞)

特選 奥州 小野寺昭次

世界遺産貸切つてゐるあめんぼう (岩手日報社賞)

特選 花巻 大平 春子

千年の風纏ひつつあやめ咲く

秀逸 一関 小野寺東子

万緑や池千年を逆しまに

秀逸 一関 桂田 一穂

古代蓮その初花も世界遺産

秀逸 奥州 古川 和子

紫陽花や蒼き地球のごとく咲く

秀逸 盛岡 工藤 幸子

古代蓮葉裏で繋ぐ世界遺産

秀逸 奥州 木村 文子

いくさなき願文浄土花あやめ (岩手県議会議長賞)

\*小畑柚流選 特選 奥市 服部 常子

芭蕉祭祈祷の僧の薄衣 (岩手日報社賞)

特選 気仙沼 熊谷 房子

箏の音やあやめ祭りの毛越寺 (中尊寺賞)

特選 奥州 斉藤 径子

万緑をぬけて遣水かがやけり

秀逸 一関 伊勢田あきを

五月雨の一滴も慈悲光堂

秀逸 平泉 旭 光

供養経尼僧の声の涼しさよ

秀逸 盛岡 兼平 玲子

震災のみたまの祈り堂涼し

秀逸 奥州 高橋 洋子

花菖蒲浄土をかもす毛越寺

秀逸 奥州 佐藤 年末

はしり根に慈雨の侵みをり毛越寺 (平泉町教育長賞)

\*小林輝子選 特選 奥州 鈴木 勝子

いくさ忌む仏の庭の花菖蒲 (岩手日日新聞社賞)

特選 一関 佐藤 千洋

世界遺産草取女人振りむかず (毛越寺賞)

特選 一関 桂田 一穂

青葉闇出で遣水の光ゲ放つ

秀逸 平泉 岩渕 洋子

あやめ園巡りて侍る芭蕉句座

秀逸 平泉 鈴木多佳子

大池に雲の遠近花あやめ

秀逸 奥州 菊地 良子

駄風鈴音のもつれを風ほどく (岩手日日新聞社賞)

\*白濱一羊選 特選 奥州 大石 文雄

床下に読経を聴くや蟻地獄

秀逸 奥州 鈴木 藤子

花あやめ祈りのさまに萎れけり

秀逸 西和賀 門屋 允子

青葉風仏の耳のやはらかし

秀逸 気仙沼 佐藤 綾泉

蕉門の末席に座す雨蛙

秀逸 一関 村上 達男

瑠璃光の浄土に尼僧白菖蒲

(平泉觀光協会長賞)

\*照井翠選

特選 平泉 岩淵眞理子

もろびとの不戦の祈り古代蓮

(河北新報社賞)

特選 奥州 菅野 好子

散り松葉風も久遠の毛越寺

(岩手日日新聞社賞)

特選 花巻 関 園子

万緑や奉燈の寺しづもれる

秀逸 北上 及川由美子

梅雨空を押し上げるかに光堂

秀逸 一関 熊谷 祥歩

関山の王たる杉の木下閣

秀逸 一関 伊東 静枝

遠き世の見えくる梅雨の浄土池

秀逸 宮城 砂金 元子

(応募句入選)

箴言のごとき高館新樹光

\*宮坂静生選

(天) 大崎 只野 英子

真先に一揆の森の木の根開く

(地) 奥州 岩淵 正方

その中に高音の蛙平泉

(人) 厚木 大矢知順子

東稲の山懐や百千鳥

秀逸 盛岡 北田 祥子

花冷や捨舟いまま沖を恋ふ

秀逸 一関 小野寺宙外

釣銭に土の匂いの植木市

\*佐治英子選

(天) 八尾 穂山 常男

風にまだ硬さのありて花りんご

(地) 盛岡 鈴木 智子

虎杖の紅く芽吹くも一揆の地

(人) 北上 伊藤 晴子

遣り水は先を急がず昼蛙

秀逸 奥州 梅森 サタ

囀りの真中にありき光堂

\*小畑柚流選

(天) 盛岡 芳賀 起夫

借景に東稲山すわる春田打ち

(地) 平泉 鈴木多佳子

秘仏守り平泉の日古代蓮

(人) 花巻 中村 青路

開山堂護摩真言の青葉光

秀逸 平泉 佐々木邦世

少年は広角レンズ夏来る

\*小菅白藤選

(天) 一関 伊東 静枝

首桶の闇より出でし蓮の花

(地) 仙台 川村 紀子

農事メモ墨痕太く「平泉の日」

(人) 気仙沼 吉田 貞女

弁慶の立往生や雲の峰

秀逸 盛岡 馬場 吉彦

種を選る父の十指に眼あり

\*小林輝子選

(地) 横手 高橋 遥

蝶来たるスケッチ帳の空の端

(人) 宗像 藤崎由希子

青邨の句碑の空掃く今年竹

秀逸 奥州 梅森 サタ

新緑の闇うるみ出す義経堂

\*照井翠選

(天) 美里 佐藤 みね

莊園の絵図の奥まで田水張る

(地) 奥州 岩淵 正方

花筏鯉が舵とる浄土池

(人) 奥州 菅野 好子

山河に三代の夢霞みけり

秀逸 新潟 佐藤 憲

(入選重複句は省き、秀逸は編者が適宜に掲出)



児童生徒

岩手県内 小中学校児童生徒の部 (投句総数二七四句)

静けさや桜ささやきかげゆるる

特選 西和賀町立湯田小学校六年 高橋 蘭

ハスの花目覚めて今に咲き誇る

特選 一関市立萩荘小学校六年 千葉 匠

ラベンダー復興願い友と植え

特選 北上市立黒沢尻東小学校六年 鈴木 花実

雨上がりあやめかがやく毛越寺

特選 一関市立東山小学校五年 細川 真佑

聞こえ来る月見坂からせみの声

特選 北上市立江釣子小学校五年 相川さくら

月見坂ウグイスの声とのぼりおり

特選 遠野市立達曾部小学校六年 有田悠一朗

遣り水を覗けば広がる夏浄土

特選 一関市立桜町中学校三年 佐藤 優月

春草や芭蕉の言葉を刻む場所

特選 二戸市立福岡中学校三年 田中 晃成

さえずりがかすかに聞こえる午前5時

特選 大船渡市立赤崎中学校一年 吉田 祐衣

平泉町内 小中学校児童生徒の部 (投句総数七七四句)

平泉小学校

雨の後そこには虹がかくれてる

特選 五年 北嶺 航

シャボン玉空をいろどる夢もよう

特選 六年 石川 漸

のき下に小さな旅人つばめさん

特選 六年 餘目 早希

長島小学校

こうていでけむしがとなりよいいどん

特選 一年 前田 愛翔

へちまの芽大きくなあれ長くなれ

特選 四年 岩渕 有希

春風でカーテンゆらりまたべたり

特選 五年 佐々木碧紘

平泉中学校

青空に桜舞い散る平泉

特選 三年 千葉 健

中総体ラストマッチだ手には汗

特選 三年 柿崎 光

サワサワと気づけば葉から初夏の音

特選 二年 達谷窟南都

平成二十七年平泉町芸術文化祭参加

児童・生徒俳句大会「ほくもわたしも芭蕉をめざして」

主催 平泉ユネスコ協会 (投句総数五五九句)

平泉小学校

せみのこえいっしょにあるくつきみぎか

特選 一年 ちば あおい

つきみぎかせみがみんなでおうえんだん

特選 一年 すがわら あやな

あさがおもみんななかよし一ねんせい

特選 一年 とうごう あき

長島小学校

なつやすみばくとひまわりせいくらべ

特選 一年 ちば そら

ひらいずみひまわりみたいにひかっている

特選 一年 やまだ こうたろう

こんじきどうおこめとおなじきんのいろ

特選 一年 ささき こうき

高館のセミの鳴き声楽しそう

特選 四年 岩渕 真帆

人のなみもみじがひらりつきみ坂

特選 五年 石川 遙斗

ハスの花八百年の歴史咲く

特選 六年 千葉 奈緒

北上川の六十四里夏兆す

〔河北俳壇〕<sup>92</sup> 京極 久也

平泉中学校

古の風薫る町平泉

特選 二年 佐藤 周平

拝観の異国語の群中尊寺

ゆれる稲金色堂の黄金色

特選 二年 石川 はな

〔寒雷〕二月号 若松美保子

風薫り平和をうたう鐘が鳴る

特選 二年 石川 芽衣

千歳の延年舞や櫺紅葉

名月や池にも一つ毛越寺

特選 二年 阿部 彩加

〔寒雷〕三月号 古谷 弘子

浄土へと導き光る螢かな

特選 三年 小野寺香織

元日の束稲山は肩を組む

毛越寺遺水の音涼しげに

特選 三年 小野寺香織

遺跡掘る霞の底のひらいつみ

山霧の包む慈顔の阿弥陀像

特選 三年 小野寺香織

〔寒雷〕四月号 小野寺束子

金色堂まで霧雨の月見坂

特選 三年 小野寺香織

五月雨や玻璃の曇れる光堂

関山の寺軒深く実南天

特選 三年 小野寺香織

光堂白雨の後の雫かな

年立つや一山統べて光堂

特選 三年 小野寺香織

八百年のちも咲けかし古代蓮

高館に帰る白鳥見送りぬ

特選 三年 小野寺香織

〔寒雷〕五月号 小野寺束子

風は桜色真青な空と光堂

特選 三年 小野寺香織

〔寒雷〕六月号 鈴木きぬ絵

新涼や箒目しるき毛越寺

特選 三年 小野寺香織

義経堂の坂はほどほど蝸牛

泰衡の首桶ひとつ露けしや

特選 三年 小野寺香織

姥百合のつばみふくらむ中尊寺

銀漢や紺紙金泥経一卷

特選 三年 小野寺香織

〔草笛〕十月号 岡崎 翠

古代蓮極楽の色放ちけり

特選 三年 小野寺香織

〔草笛〕十月号 岡崎 翠

〔草笛〕十月号

瀧口 千尋

〔草笛〕十月号

〔草笛〕十月号

千葉 信子

〔草笛〕十月号

〔草笛〕十月号

千尋

〔草笛〕十月号

〔草笛〕十月号

千尋

〔草笛〕十月号

子の頭さすりて過ぎぬ寒の鈴

『たばしね』 二月号 鈴木 四郎

過去帳に震災戦災三月来

『たばしね』 三月号 佐々木邦世

連翹れんぎょうの風にさそはれ西行碑

『たばしね』 四月号 岩淵 洋子

多聞院先づは陽を浴ぶ蓮浮葉

(和賀の多聞院) 『たばしね』 五月号 佐々木邦世

五月雨や香のたゆたふ法の庭

『たばしね』 七月号 岩淵眞理子

十葉や野に幾年の能舞台

『たばしね』 七月号 鈴木 信

みちのくや梅雨にむせびし義経堂

『たばしね』 七月号 関宮 治良

鎌研ぐや紫陽花の雨背を流る

『たばしね』 七月号 阿部 義美

七十年不戦の夜空大文字

『たばしね』 九月号 鈴木 四郎

澄める水汲みて朱印の筆濯ぐ

『たばしね』 九月号 岩淵眞理子

台湾語紅葉且つ散る自撮棒

『たばしね』 十一月号 佐々木邦世

高館を見下ろすやふに冬の月

『たばしね』 十一月号 岩淵眞理子

衣川細くなりし日柿を干す

『たばしね』 十一月号 北嶺 澄照

### 〔関山歌籠〕

#### 〈第三十六回西行祭短歌大会〉

(平成二十七年四月二十九日)

\*秋葉 四郎選

客絶えてひとり草ひく菜園に逝きて二十日の  
妻の靴あと (中尊寺貫首賞)

盛岡 遠藤 吉光

歩哨の夜の月美しく郷思ふ葉書は来しが父は  
還らず (平泉町長賞)

花巻 高橋 緑花

耳澄まし呼び出し音を教えつつ足弱き母の声  
を待ちいる (平泉観光協会会長賞)

奥州 遠藤カオル

自炊部につづく吊橋わたり来て吹雪く外湯に  
病む身を浸す (岩手日報社賞)

盛岡 折居 路子

田の雪がひき波のごと消えしあと土黒々と春  
陽を浴む (IBC岩手放送賞)

紫波 佐々木さやか

春山の空くらむまで降る雪に沼は白鳥の声ゆ  
とりなし (岩手日日新聞社賞)

金ヶ崎 板宮キミ子

感嘆のため息まじりに聞こえる金色堂の金色  
の中

緑、陽に透きてしずけきもみじ葉の中尊寺の  
坂黙して下る

『紫蘭』 飛田 房子



御神事能番組

平成二十七年五月四日

法楽  
古実式三番

開口 佐々木五大 大鼓 三浦 章興  
祝詞 千葉 快俊 小鼓 佐々木亮王  
若女 菅野 澄円 笛 清水 秀法  
老女 破石 晋照 後見 菅原 光聰

後シテツレ 佐々木五大

前シテツレ 佐々木亮王

能 シテ 北嶺 澄照

太鼓 菅野 宏紹

竹生島

ワキ 菅野 成寛

大鼓 佐々木長生

ツレ 佐々木秀厚

小鼓 佐々木仁秀

間 北嶺 航

笛 清水 広元

五月五日

開口 佐々木五大

笛 清水 秀法  
後見 菅野 宏紹

狂言

かねのね

シテ 破石 晋照  
アド 破石 澄元

半能 子方 菅原 光哉  
鞍馬天狗 シテ 佐々木五大

太鼓 三浦 章興  
大鼓 千葉 快俊  
小鼓 菅原 光聰  
笛 清水 秀法

秋の藤原まつり中尊寺能 十一月三日

連吟 平泉 二葉きらり園 園児四十八名

鞍馬天狗

老 松

仕舞 一関喜桜会

月宮殿 八重樫結花

船弁慶 本澤 京子

素謡 一関喜桜会

シテ 白石 恵一

融 ワキ 三浦 博

能 シテ 佐々木五大

猩猩 ワキ 佐々木秀厚

太鼓 三浦 章興  
大鼓 佐々木長生  
小鼓 菅原 光聰  
笛 清水 秀法

〔陸奥教区宗務所報〕

第二部 中尊寺関係

平成二十六年十二月一日〜平成二十七年十一月三十日

□ 平成二十七年

二月二十二日〜二十四日 於大正大学

教師研修会（B群）

佐々木五大・清水秀法・佐々木亮王出席

三月十一日

東日本大震災祥月命日法要

山内より二名出仕

七月二十九日〜三十一日 於大正大学

教師研修会（B群）

佐々木宥司出席

九月五日

二部檀信徒会一隅大会

山内より一名、檀徒五名参加

集まった浄財 六四、五〇〇円は地球救援募金へ

十一月八日

於平泉小学校体育館

一隅を照らす運動震災復興祈念大会

講演「覚悟の力」

講師 比叡山十二年籠山行満行

延暦寺一山円竜院 山本祖豊師

清興「津軽三味線」 渋谷幸平氏

山内より十名・ご詠歌衆・檀徒五十名参加

集まった浄財 一、二一七、四五〇円

内、平泉町社会福祉協議会へ 三〇〇、〇〇〇円

地球救援募金へ 九一七、四五〇円

十一月二十日

天台宗人權啓発公開講座

於浅草寺

十一月二十二日

天台宗一斉托鉢

委員 三浦章興参加  
山内より八名参加

集まった浄財

一八三、八四五円は地球救援募金へ



□ 役職任免

(平成二十六年十二月一日)

天台宗人権啓発委員会企画委員

法泉院 三浦章興

(平成二十七年六月十日)

天台宗ニューヨーク別院慈雲山天台寺本堂

落慶十周年記念法要並びに得度式による特定布教

中尊寺 山田俊和

金剛院法嗣 破石晋照

(平成二十七年七月二十八日)

陸奥教区地方選挙管理委員会委員

千養寺 佐々木秀厚

陸奥教区地方選挙管理委員会予備委員

利生院 菅野宏紹

(平成二十七年十月一日)

陸奥教区宗務副所長

一隅を照らす運動陸奥教区本部副本部長

大徳院 菅原光聰

陸奥教区宗務所主任・一隅陸奥教区本部事務局員

眞珠院副住職 菅野澄円(庶務)

円教院 千葉快俊(財務)

葉樹王院 北嶺澄照(教務)

一隅陸奥教区本部理事

観音院 清水広元

観音院寺婦 清水真澄

一隅陸奥教区本部顧問

大長寿院 菅原光中

陸奥教区布教師養成所所長

中尊寺 山田俊和

陸奥教区布教師養成所事務局長

瑠璃光院 菅野康純

陸奥教区寺院問題対策委員会委員

眞珠院 菅野澄順

寺院教会収入額教区審議委員会審議委員

観音院 清水広元

陸奥教区名誉住職推薦委員会委員

圓乗院 佐々木邦世

積善院 佐々木仁秀

(平成二十七年十月九日)

祖師先徳鑽仰大法会教区事務所所員

大徳院 菅原光聰

眞珠院副住職 菅野澄円

円教院 千葉快俊

葉樹王院 北嶺澄照

中律師 金剛院法嗣 破石晋照

(平成二十七年七月十五日)

権律師 大徳院法嗣 佐々木宥司

□ 経歴行階履修

(平成二十七年五月十七日(六月二日))

四度加行履修 大徳院法嗣 佐々木宥司

(平成二十七年六月二十六日)

入壇灌頂履修 大徳院法嗣 佐々木宥司

(平成二十七年九月二十八日)

円頓大戒履修 大徳院法嗣 佐々木宥司

(平成二十七年十月五日)

廣学竖義履修 大徳院法嗣 佐々木宥司

□ 住職任命

(平成二十七年七月二十八日)

金剛院副住職 破石晋照

□ 褒賞

(平成二十七年十一月四日)

住職五十年勤続表彰 地藏院 佐々木秀圓

□ 教師補任

(平成二十七年四月二十一日)

大僧都 千養寺 佐々木秀厚

大僧都 法泉院 三浦章興



# 執務日誌抄

平成二十六年十二月一日

二十七年十一月三十日

## 平成二十六年

### ◇十二月

- 一日 月次大般若(本堂)  
境内一斉清掃  
讃衡藏運営委員会  
職員研修「御遺体調査」  
色堂解体修理」上映会(大広間)
- 四日 平泉町交通安全推進運動町民大会(管財章興 於役場)  
平泉観光協会理事会(執事長)
- 六日 貫首 法話(満折会様 本堂)
- 七日 薬師会(讃衡蔵)

- 八日 秋期一山会議(大広間)
- 九日 浅草寺貫首清水谷孝尚大僧正本葬儀(貫首・随行秀法)  
光勝院建設委員会
- 十日 貫首 エジプト訪問(十七日、参与秀圓同行)
- 十一日 浄土宗布教師会様団参(参与光中案内)  
高野山真言宗青年教師会矢澤玲道師来山(総務光聰挨拶)  
東日本大震災物故者追善回向月命日法要(本堂)
- 十四日 弥陀会(讃衡蔵)  
中尊寺文書調査研究発表(東北大学大学院文学研究科教授柳原敏昭氏による調査進捗状況等の説明/東北芸術工科大学芸術学部 佐藤健治氏「平泉惣別当体制の崩壊と中尊寺宗徒」と題し研究発表庫裡広間)
- 十六日 第二五世天台座主渡邊惠進宛下本葬(執事長 於滋賀院門跡)

- 十七日 毘沙門堂門跡門主叡南覺範大僧正米寿並びに探題昇補祝賀の集い(執事長 於グランヴィア京都)
- 白山会(本堂)
- 十八日 初詣警備会議(管財 於泉橋庵)
- 十九日 中尊寺節分講中総会(執事長・法務 於泉橋庵)
- 二十日 骨寺村莊園米奉納  
お経を読む会(瑠璃光院)
- 二十四日 文殊会(経蔵)
- 二十八日 恒例御供餅つき
- 三十一日 午後三時 一山総礼

## 平成二十七年

### ◇一月

- 一日 ○時 新年祈祷護摩供修行  
七時 東山町(若水送り)着  
九時半 正月祈祷護摩(本堂)  
十時半 総礼  
修正会 釈迦供(本堂)

- 冬堂籠り(五日 結衆、開山堂)
- 二日 九時半 正月祈祷護摩(本堂)  
修正会 薬師供(峯薬師、讃衡蔵)  
十四時 話初め(広間)
- 三日 九時半 正月祈祷護摩(本堂)  
修正会 山王供(山王堂)  
十二時 元三公会 慈恵供(本堂)
- 四日 修正会 薬師供(瑠璃光院薬師堂)
- 五日 修正会 文殊供(経蔵)  
大般若会(利生院弁財天堂)
- 六日 修正会 釈迦供・月山供(釈迦堂)  
寒修行(行者五名、町内托鉢。小寒、節分)
- 七日 修正会 白山十二面供(本堂)  
大般若会(本堂)  
修正会 弥陀供(金色堂)
- 八日 修正会 薬師供(讃衡蔵)  
一字金輪仏・千手観音法楽  
修正会結願  
十三時半 恒例「金盃抜き」
- 十一日 東日本大震災物故者追善回向月命日法要(本堂)

- 十四日 慈覚会(御影供 本堂)  
お経を読む会(貫首)
- 十五日 平泉町景観形成審議会(総務 快俊代理出席 於役場)  
荒了寛師来山(貫首挨拶)
- 二十日 立正佼成会会長谷川支部長・後藤氏来山(貫首挨拶)
- 二十一日 多田厚隆元貫首二十三回忌法要(本堂)  
貫首 対談(達増拓也岩手県知事 茶室)
- 二十五日 文化財防火訓練
- 二十七日 念法真教教務総長桶屋良祐師、



- 二十九日 総務部長一宮良範師・同次長本多賢次師来山(執事長挨拶)  
気仙沼市本吉冠者「高衡会」総会(総務快俊 於気仙沼プラザホテル)
- 三十日 平泉観光協会理事会(執事長・総務快俊)
- 三十二日 北上川リバーカルチャーアソシエーション(以下、RCA)第二十回文化セミナー(貫首 於あいぼーと)
- ◇二月
- 一日 月次大般若(本堂)  
恒例大節分会(関取隠岐の海関 招く。歳男歳女百十四名、町内園児)
- 三日 光勝院建設委員会  
節分会(日数心経 本堂)
- 五日 平泉ユニバーサルデザイン観光推進会議(執事長 於役場)
- 六日 貫首 講演(関東民放クラブ様 於日本民間放送連盟)



- 貫首 エジプト大使館訪問
- 七日 讚衡蓮運営委員会
- 十一日 東日本大震災物故者追善回向月命日法要(本堂)
- 十四日 光勝院建設委員会
- 十五日 涅槃会(本堂)
- お経を読む会(地藏ノ秀厚)
- 十六日 浅草寺執事長守山雄順師他来山(執事長挨拶)
- 十七日 (二財)日本建築防災協会耐震改修建築・貢献者表彰式(澄元・管財章典 於東京)
- 二十日 平泉観光協会理事会(執事長)
- 二十一日 如意輪講式に関する会合(貫首・参与邦世・仁秀 於千葉泉養寺)
- 二十三日 平泉町上下水道事業運営協議会(管財章典 於役場)
- 二十五日 平泉観光協会通常総会(執事長 於商工会館)
- 平泉町文化財調査委員会

- 二十七日 (管財澄円 於文化遺産センター) 平泉町民の翼(三月一日、五大 於群馬富岡製糸場・長野善光寺方面)
- ◇三月
- 一日 月次大般若(本堂)
- 四日 三千院門跡御用達会様来山(貫首挨拶・執事長案内)
- 五日 平泉町世界遺産推進基金運営委員会(執事長 於文化遺産センター)
- 高野山真言宗仏教青年会様来山(東日本大震災物故者慰霊法要 本堂)
- 七日 第十五回世界遺産講演会(講師 木曾功氏 執事長・仏文所長邦世 於文化遺産センター)
- 八日 木曾功氏来山(執事長挨拶・仏文所長邦世案内)
- 十日 釜石市芸術文化協会へ支援金贈呈(参与邦世・総務快俊 於

- 釜石市役所)
- 十一日 京都市長岡京市仏教会様団参(総務快俊案内)
- 東日本大震災物故者追善回向月命日法要(本堂)
- 十四日 奥の細道千住あらかわサミット(十五日、参与邦世 於日暮里サニーホール)
- 十七日 国連防災会議・文化財シンポジウム(貫首 於ペリーノホテル)
- 十八日 光勝院建設委員会
- 十九日 基衡公御月忌(胎曼供 本堂)
- お経を読む会(業樹王院)
- 国連防災世界会議エクスカーション一行様来山(執事長挨拶)
- 春期定例一山会議
- 二十日 平泉古事の森育成協議会(管財章典 於役場)
- 二十一日 春彼岸会法要(法華三昧 本堂)
- 二十三日 境内一斉清掃

- 東稲山さくらの会結成会議(管財澄円 於役場)
- 二十四日 開山会(護摩供 開山堂)
- 二十五日 源義経公東下り行列保存会定期総会(総務快俊 於滝沢魚店)
- 二十六日 平泉文化観光振興基金運営委員会(執事長 於役場)
- 平泉町観光審議会(執事長 於役場)
- 中尊寺菊まつり協賛会役員会
- 三十日 千田孝信前貫首七回忌、日光観音寺墓参(執事長・参与秀圓)
- 三十一日 日光輪王寺訪問(小暮道樹師門主就任祝 執事長・参与秀圓)
- ◇四月
- 一日 月次大般若(本堂)
- 四日 御修法「熾盛光大法」(十一日 貫首 於延暦寺)
- 天台宗陸奥教区仏教青年会総会(執事長 大広間)
- 八日 仏生会(本堂)

- 福聚教会中尊寺支部定例総会(執事長 藤氏三代)
- お経を読む会(利生院)
- 十日 平泉観光協会理事会(執事長)
- 十一日 千田孝信前貫首七回忌法要(本堂)
- 東日本大震災物故者追善回向月命日法要(本堂)
- 十四日 ウィーンフィルコンサート実行委員会(総務快俊 於ペリーノホテル)
- 春の藤原まつり交通警備会議(管財 於芭蕉館)
- 平泉世界遺産登録五周年事業推進連絡会議(総務快俊 於県南広域振興局)
- 十六日 平泉町文化審議会(管財澄円 於平泉町文化遺産センター)
- 平泉町世界遺産登録五周年記念事業実行委員会設立総会(執事長 於役場)
- 弁慶力餅競技保存会総会

- (法務宏紹 於芭蕉館)
- 十七日 平泉商工会青年部通常総会(法務章典 於泉橋庵)
- 十八日 恒例花まつり子供大会
- 天台宗陸奥教区寺庭婦人会総会(執事長 大広間)
- 平泉菊花会総会(管財 於花みずき)
- 十九日 檀徒総代・世話人会総会(執事長・法務他 於武蔵坊)
- 二十一日 平泉世界遺産登録五周年事業推進会議設立総会(執事長 於エスポワールいわて)
- 二十三日 桜友会清掃奉仕(於北坂)
- 平泉観光推進実行委員会総会(執事長 於役場)
- 二十五日 名勝「おくのほそ道の風景地(さくら山)」指定記念西行桜の森まつり(執事長・管財澄円 於西行桜の森)
- 二十六日 光勝院建設委員会
- 二十七日 天台座主半田孝淳祝下白寿

祝賀会(貫首 於ウエスティン都ホテル京都)  
二十九日 西行法師追善法要(本堂)  
第三十六回西行祭短歌大会(講師秋葉四郎氏「西行の旅の歌考」)

◇五月

一日 春の藤原まつり開幕  
藤原四代公追善法要  
稚児行列  
郷土芸能奉演(関 行山流舞川鹿子躍)  
二日 開山護摩供(開山堂)  
春の藤原まつり「源義経公東下り行列」レセプション(貫首・執事長 於武蔵坊)  
郷土芸能奉演(江刺 行山流角懸鹿躍/平泉 達谷窟毘沙門神楽)  
三日 源義経公東下り行列(義経公役 俳優吉沢亮)  
郷土芸能奉演(衣川 川西念佛劍舞)

四日 古実式三番  
能 「竹生鳥」  
郷土芸能奉演(江刺 行山流都鳥鹿踊/胆沢 朴ノ木沢念仏劍舞)  
五日 古実式三番 「開口」  
狂言 「かねのね」  
半能 「鞍馬天狗」  
六日 山王講(山王堂)  
光勝院建設委員会  
十一日 東日本大震災物故者追善回向月命日法要(本堂)  
十二日 中尊寺菊まつり協賛会総会(執事長 大広間)  
十三日 一関警察官友の会役員会(執事長 於一関警察署)  
十四日 ウェーサカ仏教会総会(法務章興 於一関松竹)  
十五日 光勝院建設委員会  
古都ひらいずみガイドの会  
通常総会(総務快俊 於泉橋庵)  
十六日 第十八回仙台青葉能(貫首・随行宏紹 於仙台電力ホール)

十七日 淡交会県南支部様茶会(茶室・庫裡広間)  
お経を読む会(観音院)  
十八日 日中友好宗教者懇話会総会(貫首 於東京プリンスホテル)  
二十日 世界遺産登録五周年記念事業実行委員会(執事長 於役場)  
二十一日 天台宗海外伝道事業団理事会・総会(貫首 於宗務庁)  
平泉芭蕉祭全国俳句大会実行委員会(総務快俊 於役場)  
二十二日 平泉商工会通常総会(総務快俊 於商工会館)  
二十三日 奥の細道サミットin鹿沼(二十四日 参与邦世 於鹿沼市)  
二十四日 曲水の宴(執事長 於毛越寺)  
二十七日 光勝院建設委員会  
二十八日 四寺廻廊総会(執事長・総務快俊・光聰・法務宏紹 於電通東日本仙台支店)  
二十九日 深川木工組合様来山(参与邦世案内)

◇六月

一日 月次大般若(本堂)  
栃木不退寺様団参(法務宏紹案内)  
平泉町世界遺産推進協議会総会(執事長 於役場)  
光勝院建設委員会  
二日 貫首 対談(JAL機内誌「SK YWARD」 村上弘明氏 茶室)  
四日 伝教会(御影供 本堂)  
大池調査計画説明会(平泉文化遺産センター所長 及川司氏等による発掘スケジュール説明・成果報告 庫裡広間)  
平泉ユニバーサルデザイン観光推進会議(執事長 於役場)  
天台寺訪問(参与秀圓・澄順・光中・邦世・澄元・管財澄円・五大)  
五日 平泉世界遺産登録五周年事業推進連絡会議(総務快俊 於県南広域振興局)  
七日 隠岐の海関結婚披露宴(法務宏紹 於ANAインターコンチネ

八日 光勝院建設委員会  
貫首 法話(東京大観音寺様本堂)  
十一日 貫首 ニューヨーク別院十周年記念式典参列(十六日 随行晋照)  
東日本大震災物故者追善回向月命日法要(本堂)  
十三日 四寺廻廊法要(執事長他 於瑞巖寺)  
第二十三回ふるさと平泉会総会(総務快俊 於浅草ビューホテル)  
十四日 法華経一日頓写経会(本堂)



十五日 光勝院建設委員会  
十六日 一関警察官友の会総会(執事長 於豊隆会館)  
二十日 自在房蓮光忌法要(本堂)  
二十一日 大正大学前理事長杉谷義純先生慰労会(貫首 於上野精養軒)  
二十二日 山形東善院様団参(執事長挨拶)  
光勝院建設委員会  
二十三日 第六十五回社会を明るくする運動平泉町推進委員会(総務快俊 於役場)  
世界遺産登録五周年記念事業実行委員会(総務快俊 於役場)  
二十六日 陸前高田市小友地蔵尊「震災犠牲者追悼法要」(一隅を照らす運動総本部長横山照泰師・貫首・澄元)  
二十七日 「平泉世界遺産の日」平和祈願法要(本堂)  
「平泉世界遺産の日」シンポジウム(本堂)  
二十九日 第五十四回平泉芭蕉祭全国俳

句大会(於毛越寺)

- 西光寺京戸慈仁師来山(貫首・執事長・総務快俊挨拶)
- 平泉世界遺産の日平和の祈り(執事長他 於毛越寺)
- 光勝院建設委員会
- 一関市副市長平山大輔氏来山(退任挨拶 貫首 応接)

◇七月

- 一日 月次大般若(本堂)
- 二日 平泉水掛御輿警備会議(管財 澄円 於商工会館)
- 四日 世界遺産講演会(講師 世界遺産 産研究家久保美智代氏 執事長 於平泉文化遺産センター)
- 七日 ウェーサカ式典(法務章興・総代世話人 於花京大祥寺)
- 日光輪王寺門跡門主小暮道樹大僧正晋山披露宴(貫首・執事長・

随行亮王 於宇都宮グランドホテル

- 九日 讚衡藏運営委員会
- 光勝院建設委員会
- 十日 弁慶力餅競技保存会研修会(参拝秀厚 於大沢温泉)
- 十一日 東日本大震災物故者追善回向月命日法要(本堂)
- 十二日 如法写経十種供養会(写経奉納式)
- 十五日 平泉観光協会理事会(執事長 於武蔵坊)
- 十六日 平泉をきれいにする会(管財 五大 於役場)
- 十七日 清衡公御月忌(胎曼供 本堂)
- 十八日 富岡八幡宮神輿総代連合会 様来山(参与邦世案内)
- 富岡八幡宮神輿総代連合会 様との交流会(貫首・執事長 於武蔵坊)
- 十九日 平泉総社神輿渡御
- 二十一日 ウィーン・フィル奉納コンサート(能舞台)



平泉文化遺産センター新館長千葉信胤氏来山(執事長挨拶)

重要文化財白山神社能舞台保存修理に係る関係者会議(執事長・参与邦世・管財五大 於役場)

光勝院建設委員会

二十五日 貫首 講話(「青空説法」参与光中・秀厚同行 於多聞院伊澤家久那斗神社)

平泉総社神輿会「神酒開き」(執事長 於泉橋庵)

二十六日 夏休み早朝坐禅会(本堂)

中尊寺寺子屋(かんざん亭)

- 二十七日 大正大学人間学部人間環境学科一行様来山(総務快俊挨拶)
- 大正大学文学部歴史学科一行様来山(管財挨拶)
- 二十八日 光勝院建設委員会
- 桜友会清掃奉仕(開山堂)
- 三十日 平泉町文化財調査委員会(管財澄円 於文化遺産センター)
- 平泉大文字送り火警備会議(管財五大 於芭蕉館)

◇八月

- 一日 月次大般若(本堂)
- 故字部貞宏氏弔問(貫首・参与秀圓 於一関市宇部氏自宅)
- 二日 夏休み早朝坐禅会(本堂)
- 中尊寺寺子屋(かんざん亭)
- 光勝院建設委員会
- 故字部貞宏氏葬儀(執事長・参与光中・邦世 於一関文化センター)

念法真教立教九十年報恩大要(貫首・随行秀法 於金剛寺)

- 四日 戦没者慰霊法要・比叡山宗教サミット「世界平和祈りの集い」(貫首・随行秀法 於延暦寺)
- 十五日 半(平和の鐘)打鐘
- 五日 長島時子氏来山(管財五大)
- 六日 うるし塗り体験(参拝事業部・翁知屋 かんざん亭)
- 七日 紺紙金銀字経一卷、寺に還藏なる
- 夏堂籠り(十一日、結衆、開山堂)
- 九日 夏休み早朝坐禅会(本堂)
- 中尊寺寺子屋(かんざん亭)
- 光勝院建設委員会
- 十一日 岩手県知事達増拓也氏来山(岩手県と大正大学地域構想研究所との連携協定締結式 貫首 庫裡広間)
- 東日本大震災物故者追善回向月命日法要(本堂)
- 十四日 第三十八回中尊寺新能

狂言「悪太郎」

能「井筒」

十五日 山崎理恵子氏、平和合作画制作(本堂前)

平成二十七年平泉町成人式(総務光聰 於平泉文化遺産センター)

十六日 オオフジツボ 奉納演奏(本堂)

第五十一回平泉大文字送り火

十八日 貫首 インタビュー(東京FM様・大正大学関係)

十九日 インド及びスペイン外交官・グアテマラ大使来山(貫首挨拶)

二十日 観福寺施餓鬼会(真珠院・観音院・瑠璃光院)

毛越寺施餓鬼会(参与邦世)

二十二日 戸津説法(長山慈信師)聴聞(貫首・随行亮王 於大津市東南寺)

玉川学園ハンドベル部・オーケストラ部 奉納演奏



(本堂)

- 二十三日 施餓鬼会御逮夜(本堂)
  - 二十四日 大施餓鬼会・放生会(本堂)
  - 二十五日 大原實光院様来山(貫首)
  - 二十七日 宮古市郷土芸能団体連絡協議会訪問(総務快後)
  - 二十八日 東北運輸局新観光部長飛田章氏・鉄道部次長藤澤義人氏来山(執事長挨拶)
  - 三十日 蜂神社例大祭(総務光聰 於蜂神社)
  - 三十一日 龍玉寺施餓鬼会(法務宏紹)
- ◇九月
- 一日 月次大般若(本堂)
  - 瀬見温泉亀割観音祭礼(法務章興 於最上町亀割観音臺)
  - 三日 泰衡公御月忌(金曼供 本堂)
  - 五日 天台宗陸奥教区第二部檀信徒会ミニ一隅大会(於毛越寺)
  - 本堂法話(真珠院)
  - 光勝院建設委員会

- 七日 貫首 中国訪問(十二日 日中友好宗教者懇話会 随行亮王 真言宗豊山派東京青年会様来山(法務章興案内)
- 十日 昭和二十五年御遺体学術調査における四代クレントゲン写真解説説明会(庫裡広間)
- 十一日 東日本大震災物故者追善回向月命日法要(本堂)
- 十二日 五郎沼薬師神社例大祭(参拝 秀厚 於同神社)
- 十三日 寛永寺輪王殿視察(光勝院建設委員会 執事長・秀厚・澄円) 本堂法話(円乗院)
- 十七日 藤原経清公命日祭(於奥州市(江刺区) 白符忌(本堂 江刺餅田保存会様 参列)
- 浅草寺田中昭徳貫首晋山式(貫首・随行秀法 於浅草寺)
- 十九日 中尊寺文書調査(二十二日、東北大学大学院文学研究科教授柳

- 原敏昭氏等による中尊寺落慶供養願文の調査 大広間)
- 赤堂稲荷例祭(護摩供)
- 第六十一回平泉町敬老会(総務快後 於平泉中学校体育館) 本堂法話(貫首)



- 二十二日 復興大臣竹下亘氏来山(執事長挨拶・案内)
- 二十三日 秋彼岸会法要(本堂) お経を読む会(地藏院)
- 二十六日 月見坂車椅子体験会(二十七日、平泉ユニバーサルデザイン観光推進会議)
- 二十七日 本堂法話(円乗院)

◇十月

- 一日 月次大般若(本堂)
- 第二十三回平泉町社会福祉大会(総務快後 於武蔵坊)
- 二日 日本医学放射線学会(講演 円乗院 同行管財澄円 於盛岡市) 慈眼会(本堂)
- 三日 平泉町民号(五日、総務快後 於金沢・輪島方面)
- 四日 法華大会広学堅義(五日、貫首 於延暦寺) 山内願成就院法事(本堂) 本堂法話(地藏院)
- 五日 中尊寺菊まつり協賛会役員会(庫裡広間)
- 六日 平成二十七年岩手県暴力団追放県民大会・暴力団追放一関地方大会(執事長 於一関文化センター)
- 八日 貫首 エジプト大使館訪問
- 九日 平泉世界遺産登録五周年事業推進連絡会議(総務快後 於

- 十日 県南広域振興局) 三陸郷土芸能奉演(大船渡市菅生田植踊り) お経を読む会(常住ノ亮王)
- 十一日 三陸郷土芸能奉演(宮古市津軽石さんさ踊り/釜石市白浜虎舞/陸前高田市槻澤鑑念仏剣舞) 東日本大震災物故者追善回向月命日法要(本堂)
- 十二日 三陸郷土芸能奉演(山田町大浦さんさ踊り) 貫首 講演(平成二十七年全国青年団OB会第三十四回岩手大会 於鶯宿温泉ホテル森の風)
- 十四日 日蓮宗長胤寺様団参(貫首挨拶・亮王案内)
- 十五日 平泉観光協会理事会(執事長)
- 十六日 如意輪講式説明会(仏文所長 邦世 大広間)
- 十七日 貫首 講話(第五十六回日本母性衛生学会総会・学術集会 於盛岡市民文化ホール)

◇十一月

- 十八日 戸内雷神社例大祭(総務光聰 於雷神社) 埼玉教区第七部釈迦寺様団参(執事長挨拶) 本堂法話(貫首)
  - 十九日 北総教区来迎寺様団参(貫首挨拶)
  - 二十日 菊まつり開闢法要
  - 二十二日 光勝院建設委員会
  - 二十三日 東稲山さくらの会幹事会(管財澄円 於役場)
  - 二十五日 貫首 天台会出仕(於延暦寺) 本堂法話(貫首)
  - 二十八日 秀衡公御月忌(金曼供 本堂)
- ◇十一月
- 一日 秋の藤原まつり開幕 藤原四代公追善法要 稚児行列 郷土芸能(江刺 行山流角懸鹿躍/胆沢 朴ノ木沢念仏剣舞)
  - 二日 菊供養会(本堂) お経を読む会(貫首)

- 三日 中尊寺能「猩々」、謡・仕舞  
 (二葉きり園、一閑喜桜会奉納能舞台)
- 四日 長崎たちばな信用金庫様一行来山(執事長挨拶)
- 五日 天台宗天聲会様来山(東日本大震災被災地復興祈念法要 本堂) 花園大学同窓会宮城県支部様来山(執事長挨拶・晋照案内)
- 八日 天台宗一隅を照らす運動震災復興祈念大会(於平泉小学校体育館)
- 九日 函館市役所・JR北海道表敬訪問(十日、執事長)
- 十日 写経奉納式(本堂)
- 十一日 東日本大震災物故者追悼並びに小友地藏尊東屋落成法要(貫首・大長寿院・金剛院・法務章興 於陸前高田市)
- 東日本大震災物故者追善回向月命日法要(本堂)
- 十五日 菊まつり表彰式(天広間)
- 十六日 重要文化財白山神社能舞台保存修理に係る関係者会議(執事長・総務快後・管財澄円 於役場)
- 世界遺産登録五周年記念事業実行委員会総務光聴 於役場)
- 国連子どもの未来を作る会様十名来山(貫首案内)
- 第二回町道衣関線及び周辺地域整備住民懇談会(総務快後・管財澄円 於二区公民館)
- 十九日 平泉町芸術文化協会創立三十周年記念祝賀会(執事長 於武蔵坊)
- 二十日 中尊寺大池跡発掘調査現地説明会
- 一関文化祭菊花展表彰式(管財澄円 於一関文化センター)
- 二十一日 中尊寺通りホコ天まつり開会式(総務快後 於中尊寺通り)
- 二十三日 天台会御速夜(本堂)
- 二十四日 天台会(御影供 本堂)
- 平泉ユニバーサルデザイン観光推進会議(執事長 於武蔵坊)
- 二十五日 福聚教会陸奥地方本部詠唱・舞踊研修会開講式(執事長 於武蔵坊)
- 二十六日 経済講演会及び平泉町企業懇談会(総務快後 於武蔵坊)
- 二十七日 花巻温泉創業八十八周年記念祝賀会(執事長 於ホテル千秋園)
- 二十八日 境内一斉清掃 一関大門地藏尊参拝(貫首・澄元・秀法)
- 二十九日 山内法泉院法事(本堂)

### 御奉納者 御芳名

平成二十六年十二月〜平成二十七年十一月

#### 一 菜種油 四斗

平泉町 平泉なのはな会様

#### 一 地藏尊前掛け並びに帽子 一式

豊川市 竹内優子様

- 浄財御奉納者 御芳名
- 平成二十六年十二月〜平成二十七年十一月
- (有)豊隆軌道様 十万円
- 満祈会様 十万円
- 浄土宗岩手教区教務所様 五万円
- 海鋒 守様 三万円
- (有)平泉観光写真社様 三十万円
- 立正佼成会 盛岡教会様 三万円
- 立正佼成会 花巻教会様 三万円
- 念法眞教 総本山 金剛寺様 五万円
- 浅草寺様 十万円
- 三千院門跡 堀澤祖門様 三万円
- 三千院門跡 御用達会様 五万円
- 高野山真言宗 神奈川青年教師会様 五万円
- 柘田智子様 三万円
- 菊池國雄様 五万円
- 西光寺様 三万円
- 宮部亮慶様 三万円
- 裏千家 淡交会 岩手県南支部様 十八万円
- 松尾宗久様 百万円
- 大聖院様 十万円
- 不退寺様 五万円
- (有)千葉恵製菓様 十万円
- 和堂先生を偲ぶ会 佐藤芙蓉様 十万円
- 天台宗務総長 木ノ下寂俊様 三万円
- 西光寺様 三万円

|     |                  |       |
|-----|------------------|-------|
| 一関市 | 小巖和紀様            | 三万三千元 |
| 盛岡市 | 横浜キミ様            | 三万三千元 |
| 新宿区 | (有)シー・エヌエス様      | 三万円   |
| 一関市 | (株)東北鉄興社様        | 三万円   |
| 一関市 | 桜町中学校三年A組一同様     | 三万円   |
| 銚子市 | (株)イクオリティー 石毛裕之様 | 三万円   |
| 平泉町 | 一関信用金庫平泉支店様      | 三万円   |
| 栗原市 | (有)金成工務店様        | 三万円   |
| 倉敷市 | 岸田明久様            | 三万円   |
| 一関市 | 東北建工企業(株) 今野幸広様  | 三万円   |
| 神戸市 | 佐々木勝巳様           | 三万円   |
| 大崎市 | 佐々木則雄様           | 三万円   |
| 一関市 | 山平様              | 三万円   |
| 一関市 | 一八 渋谷正幸様         | 三万円   |
| 一関市 | (株)精茶百年本舗様       | 三万円   |
| 盛岡市 | 中村京子様            | 三万円   |
| 北海道 | 成澤宗範様            | 三万円   |
| 本吉町 | 橋村秀雄様            | 三万円   |
| 平塚市 | 橋本優子様            | 三万円   |
| 一関市 | 橋本優子様            | 三万円   |

衡年茶二二〇〇個

|                     |       |
|---------------------|-------|
| 富富恵美子様              | 十万円   |
| 一関信用金庫 平泉支店様        | 三万円   |
| (順不同)               |       |
| 不動尊篤信御奉納者 御芳名       |       |
| 平成二十六年十一月～平成二十七年十一月 |       |
| 中野区 中村武司様           | 十二万円  |
| 一関市 (有)豊隆軌道 千葉幸八様   | 十一万円  |
| 平泉町 川嶋印刷(株) 菊地慶矩様   | 十万円   |
| 青森市 佐々木幸子様          | 八万円   |
| 村山市 小野松悦様           | 六万円   |
| 和泉市 辻林正博様           | 六万円   |
| 平泉町 (株)ゴトウ 千葉和正様    | 四万五千元 |
| 旭川市 渡邊良弘様           | 四万円   |
| 宮城県 富谷町 小山利男様       | 三万五千元 |
| 秋田市 木村英夫様           | 三万五千元 |
| 北上市 平野絵里様           | 三万円   |
| 宮城県 南三陸町 山口 昇様      | 三万円   |
| 青森県 南部町 工藤一男様       | 季每御供物 |
| 二戸市 米沢 励様           | 季每御供物 |
| 新潟市 松原晴樹様           | 季每御供物 |
| 大仙市 (有)ベル美容室 高橋紀美世様 | 季每御供物 |
| 水戸市 藤枝恵枝子様          | 季每御供物 |
| 黒石市 (有)池田不動産 池田陸奥男様 | 季每御供物 |
| 平泉町 岩間智子様           | 季每御供物 |



▽ 昨年六月「平泉世界遺産の日」シンポジウムが中尊寺本堂で開催され、本号に講演録を収載しました。パネルディスカッションの中で藤沢摩彌子氏が「今生きている私たち一人ひとりの行いが文化につながっているのではないか」と語られたのが印象に残っています。

▽ 平成二十三年の東日本大震災から五年。同年「平泉」が世界文化遺産となった時、「平泉が復興に向かう皆さんの勇気となつてほしい」、「平泉は、精神的、文化的復興に向かおうとする東北の未来を照らす希望の光です」と多くの方がおっしゃっていたことを、私たちはもう一度胸に刻み込まなければならぬと感じています。

▽ 「百福是集」、小畑敏満さん（前日本相撲協会理事長、元横綱北の湖）は近年、この言葉をよく色紙に揮毫し「たくさんの福が全員に集まるように」という意味だよ」と微笑みながら語っていたという（岩手日報・十二月二十一日「追想 メ・モリ・アル」）。貧困・格差・災害・テロという言葉を書く日が続いた昨年。本年は「福」がキーワードとなる一年でありますように。

（北嶺澄照）

寺報「関山」は、中尊寺ホームページで閲覧が可能です。ぜひ利用下さい（<http://www.chusonji.or.jp/>）。

中尊寺（寺報）「関山」第二十一号

平成二十八年（二〇二六）一月二十日

発行 中尊寺

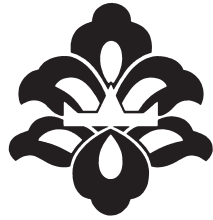
（執事長 清水広元）

〒〇二九一四一九五

岩手県平泉町字衣関二〇二

編集 中尊寺仏教文化研究所

印刷 川嶋印刷（株）



〈発行 中尊寺〉